望月町文化財調査報告書　第20集

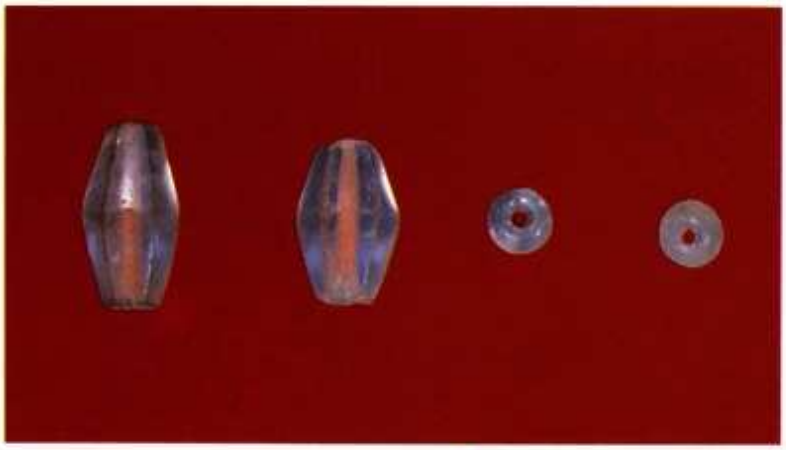
山ノ神A遺跡
山ノ神第3号古墳
山ノ神第4号古墳

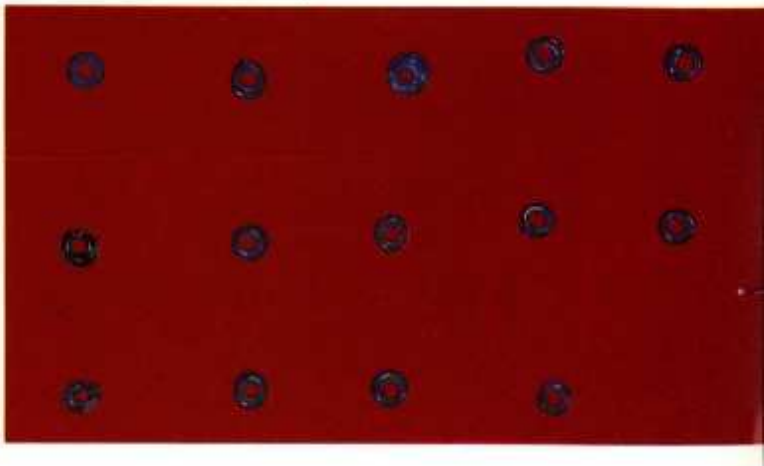
―緊急発掘調査報告書―

1991.3

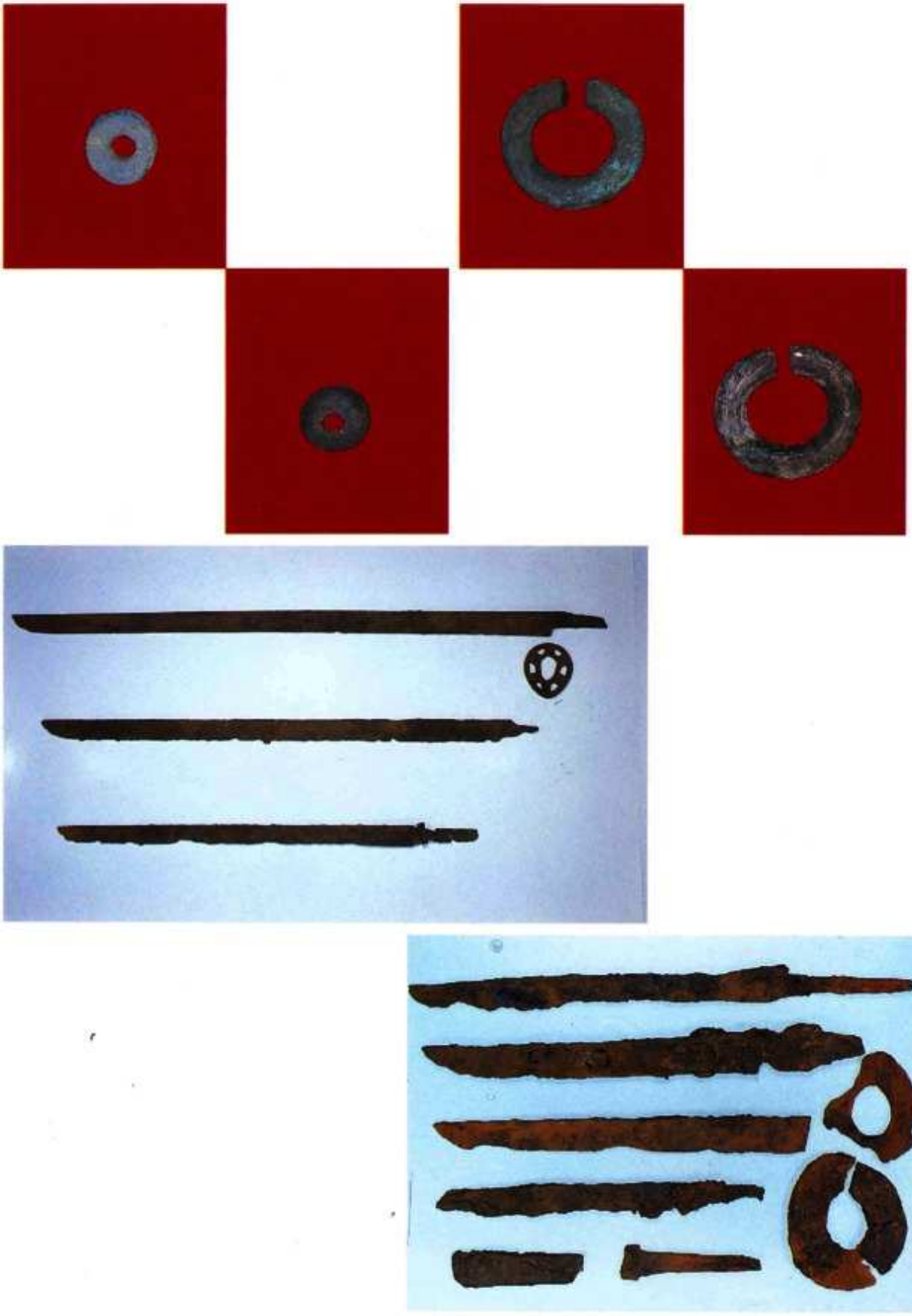
望月町教育委員会

口絵１　山ノ神第３号古墳出土遺物

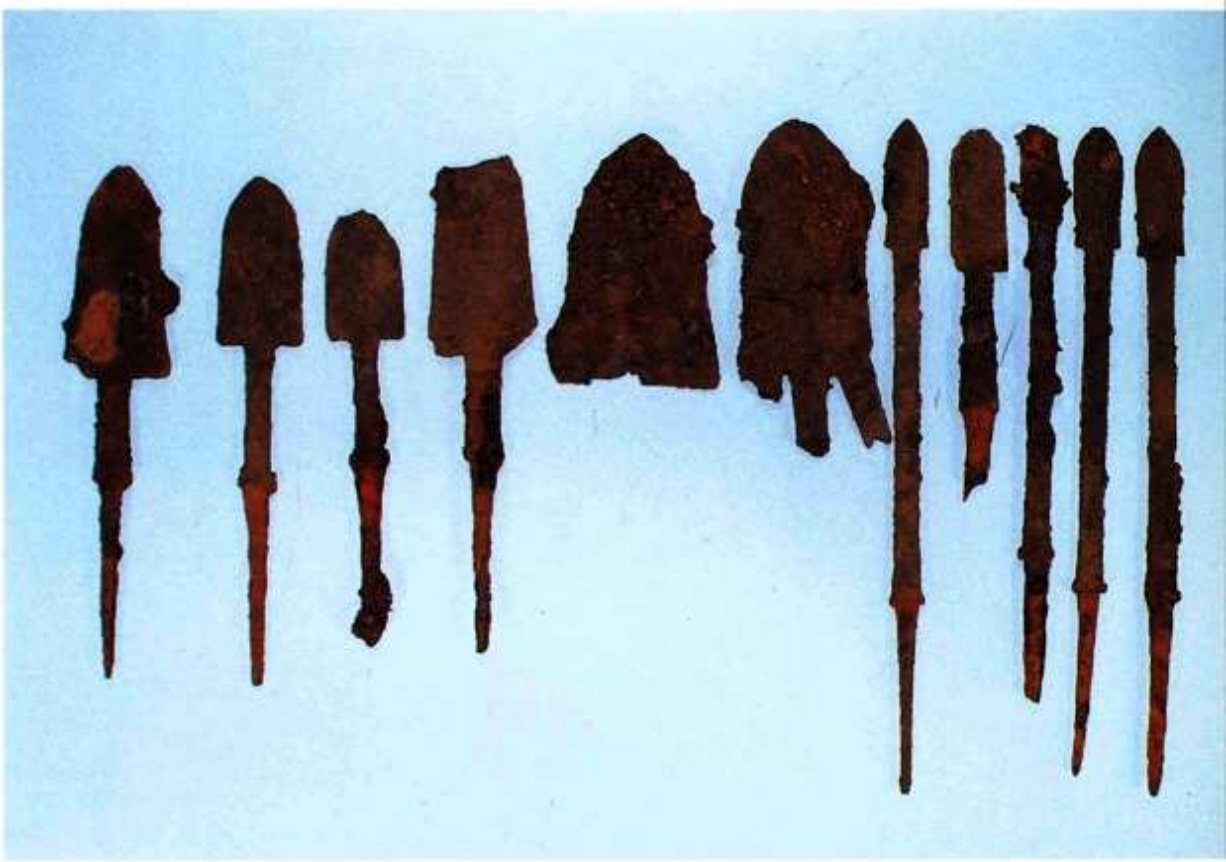


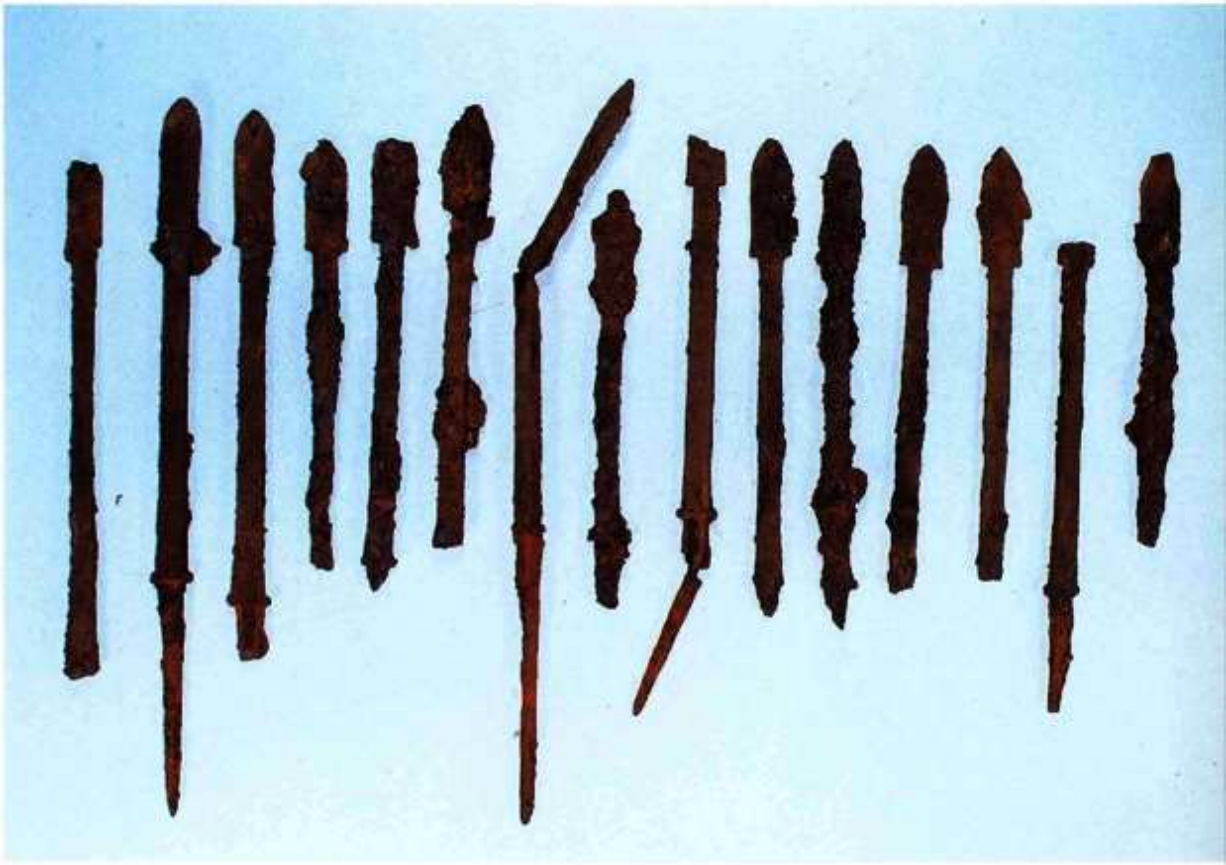


口絵 2　山ノ神第 3 号古墳出土遺物

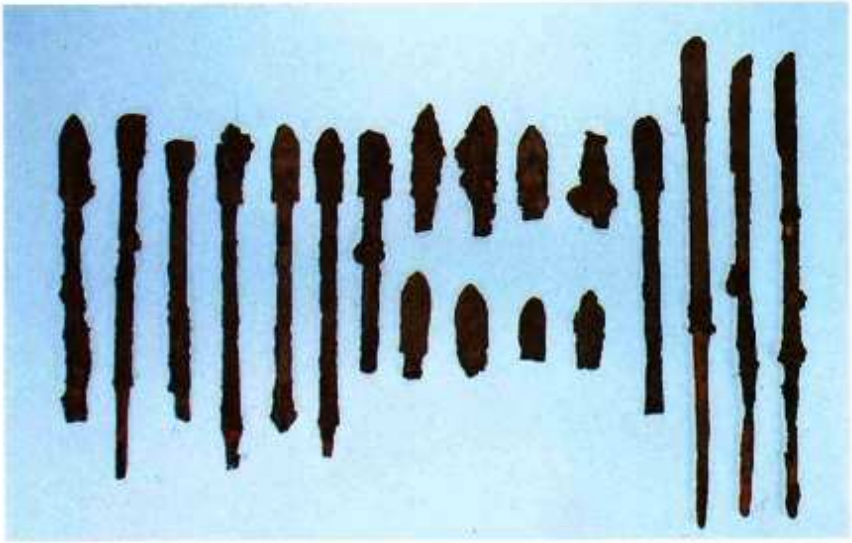


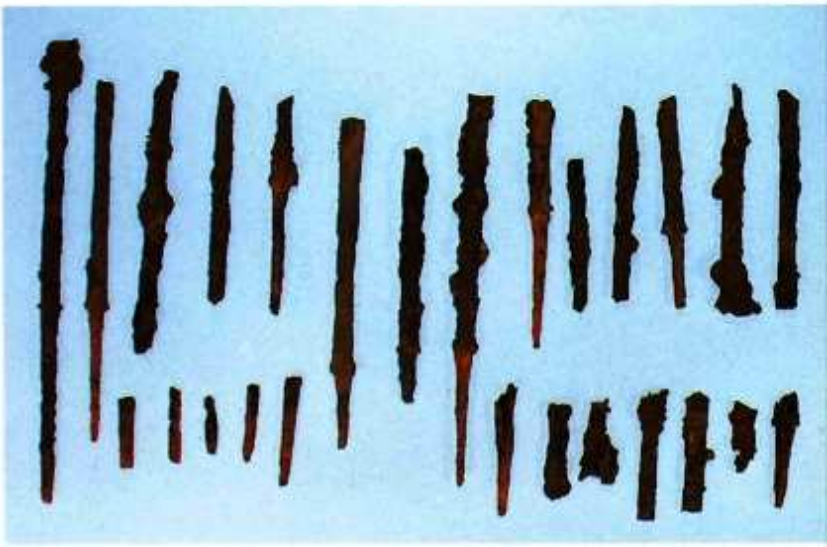
口絵3　山ノ神第3号古墳出土遺物

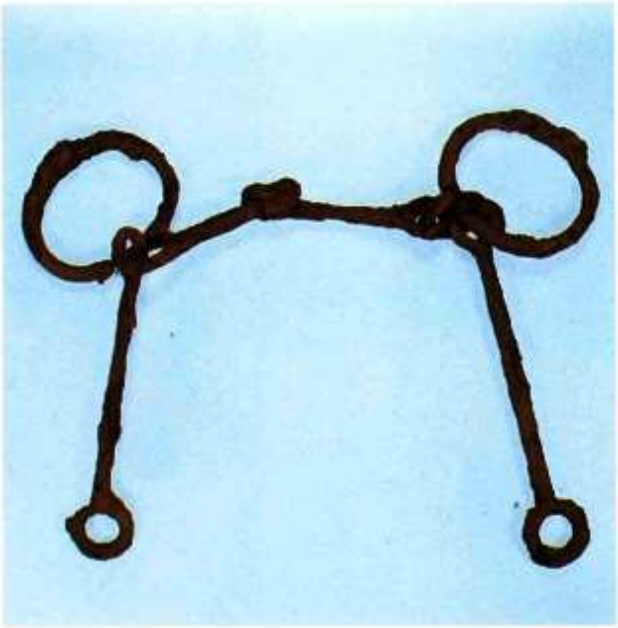




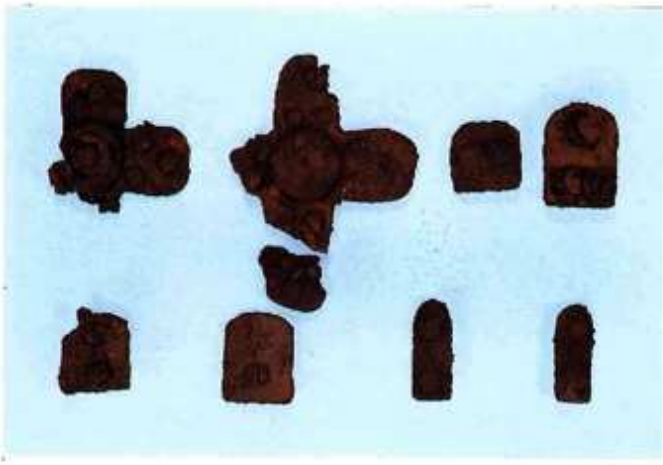
口絵４　山ノ神第３号古墳出土遺物

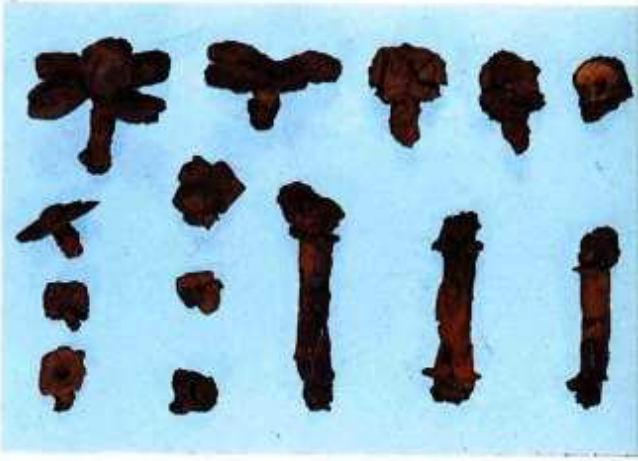


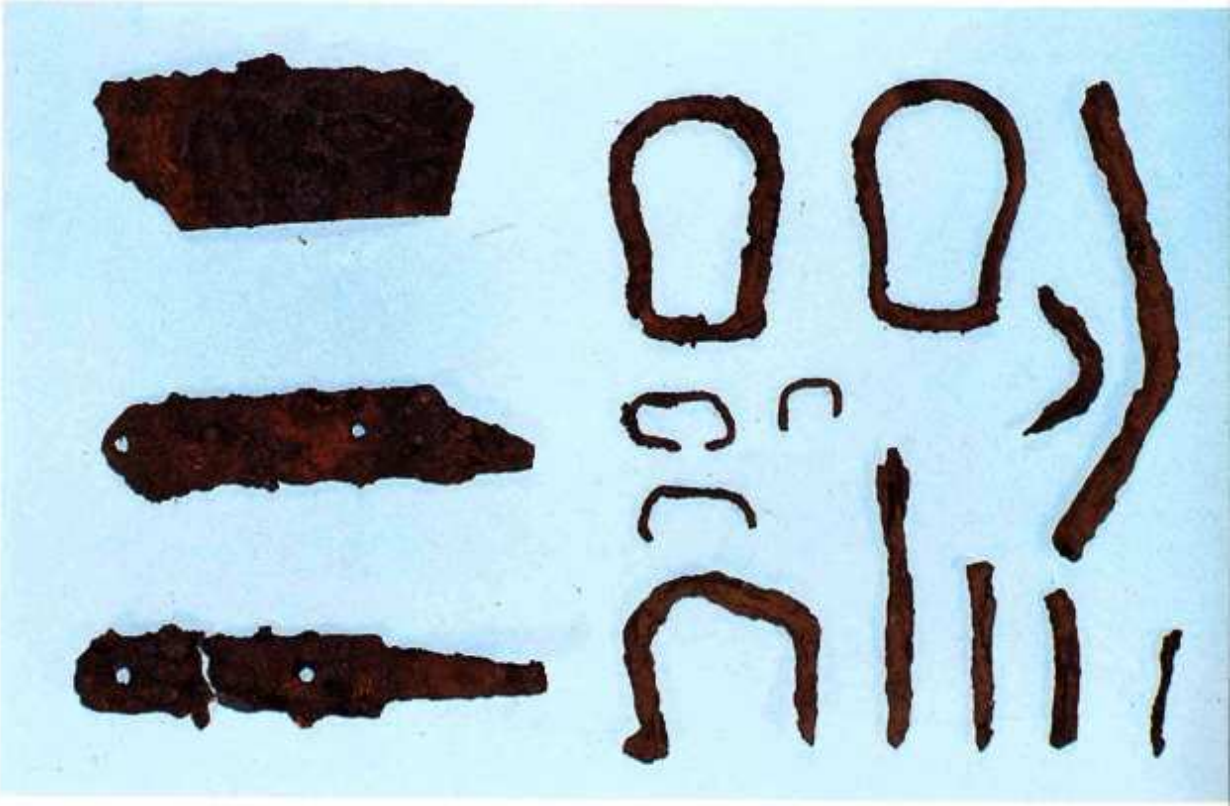




口絵5　山ノ神第3号古墳出土遺物

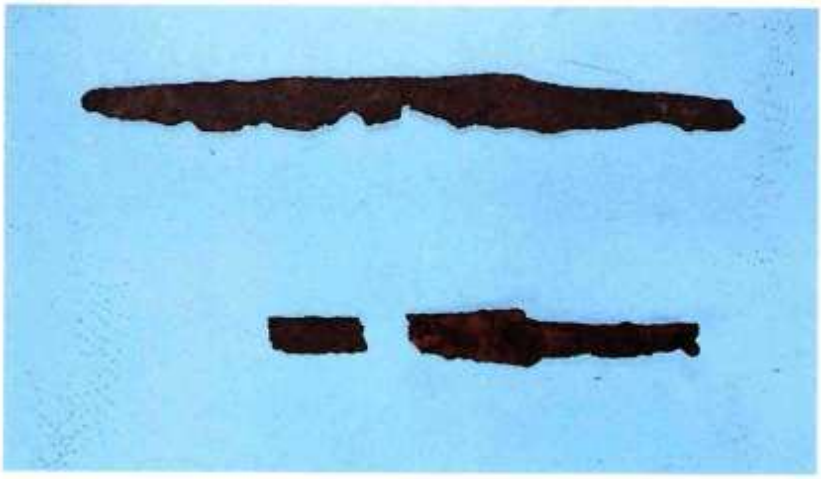


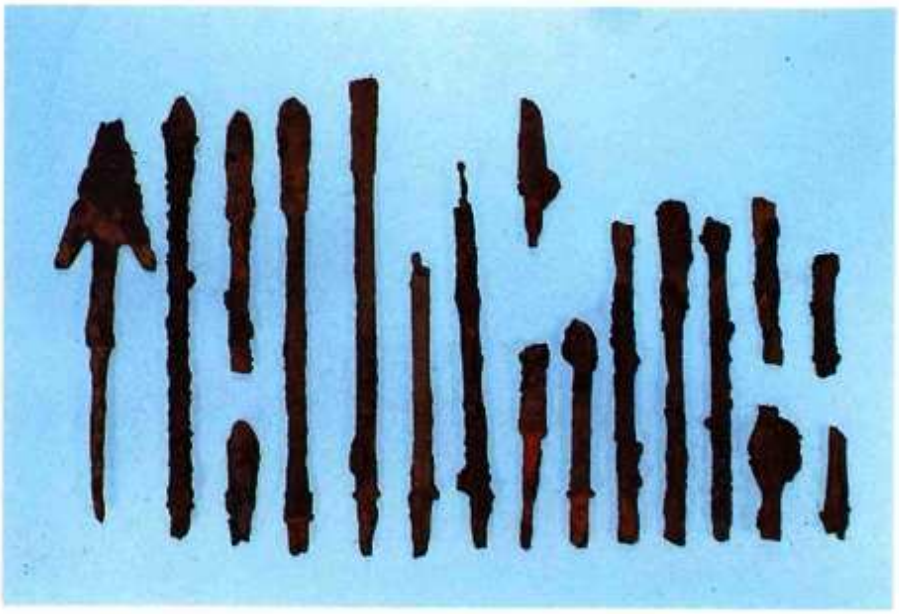




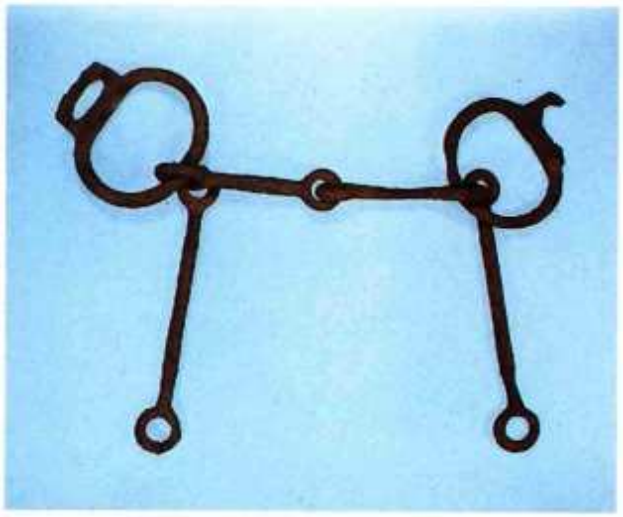
口絵 6　山ノ神第 4 号古墳出土遺物

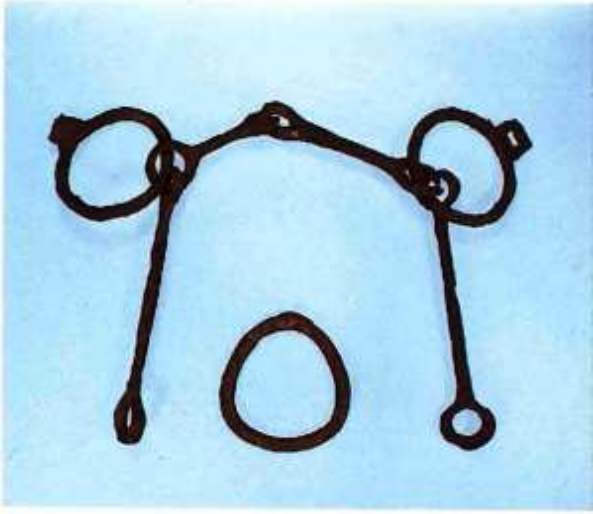
口絵7　山ノ神第4号古墳出土遺物

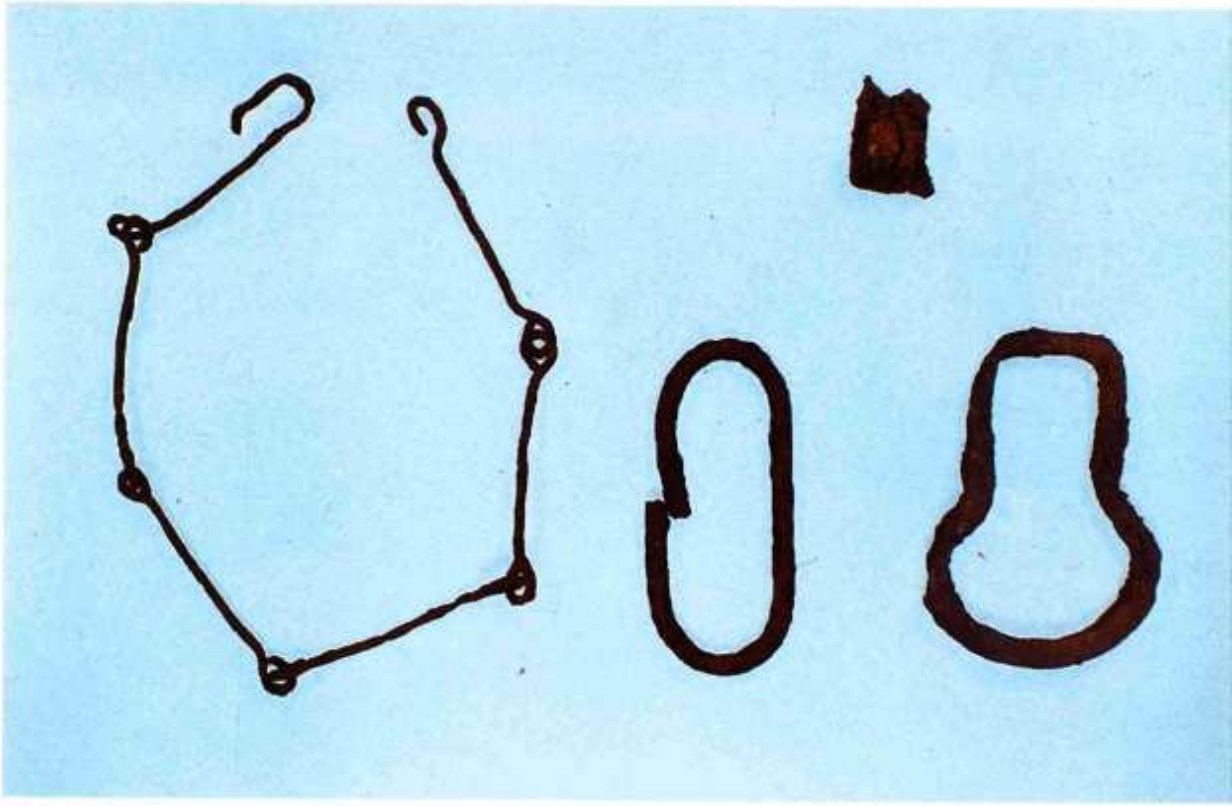




口絵 8　山ノ神第 4 号古墳出土遺物







序

ここに、平成元年度に実施した山ノ神A遺跡ほか（山ノ神A遺跡・山ノ神第３号古墳・山ノ神第４号古墳）緊急発掘調査の実績報告書として、平成２年度「山ノ神A遺跡・山ノ神第３・４号古墳緊急発掘調査報告書」が刊行される運びとなりました。

本遺跡の発掘調査は、県道バイパス建設工事に先立って実施されたもので、本線に係る調査は、第１次の天神城跡緊急発掘調査に次いで２例目になり、遺跡数からみると４遺跡の発掘調査を実施したことになります。

山ノ神A遺跡は、耕作の手がすでに入り、生活址の痕跡が僅かに確認されただけでありましたが、古墳の調査では大きな成果を上げることができました。望月町には多くの古墳が存在しています。八丁地川水系では、山ノ神古墳群をはじめ、内裏塚第１・２号古墳、昭和57年度に発掘調査を実施した真光寺第１号古墳及び古墳群、昭和55年度に発掘調査を実施した尾崎第４号古墳及び同古墳群、大塚第１・２号古墳及び同古墳群、鹿曲川水系では、金塚古墳群、栃久保第１・２号古墳、姫塚古墳、王塚古墳、武陵古墳群、上新井原古墳、布施水系では、柳沢古墳群、布施山寺古墳、大林古墳群などが存在していますが、それらの多くは盗掘が行なわれ、副葬品が盗まれたり、天井石や石室の石が持ち出されたり、さらには開墾や道路・住宅の建設等で破壊されたものがかなり含まれています。本発掘調査の対象となった山ノ神第３・４号古墳もその例にもれず、調査前の状態は決して保存が良いものではありませんでした。しかし、精密で丁寧な調査により、特に第３号古墳は内部の石室が極めて良好な状態で残っており、また、第４号古墳とともに玉類や馬具など多くの遺物が出土し、先人の重々しい文化の足跡を真のあたりに見た思いがします。

これらの調査により、郷土の歴史が広く日本史的視野の中で刻一刻とその全容を私たちの前に現す日が近いことを感じておりますし、また、本調査の成果を永く後世に伝えていく重責を痛感するものであります。

山懐深い蓼科山を背景に、千数百年の静寂から今よみ返った古墳は、現代の社会に何を投げかけているのでしょうか。少なくとも、先人の築き上げてきた足跡を認識し、守り、後世に永く伝えていくことは、現代社会にとって重要な使命であると思います。

本書が記録保存の役目を担って多くの方々に利用され、郷土を再認識し、益々の歴史発展の足掛かりともなれば幸いと存じ願うものであります。

発掘調査に際して、顧問の森嶋　稔先生をはじめ調査員・作業の皆様には熱意あふれるご指導ご協力をいただきました。衷心より敬意と感謝の意を表する次第であります。

1991年３月20日

望月町教育委員会

教育長　田中　稔

例　　言

調査及び報告書作成業務

1．本報告書は、平成元年11月13日～12月28日まで現地発掘調査を実施した山ノ神A遺跡ほか（山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳）緊急発掘調査の報告書である。

2．本発掘調査は、県単道路整備事業県道バイパスの建設に先立って望月町が直営で実施し、教育委員会と教育委員会が組織した発掘調査団がその任に当った。

3．遺構の実測は、臼田俊保・金井重恭・山本賢治が行ない、福島茂子・小野沢ちえ子・上野知一がその補助を行なった。

4．遺構の写真撮影は、福島邦男が行なった。

5．遺物の洗浄は、上野知一・小野沢直次・小池嘉一・上野清次・小野沢ちえ子・福島茂子が行ない、遺物への注記は福島茂子が行なった。

6．遺物の復元は、倉見　渡・金井重恭・吉沢浩矣が行なった。

7．遺物の実測は臼田俊保が、トレースは福島茂子が行なった。

8．遺構図のトレースは、福島邦男が行なった。

9．遺物の写真撮影は、福島邦男が行ない、その補助を倉見　渡・掛川喜四郎・福島茂子が行なった。

10．図及び図版の作成は、福島邦男・福島茂子が行なった。

11．本書の執筆は、序文……田中　稔・目次関係……福島茂子・第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章……福島邦男が行なった。

12．発掘調査に係る書類・図面・写真・遺物等全ての資料は、望月町教育委員会が保管している。

本書の内容

1．本書は、山ノ神A遺跡・山ノ神第3号古墳・山ノ神第4号古墳の3遺跡を一冊にまとめたもので、遺跡単位にそれぞれの内容を記載した。

2．それぞれの遺跡の出土遺物は比較的限定しているため、掲載に耐えうる資料はできるだけ本書に取り上げた。

3．位置図及び分布図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1と望月町発行の5,000分の1を使用した。

本文目次

口絵
序
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査の構成……2
　第3節　調査団組織……3
　第4節　調査の経過（調査日誌）……3
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……5
　第1節　遺跡の立地と自然的環境……5
　第2節　遺跡の歴史的環境……8
第Ⅲ章　山ノ神A遺跡……11
　第1節　縄文時代の遺物……11
　第2節　古墳時代の遺構と遺物……17
　第3節　平安時代の遺物……17
第Ⅳ章　山ノ神第3号古墳……18
　第1節　遺　構……18
　第2節　遺　物……24
第Ⅴ章　山ノ神第4号古墳……46
　第1節　遺　構……46
　第2節　遺　物……51
第Ⅵ章　総　括（考察）……54
図版

挿図目次

第1図　山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳位置図（1：50,000）……6
第2図　山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳周辺の遺跡分布図（1：10,000）……6
第3図　山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳グリッド配置及び遺構全体図（1：600）……9・10
第4図　第1号土壙実測図（1：60）……12
第5図　遺構外出土土器実測図（1：3）……13
第6図　遺構外出土土器実測図（1：3）……15
第7図　遺構外出土石器実測図（1～13・1：2、他1：4）……16

第８図　遺構外出土石器実測図（１:４）　……17
第９図　第３号古墳実測図（1：30）……19・20
第10図　第３号古墳石室実測図（1：30）……21・22
第11図　第３号古墳出土直刀実測図（１:５）　…25
第12図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…26
第13図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…27
第14図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…29
第15図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…30
第16図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…31
第17図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…32
第18図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…33
第19図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…34
第20図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…43
第21図　第３号古墳出土遺物実測図（１:２）　…44
第22図　第３号古墳出土土器実測図（１:３）　…45
第23図　第４号古墳実測図（1：60）　……47
第24図　第４号古墳出土遺物実測図（１:２）　…48
第25図　第４号古墳出土遺物実測図（１:２）　…49
第26図　第４号古墳出土遺物実測図（１:３）　…50
第27図　第４号古墳出土土器実測図（１:３）　…51
第28図　望月町周辺の古墳分布図……55

表　目　次

第１表　山ノ神Ａ遺跡周辺の遺跡一覧表……７
第２表　第３号古墳出土装飾品一覧表……28
第３表　第３号古墳出土鉄鏃統計表……35
第４表　第４号古墳出土装飾品一覧表……51
第５表　第４号古墳出土鉄鏃統計表……52
第６表　望月町周辺の古墳一覧表……56

図版目次

図版１　Ａ遺跡全景
図版２　Ａ遺跡全景
図版３　Ａ遺跡全景
図版４　Ａ遺跡全景
図版５　第３号古墳
図版６　第３号古墳
図版７　第３号古墳
図版８　第３号古墳
図版９　第３号古墳
図版10　第３号古墳
図版11　第３号古墳
図版12　第３号古墳
図版13　第３号古墳
図版14　第３号古墳
図版15　第３号古墳
図版16　第３号古墳
図版17　第３号古墳
図版18　第３号古墳
図版19　第３号古墳
図版20　第３号古墳
図版21　第３号古墳
図版22　第３号古墳
図版23　第３号古墳
図版24　第３号古墳
図版25　第３号古墳
図版26　第４号古墳
図版27　第４号古墳
図版28　第４号古墳
図版29　第４号古墳
図版30　第４号古墳
図版31　第４号古墳
図版32　第４号古墳
図版33　Ｂ遺跡経過
図版34　調査経過

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経過

本発掘調査は、山ノ神Ａ遺跡・山ノ神第３号古墳・山ノ神第４号古墳を含め、山ノ神Ａ遺跡ほかとして総称しているものである。調査原因は、県道バイパスの建設工事に先立って実施したものであり、当町においては本件が昭和55年度実施の天神城跡発掘調査に次いで２件目である。尚、平成２年度には、天神城跡の第２次発掘調査を実施したことを付記しておく。また、道路関連の発掘調査では、昭和53年度犬飼遺跡、昭和55年度尾崎４号古墳、大塚１・２号古墳、昭和58年度胡桃沢遺跡、瓜生坂Ａ遺跡、宮久保Ａ遺跡、布施山寺Ａ遺跡、岩井遺跡があり、いずれも国道142号線バイパス建設工事に先立って実施したものである。

事業は、望月町と佐久建設事務所が委託契約を締結し、望月町教育委員会が主体になり発掘調査を実施した。予算は、全額佐久建設事務所負担とし、望月町が直営で処理を行なった。尚、本事業は、平成元年度が発掘調査と一部整理、平成２年度が整理と報告書刊行事業で、継続事業で実施をし、その経過は以下のとおりである。

昭和63年度

３月16日　「埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について」（依頼）63佐建第472－５号

平成元年度

４月11日　「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業計画について」（伺）

４月24日　「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査労働災害保険関係成立届について」（提出）

４月28日　「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査労働災害保険概算払について」（提出）

４月28日　「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の作業参加者の雇用について」（伺）

４月28日　「平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査の雇用の通知と参加者全体の事前会議について」（伺）

８月７日　「平成２年度国道・県道・河川改修等の開発事業に係る埋蔵文化財の保護について」（提出）元望教第1132号

11月６日　「平成元年度山ノ神Ａ遺跡ほか緊急発掘調査の実施について」（伺）

11月８日　「埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について」（依頼）元佐建第1012号

11月13日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（提出）元望教第1456号

11月13日　「埋蔵文化財包蔵地の発掘調査委託契約の締結について」元望教第1446号

11月13日　『発掘調査の開始』

３月12日　「埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部変更契約の締結について」（依頼）元佐建第1012号

３月12日　「埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部変更契約の締結について」（締結）２望教第1446

号

3月31日　「平成元年度文化財保護事業の完了について」（届）2望教第238号

3月31日　「竣工（完了）検査結果通知書」

3月31日　「平成元年度文化財保護事業実績報告書」（提出）2望教第238号

平成2年度

4月2日　「埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について」（依頼）2佐建第53号

4月16日　「平成2年度山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査の整理及び報告書刊行事業について」(伺)

4月16日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査における顧問及び調査員の委嘱について」（伺）

4月20日　「埋蔵文化財発掘調査委託契約について」（締結）2望教第314号

4月23日　『整理事業の開始』

2月18日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査報告書の印刷製本について」（伺）

2月20日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査報告書の印刷製本について」（伺）

2月22日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査報告書の印刷製本について」（伺）

2月25日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査報告書の印刷製本について」（伺）

2月28日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査報告書印刷製本委託契約の締結について」（締結）

3月15日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査委託契約の変更契約について」（締結）

3月31日　「平成2年度埋蔵文化財緊急発掘調査事業山ノ神A遺跡ほか緊急発掘調査実績報告書について」（提出）

第2節　発掘調査の構成

1．遺　跡　名　山ノ神A遺跡・山ノ神第3号古墳・山ノ神第4号古墳

2．所　在　地　長野県北佐久郡望月町大字協和字山ノ神河原3051－1、3050－1
字上吹上3006、3046－1、3047－1

3．調査原因　県道望月・浅田切線高呂バイパス建設事業に伴い遺跡に影響が及ぶため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図る。

4．調査依託者　佐久建設事務所長　宮島　茂

5．調査受託者　望月町長　佐藤幸男

6．調査主体　望月町教育委員会　教育委員会が組織した発掘調査団

7．調査期間　（平成元年度）　平成元年11月13日～平成２年３月31日

（平成２年度）　平成２年４月23日～平成３年３月31日

8．調査面積　1,500㎡

9．調査方法　山ノ神Ａ遺跡……３ｍ×３ｍグリッドによる平面発掘法

山ノ神第３・４号古墳……トレンチ法主体　石室内部は平面発掘法

周溝部はトレンチ法

第３節　調査団組織

1．顧　　問　森嶋　稔（長野県考古学会長・長野県埋蔵文化財保護指導委員・千曲川水系古代文化研究所主幹・望月町誌編纂委員長・日本考古学協会員）

2．調査団長　田中　稔（望月町教育委員会教育長）

3．調査担当者　福島邦男（望月町教育委員会学芸員・日本考古学協会員）

4．調　査　員　渡辺重義（軽井沢町文化財専門委員・長野県考古学会員）

倉見　渡（長野県考古学会員）

掛川喜四郎（望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会員）

吉澤浩矣（望月町遺跡調査員）

金井重恭（望月町文化財保護審議会委員・長野県考古学会員）

臼田俊保（長野県考古学会員）

山本顕治（長野県考古学会員）

5．調査補助員　福島茂子、小野澤ちえ子

6．作　業　員　（平成元年度）上野知一、小野澤直次、小池嘉一、上野清次、市川　豊、市川吉治、高橋甫太、佐藤久衛、上野知子、小野澤恒夫、渡辺佐祖二

7．事　務　局　望月町教育委員会社会教育係

第４節　調査の経過（調査日誌）

平成元年度

11月13～14日　13日より重機による表土剥ぎを開始する。調査地区内に用水路があるため排水路等の設定も行なう。

11月15日　助役、教育長、教育次長、社会教育係長、担当者、調査員、作業員等の出席の元、地主主催による神事が行なわれ、合わせて結団式を実施する。午後から山ノ神Ａ遺跡のグリッド設定を始める。

11月16～18日　グリッド設定を行ない、併行してグリッド掘りも実施する。表土剥ぎは引き続いて実施する。縄文式土器片、土師器、須恵器片

が少量出土する。

11月20日　表土剥ぎを引き続き行なう。グリッド掘りにより鉄平石が平坦に存在している部分が見つかる。本日より原形写真を撮るため、第3号古墳の清掃を開始する。

11月21～22日　第3号古墳の清掃と写真撮影を行ない掘り込みを開始する。天井石、奥壁、側壁など、石室の構造がかなり明確に現れる。

11月24～28日　墳丘の掘り込み、範囲確認作業、主体部の掘り込みを行なう。床面直上まで掘り込み、直刀、刀子、鉄鏃、曲玉、切子玉、丸小玉、臂、雲珠、辻金具が出土する。出土量多数。

11月29～30日　第3号古墳主体部の清掃を行ない写真撮影を実施する。A遺跡のグリッド設定とグリッド掘りを再び実施する。

12月1～2日　第3号古墳の測量準備及び廃土ふるいを行なう。廃土中よりガラス玉が見つかる。第4号古墳の墳丘実測とトレンチ掘りを行なう。

12月4～7日　A遺跡のグリッド掘り、第3号古墳の実測と廃土ふるい、第4号古墳のトレンチ掘りを行なう。廃土よりガラス玉が出土する。

12月8～12日　A遺跡のグリッド掘りを続ける。縄文式土器、土師器、須恵器が出土する。第3号古墳の実測、第4号古墳の掘り込みを行なう。鉄鏃、曲玉が出土する。

12月13～16日　A遺跡の実測も含め遺跡全体測量を実施する。第3号古墳の実測を継続する。第4号古墳の清掃と写真撮影を行なう。

12月18～22日　第3号古墳の実測を終了し、再び写真撮影を実施する。第4号古墳の実測を行なう。太刀の柄頭が出土する。

12月25～28日　第4号古墳の実測を終了する。一部土地の埋め戻しを行なったり、廃土の処理や礫の処理を行なう。器材の搬出を行ない、全ての現場調査を終了する。

1月8日　本日より、整理作業を開始する。現場での図面の照合作業と出土遺物を確認するため広げる作業を行なう。

1月9～13日　図面整理と土器類の洗浄を行なう。

1月16～20日　図面整理と土器類の洗浄を続ける。

1月22～26日　図面整理と土器類の洗浄及び注記を行なう。

1月29日～2月9日　図面整理、土器の復元を行なう。また、鉄器の泥落としや錆落としを行なう。細かい作業だけに慎重さを要する。

2月12日～3月3日　土器の復元を行なう。僅かな破片しかないので大変な作業となる。鉄器の錆落としを続ける。中でも鉄鏃の出土量が100点を超えており、しかももろいためかなりの神経を要する作業である。

3月5～17日　鉄器を中心とする出土遺物の処理を行なう。

3月19～30日　鉄器を中心とした遺物の保存処理を行なう。鉄器の基部には繊維や木質が比較的良好に残存しており、保存も考慮する。

平成2年度

4月23日　本日より平成2年度の作業を開始する。

4月24～5月14日　遺物の実測を中心に作業を行なう。5月16日からは他遺跡の発掘調査のため整理作業は一時休止する。

11月1日～3月初旬　遺構図のトレース、遺物の実測とトレース、遺物の写真撮影そして図及び図版の作成を行なう。また、担当者により原稿の執筆が行なわれる。

3月下旬　発掘調査報告書を刊行する。

3月末日　実績報告書の提出

第II章　遺跡の立地と環境

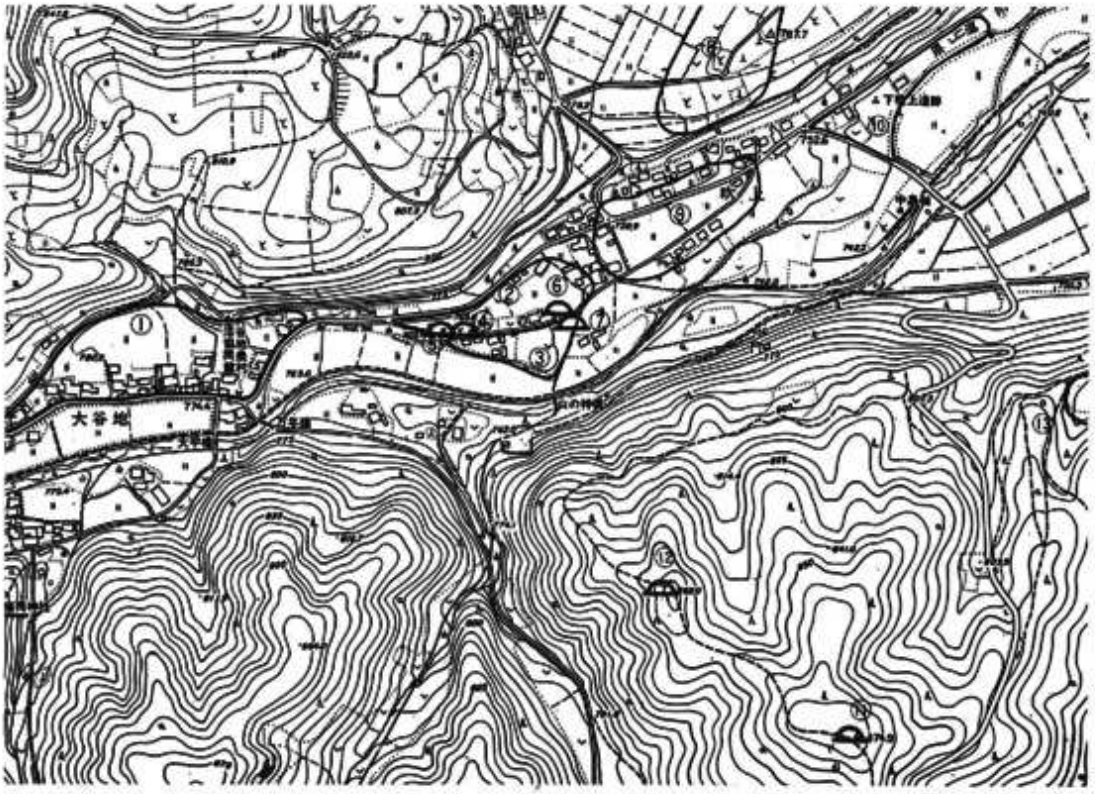
第1節　遺跡の立地と自然的環境

望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と茅野市に隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山（2,530m）を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山（2,560m）の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成がなされていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」（模式地：佐久市相浜）と呼ばれる非常にもろい湖沼性堆積層によって形成されており、各所に露頭箇所を見ることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礫質砂岩などで、幾層にも互層しており、ほぼ水平に近い。これらの地層の中では、泥岩から針葉樹や広葉樹あるいは珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は「瓜生坂層」（模式地：望月町大字望月）と呼ばれ、メタセコイヤやその他の植物化石が得られることから、相浜層が、新生代第四紀更新生の前期と推定されるのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新世の後期に属すると推定されており、今から200万年前に形成されたということがわかる。一見すれば、蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相異がみられるものである。

一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域をいわゆる蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また、西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿をとどめている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が北方の望月町方面へ延び、しかも雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は、安山岩の分布が広く見られ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を成している。これらは、望月町の浅田切、八丁地、畳石、菅原、大谷地、吹上など八丁地川の中・上流地域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がものの美事に発達し、天然記念物のごとく美しい露頭を見ることができる。

望月町を流れる主流は、鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜って流下している。細小路川は春日で、また、八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流の4河川は、この地方においては人々の生活や動植物の生棲にとって必要不可欠な自然的条件であるとともに、これらの自然環境を取り入れながら過去から現在に

第1図　山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳位置図（1：50,000）



第2図　山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳周辺の遺跡分布図（1：10,000）

第1表　山ノ神A遺跡　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	遺構・遺物	備考
①	平石遺跡	大字協和字平石	集落址	畑・水田 宅地	(縄・早～後)早期～後期の各期の遺物、(弥・中・後)土器、滑石製模造品、須恵器、(奈・平)土師器、須恵器、(中～近)小銭、陶磁器他	昭和62年度に発掘調査同63年度に報告書刊行
②	**山ノ神A遺跡**	大字協和字山ノ神河原 下吹上	散布地	水田 宅地	(縄・前・中・後)深鉢、黒曜石フレイク、(古・後)須恵器、(平)土師器、須恵器	平成元年度に発掘調査
③	山ノ神B遺跡	大字協和字山ノ神河原	散布地	畑・宅地	(縄・中～後)土器、フレイク、(弥・後)土器、(平)土師器、須恵器	平成元年度一部発掘
④	山ノ神第1号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)直刀14、刀子32、刀装具20、馬具4、鉄鏃53、勾玉7、管玉1、切子玉17、金環13、銀環1、金鈴2、埴輪片4	昭和45年度に発掘調査報告
⑤	山ノ神第2号古墳	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)天井石は存在しない、石室露呈	保存良好
⑥	**山ノ神第3号古墳**	大字協和字山ノ神河原	古墳	宅地	(古)横穴式石室、直刀3、刀子10、鉄鏃50以上、冑1、轡1、杏葉1、辻金具2、雲珠1、帯金具2、瑪瑙製曲玉7、水晶製切子玉2、水晶製丸小玉2、琥珀製丸小玉1、滑石製白玉1、ガラス小玉14、金環2	平成元年度に発掘調査
⑦	**山ノ神第4号古墳**	大字協和字山ノ神河原	古墳	畑	(古)横穴式石室、刀子3、鉄鏃15、金環2、轡3、帯金具1	平成元年度に発掘調査
⑧	貴船反遺跡	貴船反 大字協和字太田 雨池	散布地	畑・水田	(縄・中)中期後半の住居址、深鉢、打石斧、土器、フレイク、(平)土師器、須恵器	
⑨	上吹上遺跡	大字協和字上吹上	集落址	水田	(縄・中～後)中期住居址7、集石11、土壙、深鉢、浅鉢、埋甕炉、打石斧、磨製斧、石鏃、凹石、敲石、石匙、フレイク他	昭和63年度に発掘調査 元年度に報告書
⑩	下吹上遺跡	大字協和字下吹上	集落址	畑・宅地	(縄前～中)前期住居址1、中期住居址9(内敷石住1)、埋甕、深鉢、浅鉢、打石斧、磨石斧、石鏃、ノミ型石器、凹石、敲石、石匙等	昭和53年度・平成元年度・に発掘調査
⑪	内裏塚第1号古墳	大字協和字大黒久保	古墳	山頂	(古)5世紀代とみられる山頂の円墳	保存良好
⑫	内裏塚第2号古墳	大字協和字新林	古墳	山頂	(古)5世紀代とみられる山頂の円墳	保存良好
⑬	堂上日影A遺跡	大字協和字堂上日影	散布地	畑	(平)土師器、須恵器	

至るまで日々刻々と生活が営まれたのであり、基本的な生命泉であるといえる。

山ノ神A遺跡、山ノ神第3・4号古墳は、望月町の中心地より西方で、八丁地川中流の左岸に当たる河岸段丘に位置している。この付近は、八丁地川水系の狭長な河岸段丘が続く中にあっては、比較的広い段丘面が形成されており、河床からの比高差は10m前後を測る。周囲の山地は、いわゆる蓼科火山によって形成された裾野であり、蓼科山から本遺跡付近まで安山岩の板状節理（鉄平石）が脈々と続いている。本地域は水が豊富であり、A遺跡の最下層の礫層には常時水が

流れており、また、八丁地川対岸には、当町の水道にしている水源や不動水と称して古来より水源としている湧水があるなど、生活の立地条件としては誠に好都合であったかと思われる。

本地域は、基本的には沖積層であり、八丁地川の流れの変更や、氾濫などによって河岸段丘が形成されており、その結果、最上部に水田や畑の耕作面である耕作土が堆積し、その下部はかなり厚い砂礫層が堆積していた。A遺跡は、この礫層に手を加えながら、また、古墳は礫層を利用しながら立地として選拓したと考えられる。

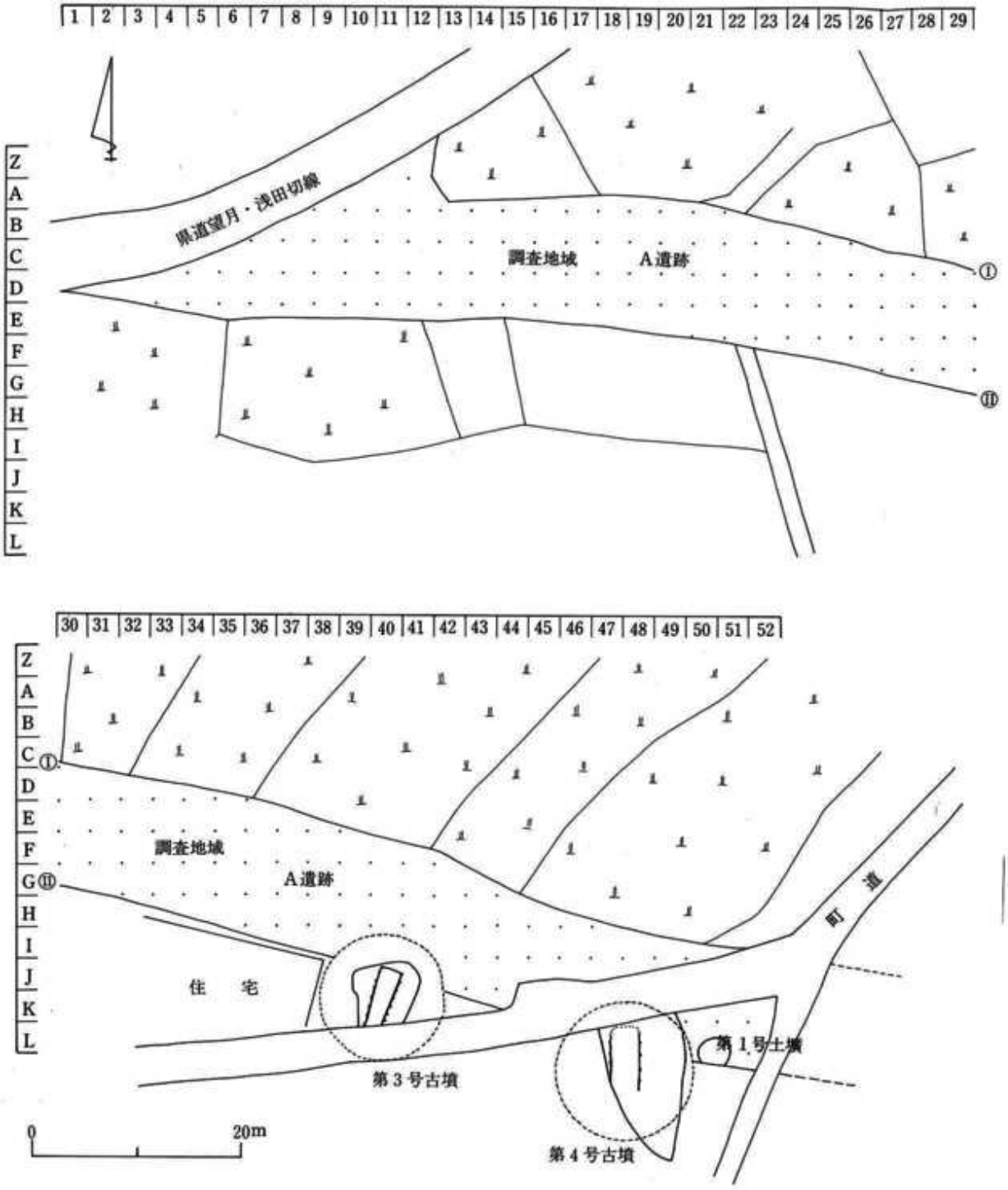
本地域は、まさに蓼科山による形成層とその後の八丁地川の影響とによって成り立っており、現在の生活もそれらの自然的環境を踏襲しているといえる。

第2節　遺跡の歴史的環境

望月町に存在する遺跡は、地点からみると287遺跡であるが、それぞれを各時代別に区分してみると総数469遺跡を超えている。このうち最も多いのが平安時代で42.9%、次いで縄文時代の37.5%、次は古墳時代（古墳主体）の11.8%である。旧石器時代の遺跡は2例がかつて報告されているが、その実態は不明であり、弥生時代の遺跡は、発掘調査によって遺物が少量出土しているだけで、遺構（生活址）そのものは未だ発見されていない。

平安時代は、前代より続く望月牧の最も盛んになる時期であり、地域的な社会情勢に加え朝廷直轄地を控えていたこともあって、人口が急増したと思われ遺跡数が極立って多い。分布している地点も、望月町のほぼ全域にみられる。上吹上遺跡は縄文時代が主体の遺跡であるが、出土遺物の中には平安時代の須恵器や土師器の坏が出土したり、土師器の甕の完形品も出土している。縄文時代の遺跡も望月町全体からみると、ほぼ全域に分布しているといえ、特に蓼科山麓に近い程分布の密度が濃くなっている傾向にある。発掘調査の結果からみると、細小路川、鹿曲川の上流地域と八丁地川中流地域とに集中し、しかも早期から晩期初頭までくまなく各型式の土器を保有した人々が生活を営んでいるのである。山ノ神A遺跡ほかの周辺では、昭和51年度に発掘調査した下吹上遺跡と昭和62年度・平成元年度に実施した平石遺跡、平成2年度に実施した下吹上2次調査が代表的なものである。下吹上遺跡では住居址13棟、平石遺跡では49棟が検出されており、全容を調査すれば数百棟の住居址やその他の遺構が検出される筈である。

古墳の存在もこの付近にあっては多数構築されており、八丁地川水系は特にバラエティーに富んでいる。本水系や鹿曲川水系を臨むように山頂墳である内裏塚第1号、2号古墳（5世紀）や山ノ神第1号～4号古墳、真光寺第1号～4号古墳、尾崎第1号～5号古墳、大塚第1号～6号が分布しており、このうち山ノ神第1・3・4号、真光寺第1号、尾崎第1～3号、大塚第1号古墳が発掘調査されている。特に山ノ神と真光寺古墳においては、構造もよく確認でき、また出土遺物も各種類とも極めて多量に出土しており、当地方の古代史解明の重要な手掛りとして重要である。



第3図　山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳グリッド配置及び遺構全体図（1：600）

第Ⅲ章　山ノ神Ａ遺跡

第１節　縄文時代の遺物

山ノ神Ａ遺跡は、大字協和字山ノ神河原の一角に位置するが、その地点は、県道望月・浅田切線の南側から町道までの間である。また、町道から八丁地川との間には山ノ神Ｂ遺跡が存在しており、極めて遺跡密度の濃い地域であるが、Ａ遺跡とＢ遺跡は本来ひとつの遺跡であると考えられ、今回調査したＡ遺跡の出土遺物の状況やＢ遺跡の耕作中に出土した遺物などを見ても明らかである。但し、詳細な地点からみると、Ａ遺跡は縄文時代的傾向、Ｂ遺跡は古墳時代以降の傾向がうかがえる。

Ａ遺跡からは、遺構を検出することはできなかったが、一定の狭い範囲に鉄平石が集中していた箇所が存在したり、土器を主体とする遺物が集中していた箇所があり、かつては遺構が存在していたのではないかという様相のうかがえる地点があった。本地域は、水田の造成の際にかなり深く土地の変更を行なっており、礫層直上まで達したため、恐らく遺構はこのような状況の中で破壊されたと考えられる。

図示した遺物は、出土した中で主要なもののみを取り上げた。また、縄文時代の遺物については、第３・４号古墳の内部及び墳丘から出土したものもＡ遺跡の中で扱うことにした。

１．土器（第４・５図、図版１～３）

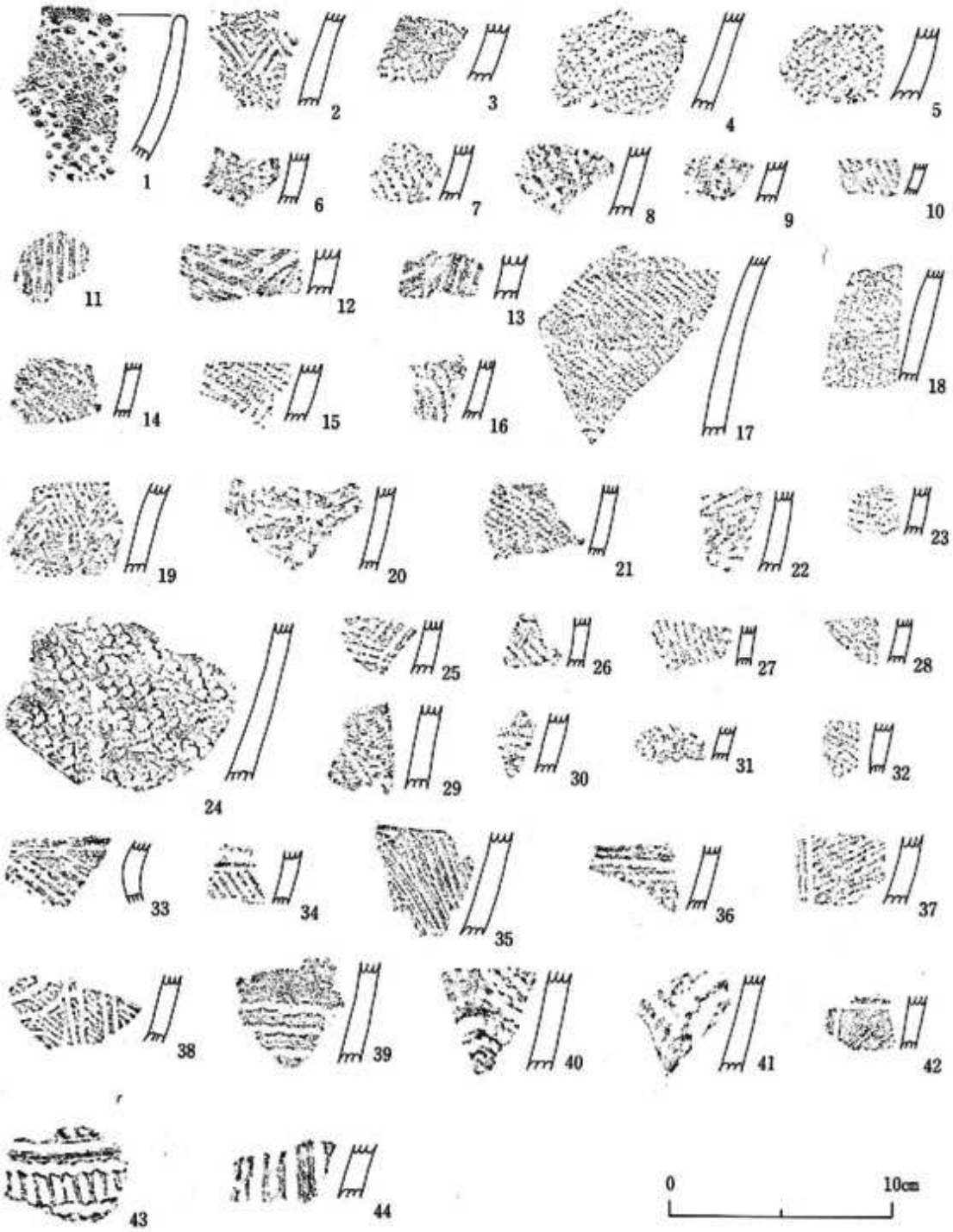
出土した縄文式土器は、出土量は少ないが各時期にわたっていることが特徴である。

第４図１は、楕円押型文土器である。口縁部は平縁でやや丸味を帯びており、胴部は丸みを帯びながら底部に至る器形になると思われる。器厚は0.4cm程度で、胎土にはほとんど繊維は入っていない。口唇直下には僅かに無文部が残るが、器面の凹凸による文様むらは残るもののほぼ全面に楕円文が施文されている資料である。

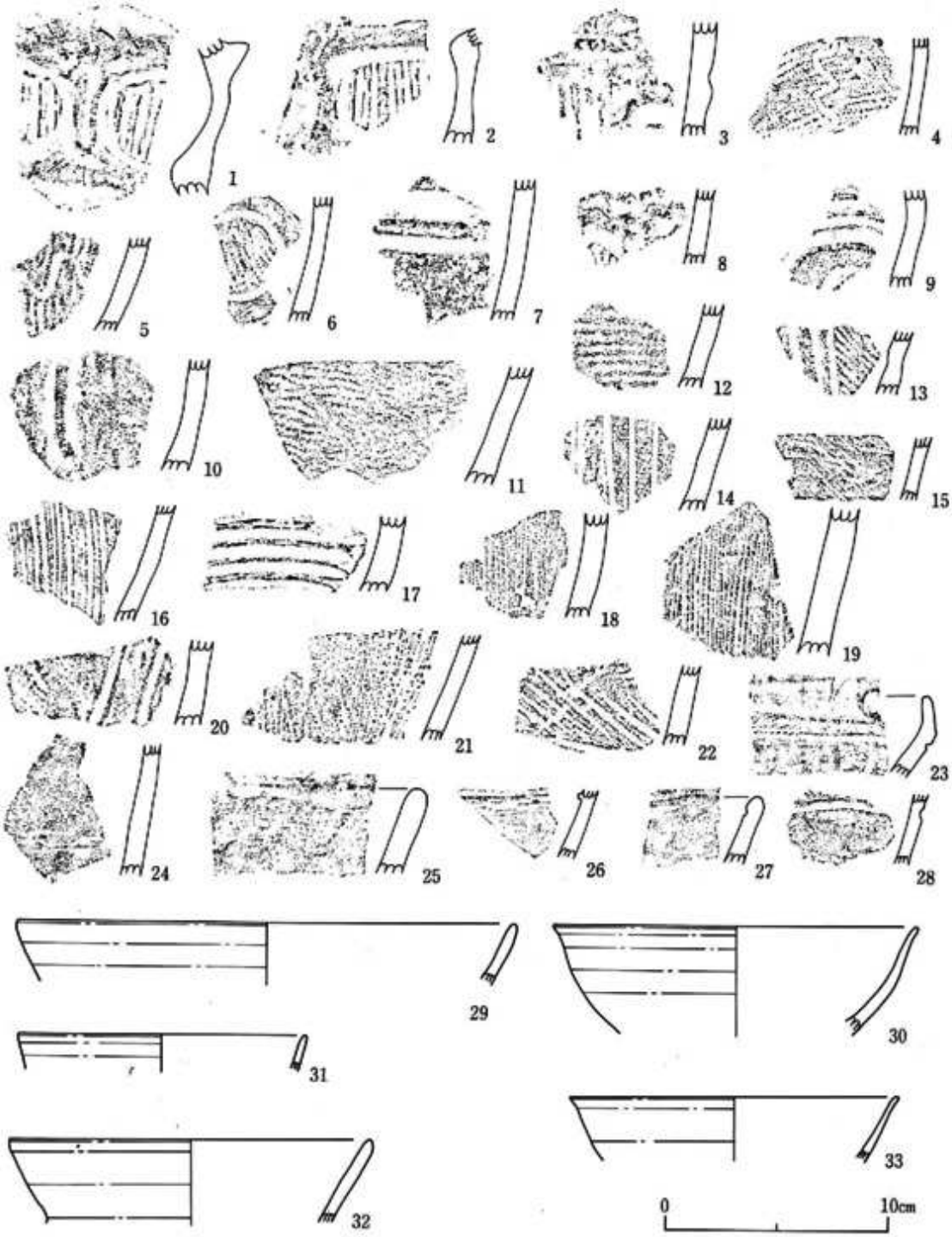
第４図２～32は前期の土器である。２は半截竹管による沈線が綾杉状に施文されている資料である。３は、ループ状にした撚糸の側面圧痕のみられるものである。11～13は、神ノ木式土器に比定されるもので、異状縄文が施文されており、黄褐色を示し、胎土には繊維、砂粒等は含まれていない。14～18は、羽状縄文や結節縄文が施文されている資料で、繊維はほとんど含まれていない。19～32は関山式に比定される資料で、多量の繊維が含まれている。

33～44、第５図１～22は、中期の土器である。33～42は中期前半の資料で、37・38は、九兵衛尾根Ⅰ式に比定される。39は、狢沢式に比定されるもので、口縁部直下に沈線文が施文された土器である。40は新道式に比定される土器で、隆帯が貼付されその両側を半截竹管による押し引き文が施文されている。42は、撚糸文と沈線による区画文で構成されている土器である。

第５図１～15は、縄文時代中期後半Ⅲ期に比定されるものである。１～３は口縁部直下の土器



第4図　A遺跡遺構外出土土器実測図（1：3）



第5図　A遺跡遺構外出土土器実測図（1：3）

で、隆帯による大きな楕円区画文が施文され、隆帯の内側に沿って沈線が一周し、さらに縦状に沈線が描かれている。胎土には僅かな砂粒が混入しているが均一であり、黄褐色を示す焼成良好の土器である。6は、やや時期が下ると思われる資料であり、楕円区画文の内部に縄文が施文されている。16～22は、中期後半Ⅳ期に比定される土器である。18・19、21～22は、器面に対し櫛歯状工具による沈線が施文されており、中期の最終末に比定されるものである。文様というよりも、器面調整とみた方がよい資料もある。

23～28は、縄文時代後期の土器で、いずれも加曽利B式に比定される。23は、内外面とも黒色研磨された土器で、やや内湾する口縁部直下に、横帯するように帯状に縄文が施文されている。24～38は無文であるが、25・28は外面の口縁部直下に、また、26・27は内面に沈線がみられる。

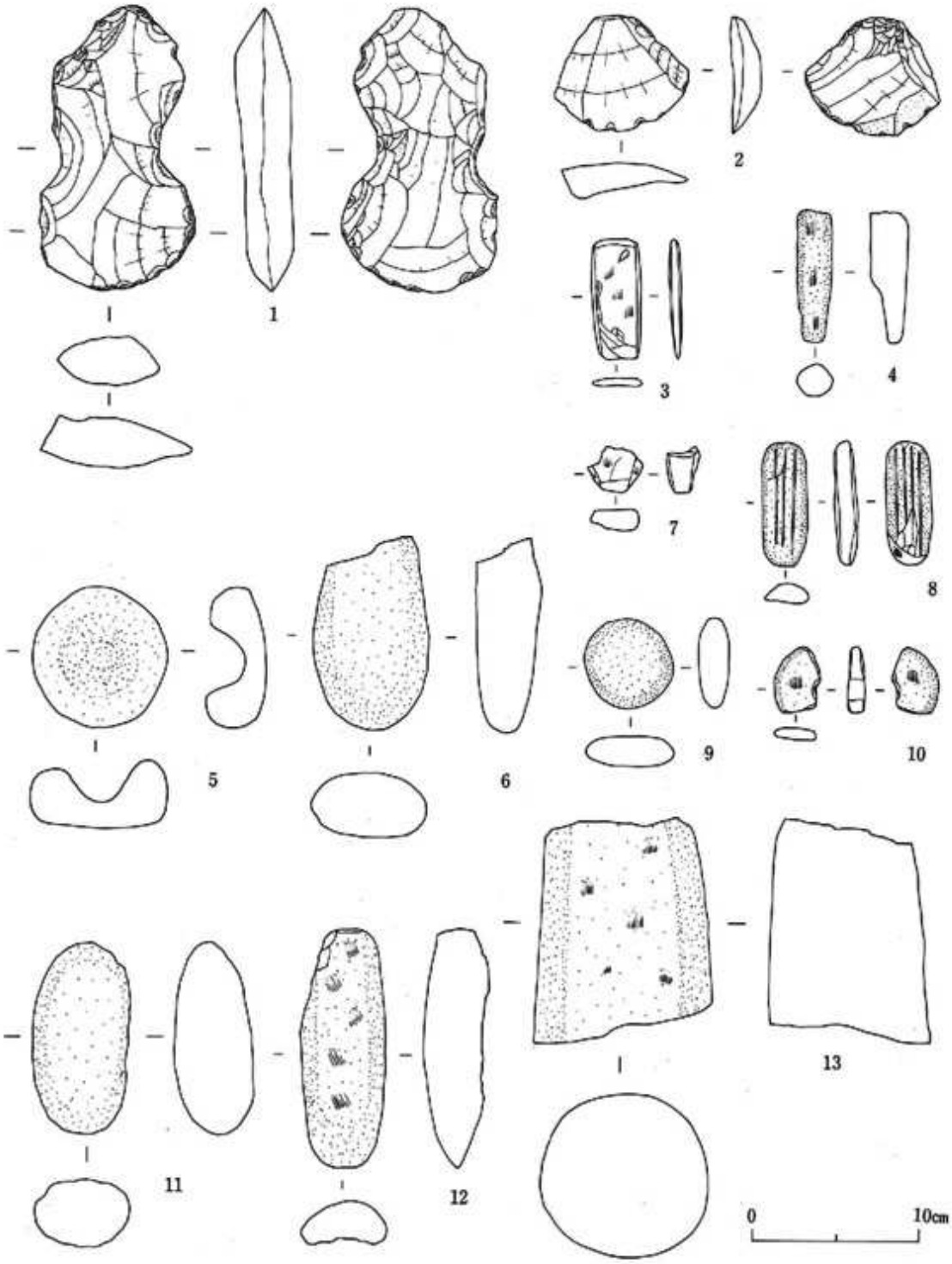
縄文式土器の出土量はあまり多くはなかったが、押型文土器から後期の土器までバラエティーがあり、本遺跡が長期にわたって生活の立地として利用していたことを物語っている。

2．石器（第6・7図、図版3・4）

出土した石器は、土器と同様あまり多くはない。しかし、生活の様子をうかがえる良好な資料がみられ貴重である。

1～4は、黒曜石製の石鏃である。1は長身鏃で、極めて薄く加工されている。2は三角鏃でほぼ正三角形である。3は加工途中、4は尖端部と基部が欠損している。5～12はスクレイパーで、いずれも黒曜石製である。13は両極石器で、両端の加工が顕著である。14～19、第7図1は打製石斧である。形態的には、第6図14は典型的な短冊型、第7図1は典型的な分銅型である。14は粘板岩製で、両面ともに自然面はなく全面にわたって丁寧な加工がなされている。長さ13cmを測る長大な資料である。1は、玄武岩製で、本資料も自然面は全く残されておらず丁寧な加工が行なわれている。刃部は使用による刃こぼれと思われる剥離面が顕著である。中央の抉入部は大きく剥離した後に、調整を行なっている。長さ17cmと極めて大型の資料である。第6図15、18は、いずれも基部に抉入部をもっており、柄付けを意識しているものである。16・17は、全体の形状が紡水型をなしており、全体に大きな剥離面が目立つ。しかし、刃部は丁寧な調整が行なわれている。第7図3は、小型の磨製石斧で、長さ7.2cmを測る。7も磨製石斧の欠損品である。8は、砂岩製の自然石に溝状の削痕がみられるものであるが、名称は不明である。5は凹石で、気泡の多い安山岩の丸石に大きな凹がみられる。6～9・11・12は磨石である。6・11・12は乳棒状の長楕円形をなしている。12は先端が一部欠損している。石質はいずれも安山岩製である。9は偏平な磨石で両面とも良く研磨されている。10は有孔石製円板で、欠損しているが砂岩の両面を丁寧に研磨し、中央部に孔を開けている。13は安山岩製の石棒である。第3号古墳の内部から出土した資料であるが、恐らくはA遺跡にあったものを持ち込んだか、あるいは土の中に偶然にも混入していたものと思われる。先端と基部は大きく欠損しているが、原形はかなり大きかったものと思われる。全体に極めて丁寧に研磨されており、両面に稜が明瞭に残されている。

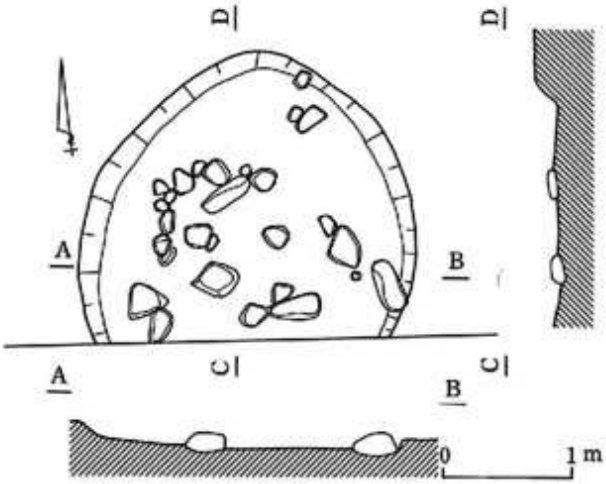
第6図　A遺跡遺構外出土石器実測図（1～13・1：2、他1：4）



第7図　A遺跡遺構外出土石器実測図（1：4）

第2節　古墳時代の遺構と遺物

古墳以外の古墳時代の遺構は、山ノ神B遺跡において検出された。第4号古墳の墳丘調査の際、墳丘の東側にトレンチを入れると落ち込みが確認され掘り込みを実施した。但し、遺構の南側は、道路用地からはずれ、調査地区外になってしまっており、調査を実施することはできなかった。



第8図　第1号土壙実測図（1：60）

遺構は、東西260cm、南北は全体の形態から推定すると、東西よりもやや長いと思われる。深さは場所によって異なるが10～20cmを測る。床面は、砂質の黄色ローム層を掘り込んで構築されており、比較的固く締まっている。掘ったままの状態というよりは、掘り込んだ後にタタキをなしたような感がある。壁面は、底面に比べれば軟弱であるが、よく締まっており崩れは少ない。内部には、大小の河原石を主体に散在した状態で存在していたが、中には鉄平石も含まれていた。礫の状態は、遺構的な様相はみられなかった。

遺物は、床面より甕形土器がつぶれた状態で1個出土した。口縁部は存在しなかったが、胴部を主体に5～10cmの破片となって出土した。器形は、胴部がほぼ球形状をなし、底部に至る程やや急傾斜にこけていくものと思われる。器面は、全面にタタキが行なわれ、網目状の型痕が付いており、また、内面はやはり全面にタタキがなされており、青海波文が明瞭に残されていた。器高は約40cm前後と思われ、甕形土器としては小型である。遺物は、この甕形土器以外は何も出土しなかった。

本遺構は、土壙（第1号）として扱ったが、いかなる性格のものなのであろうか。時期としては、古墳時代後期に比定できることは誤りがないものと思われる。底部がほぼ一定し、鉄平石を含みつつ河原石が主に入り込んでいた。住居址との考えもあったが、プランの形態が一定しておらず、炉址や焼土も存在していないところから断定することができなかった。従って、ここでは規模はやや大きいが、土壙としてとりあえず扱っておくことにした。

第3節　平安時代の遺物

平安時代の土器は、総数20点程であまり多くはない。また、器形復元できるものはなく、図上復元できるものも数点しかない。29～33はいずれも須恵器の口縁部の資料で、30は、口縁部が外反し、胴部がやや張り出す小型の坏である。その他は、口縁部から底部にかけてほぼ直線状に内湾する器形をもっている。平安時代の遺構は検出されていない（第5図29～33）。

第Ⅳ章　山ノ神第３号古墳

第１節　遺　　構

１．位置と環境（第１・２図、図版１・５）

山ノ神第３号古墳は、本年度調査対象地区の東寄りで、住宅に接する位置に存在しており、ここは、八丁地川中流域の左岸河岸段丘に当たり、狭長な河岸段丘の中にあっては幅が広く平坦面が続く良好な地点に存在している。

後に記述するが、本古墳は山ノ神古墳群（現在４基）を構成する１基である。第１号古墳は、開墾による破壊にともなって昭和36年に発掘調査が実施され、昭和39年にその跡地に碑が建立されている。第２号古墳は、第１号古墳に隣接して現存している。天井石がすでになく、石室の構造を上部から見ることができる。羨道部の一部は、道路によりすでに切られてしまっている。第４号古墳は、本古墳の東側に位置しており、第Ⅴ章に記述するとおりである。

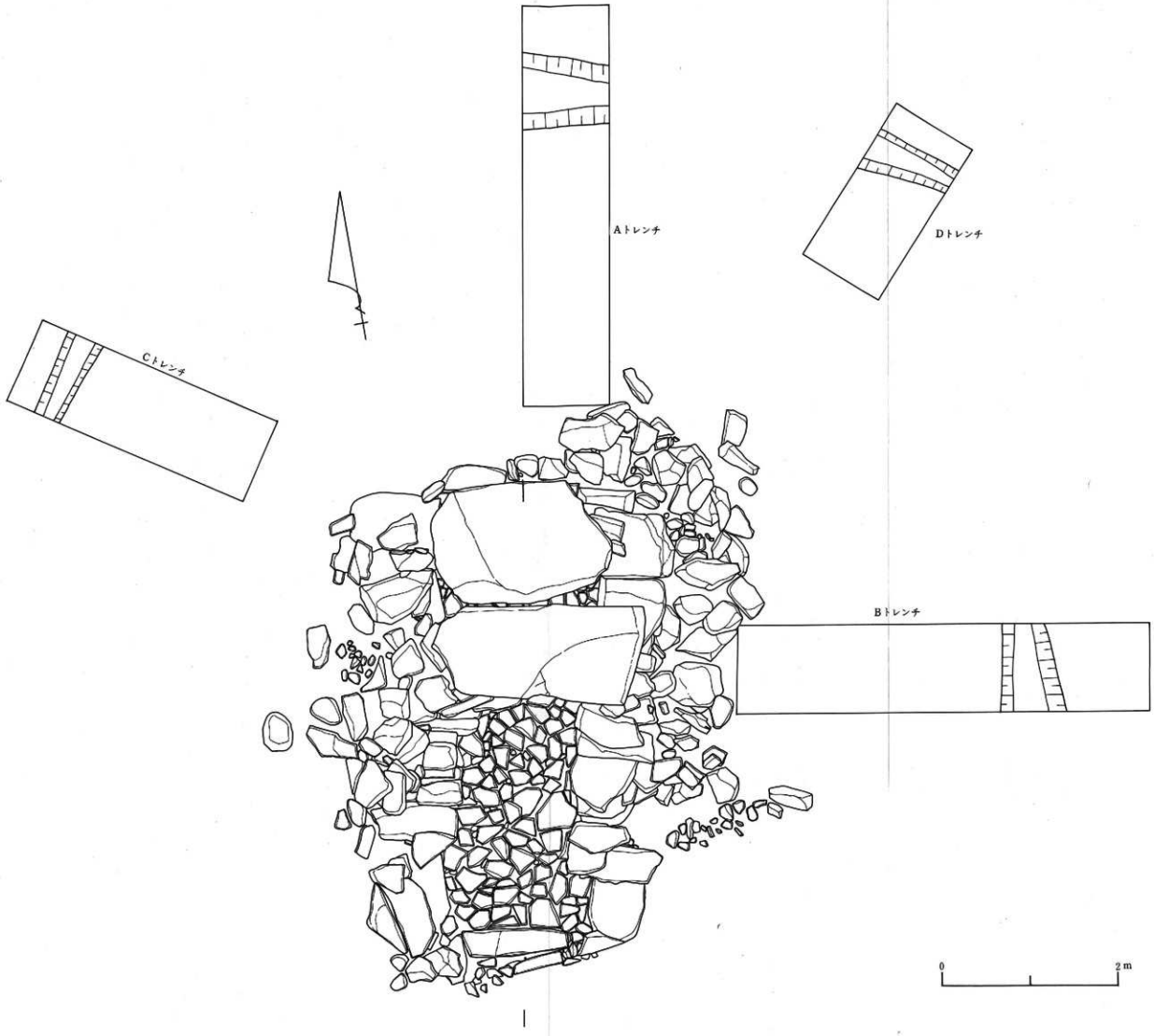
２．墳丘（第９図、図版５）

本古墳は、調査前からすでに天井石が大きく露出しており、また、墳丘の基礎的な部分を構成する石積みの表面も露出している状態であった。さらに、これらの上に耕作で出た石や、崩れた石を二次的に積み上げてあり、古墳を構成している石との区分の難しい箇所もあったが、二次的な石や土砂をできるだけ取り除く作業を実施した。古墳周辺の地盤は、当時の地盤よりも上っていることが解り、結果として墳丘の一部が埋没している様子がトレンチからうかがえた。従って後世に堆積した部分は、できうる限り取り除くことにより現状把握がなされた。

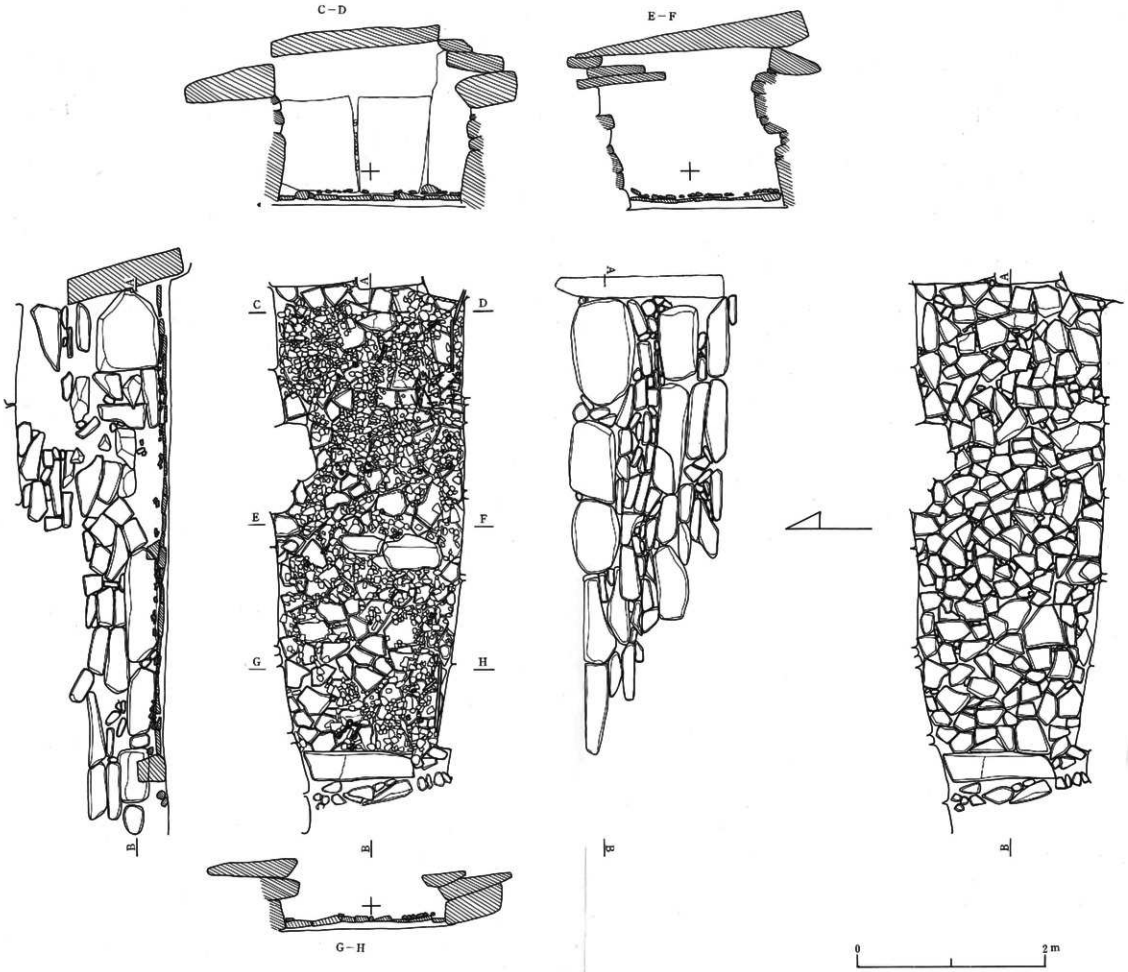
現状で残されていた墳丘は、東西600cm、南北750cm、高さは当時の地盤から残存する天井石まで180cmを測る。これらの計測値は、かつて大きく盛り上げてあったマウンドが取り除かれた後の、いわば骨組の値であるといえる。

第９図にみられるＡ～Ｄトレンチにより周溝が確認され、墳丘本来の基底部の規模を把握することができた。規模は、周溝より石室中央部を結んだ距離の測定値から、東西120cmを測る。南側は、町道が通過しているために調査することができず、正確な範囲をつかむことはできなかったが、北側のトレンチから石室中央部の測定値を考慮すると、南北は約130cmを図り、残存する様子からは想像もできない程規模が大きかったことが解った。残存する石組みは、墳丘というよりは、むしろ石室構成に関連するものと理解されるため、基本的にはマウンドは存在しないという理解になる。

このような状態からすると、墳丘と石室との関係がやや特殊なものであるという様子がみられ、当地方では類例のあまり知られていないものとなるが、その状況は、後述の石室の中で記述することにする。



第9図　第3号古墳実測図（1：40）



第10図　第３号古墳石室実測図（１：40）

3．石室（第10図、図版6～10）

本古墳の石室は、地盤を掘り込んで構築した半地下式の石室構造をもつことが特徴である。主軸は、N10°Eで、ほぼ真北に近い方向に向けて構築されているといえる。前項でも記述したが、南側は町道の通過により調査ができなかったため羨道部の解明ができなかった。石室は、追葬の状態が確認され、追葬段階における石室構造の変遷も把握することができた。

まず第一期の構築段階は、砂礫層の地山を掘りくぼめ、整地した後、幅200cm、高さ180cm、厚さ26cmの2個の鉄平石（安山岩）を北側に立て、この奥壁を中心に、両側に大きな根石を横積み状に一段置き、この根石の上に小口積みを主体にしながら小型の鉄平石や大型の河原石や山石を積み上げて側面を築いていた。さらに空間部には小礫を詰め補強していた。奥壁と側壁の構築に際しては、多くの裏詰石を使用しており、特に奥壁部には多くの礫が使用されていた。奥壁と側壁が出来ると、天井石が乗せられていた。現状では、奥壁にかけて巨大な鉄平石が置かれ、その南側にもさらに大きな鉄平石が置かれていた。さらに南側には、2個ないし3個の天井石がかつては存在していたはずであるが、失われていた。側壁は、上部になる程内部にせり出す持ち送り式の構造となっていたため、重い天井石を乗せることによりバランスを保つようになっていた。裏詰め石は、天井石を乗せた後にも補強としてさらに使用され、かなり厚く積み上げられていた。

天井石の設置と前後して、床面が構築されていた。整地した砂礫層の上面に砂質黄色ロームを敷き、その上に鉄平石を余す所なく敷き詰めており、石の隔き間には鉄平石ないし河原の小礫を丁寧に詰めていた。床面は水平であり、破壊の痕跡は全く認められなかった。玄室と羨道の境には、厚手で横長の框石が敷きならした黄色ロームの土に置かれており、第Ⅰ期の框石と考えられる。玄室の規模は、主軸方向で框石までが490cm、框石の厚さ30cmを図り、幅は奥壁部で240cmと最も広く、中央部で200cm、框石の位置で156cmを図り、玄門の位置が最も狭くなっている。全体の様子は、玄門部が最も狭いとはいえ、胴張りの感があり、内部をより広く見せる構造になっていた。本古墳は、袖石が存在しておらず、その位置に框石が置かれていたが、東側の側壁の根石が奥へ入っているので、これが袖石（部）の表現である可能性がある。床面から天井石までの高さは158cmで、かなり大規模な石室であったことが解る。尚、羨道部は、町道にかかり調査することはできなかった。

第Ⅱ期の床面構築状態は、玄室を中央から2分していることが特徴である。奥壁から280cmの位置に2個の横長で比較的大きな河原石を置き框石としている。さらに、床面には、河原砂が敷かれ、その上に河原の小礫が全面に敷かれていた。追葬のための床面の再構築と考えられるが、玄室中央部に置かれた框石が、追葬の性格を考える上で大きな意味を有しているものと思われる。框石から奥に被葬者が1体、その後、玄門部から第Ⅱ期框石までの間に被葬者か1体が埋葬された可能性があり、従って、第1期の構築による被葬者、第Ⅱ期構築により2体の被葬者が埋葬されていたと考えられる。

4．周溝（第9図）

本古墳の周溝は、調査状況の制約によりトレンチで確認した。トレンチA～Dには、石室をとり巻くようにそれぞれで検出され、最大幅はAトレンチ部の90cm、深さ28cm、最小幅はCトレンチ部で32cm、深さ12cmを測る。規模はあまり大きくはないが、墳丘の裾を一周していたものと思われる。墳丘は大分崩れ、原形の規模を測定することはできなかったが、周溝により基底部はほぼ1,200～1,300cmと考えられ、かなり大規模な古墳であったことがわかる。

第2節　遺　　物

第3号古墳から出土した遺物は、大きく区分すると石室内から出土したものと墳丘から出土したものに分けることができる。

墳丘から出土した遺物は、第22図1～5にみられる須恵器及び6～10の土師器で極めて少ない。主体的には、石室内より出土しており、前述したとおり床面が完存していたため遺物への影響がほとんどなく、各種の資料が大量に出土した。

1．直刀・刀子（第11図、第12図30～41、第13図、口絵1、図版11～13）

直刀は、玄室床面の奥壁東側コーナーで2口、玄門の東側側壁部直下で1口の合計3口出土した。第11図1は、鍔がそのまま装着され、しかも奥壁コーナーに立てられていた。二次的に立てかけられたかどうかは不明であるが、切先が床面に直接乗っており、石室内に堆積した土に埋まっていた。茎は床面から出土したが、切先から復元した茎までは91cm、身幅3cmを図り、平造り平棟である。同図3は、1の直下の床面で、切先を奥壁に向けて出土しており、原位置を保っている貴重な資料である。切先から茎まで59cm、身幅28cm、鋒幅3cmを測る。同図2も、切先を奥壁に向け、側壁と平行に床面から出土した。切先から茎まで72cm、身幅28cmを測る。

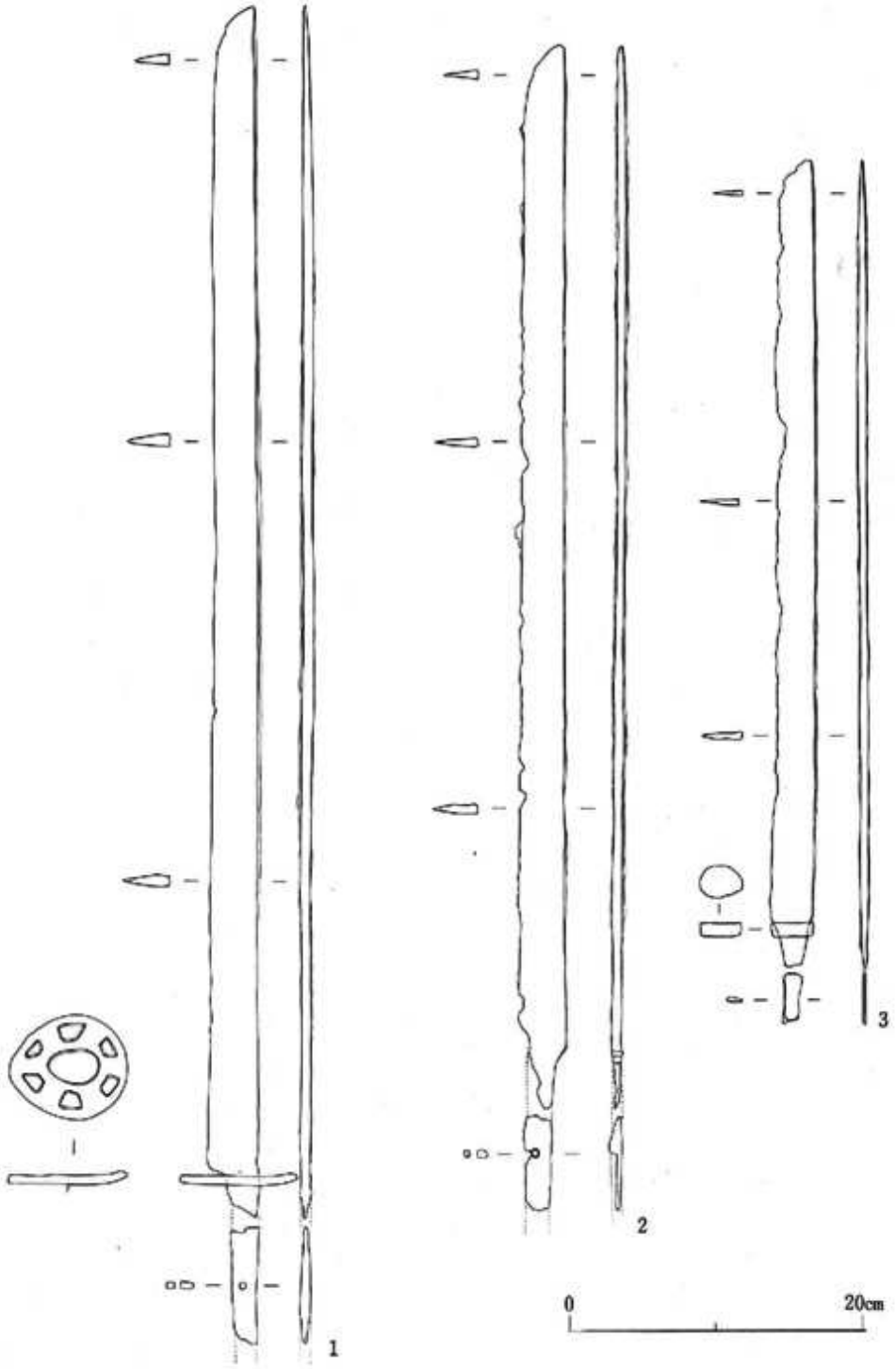
刀子は、第13図1～4にみられる資料が形態的に整っているものであり、他は破片である。いずれも刀子としては極めて大きく、小型の直刀と理解してもよいものかも知れない。1は、長さ24cm、身幅1.5cm、2は、長さ21cm、身幅1.7cm、3と4は、茎が欠損している。同図7・21は茎部の資料で、木質部が残存している。

2．装飾品（第12図1～29、口絵1・2、図版21～25）

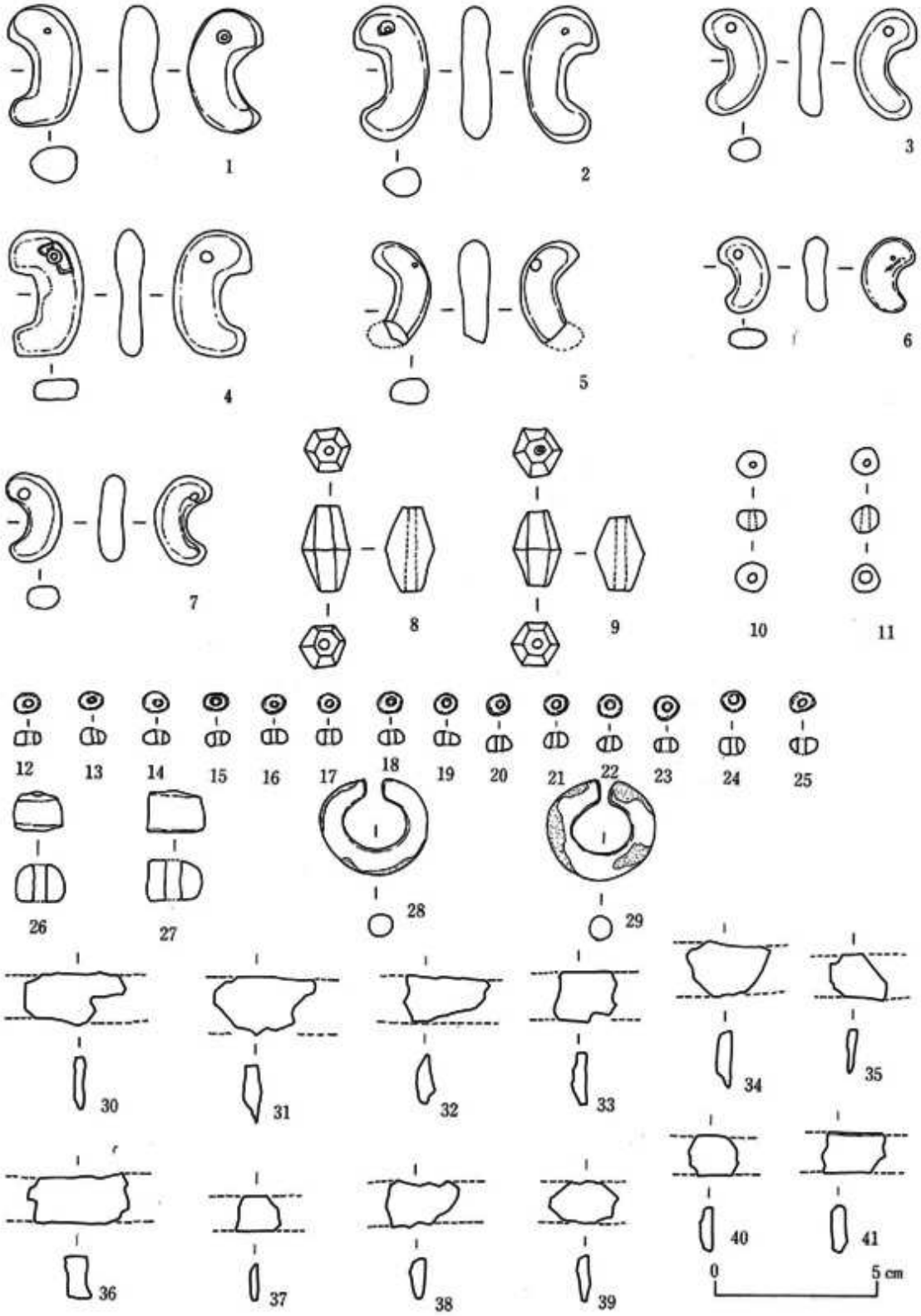
装飾品は、曲玉、切子玉、丸小玉、ガラス玉、白玉、金環が出土している。

曲玉は、玄室の奥壁に近い西側の側壁下や、中央部框石の脇、さらに玄室に近い床面から合計7個出土した。第12図4は水晶製で、他は瑪瑙製である。形態的には、1～4の比較的大型の曲玉は「コ」の字型をなし、5～7は、なだらかな曲がりをなしている。

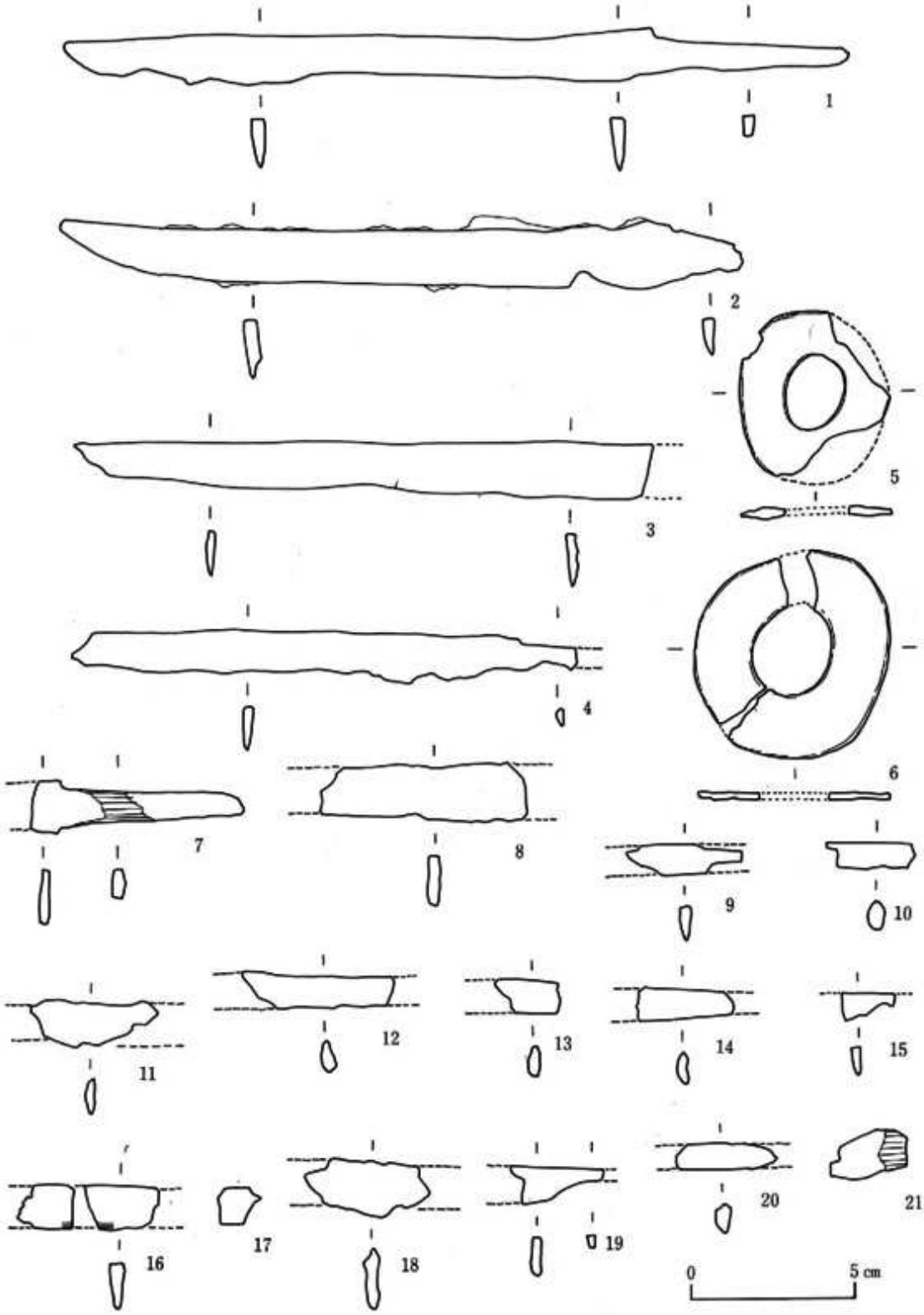
切子玉（第12図8・9）は、2個出土した。いずれも水晶製で、水晶の六面体を利用して磨き



第11図　第3号古墳出土直刀実測図（1：5）



第12図　第３号古墳出土遺物実測図（10～27・１：１，他１：２）



第13図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）

第2表　第3号古墳出土装飾品統計表

種　別	挿図番号	長径	幅	厚径	材　質	種　別	挿図番号	長径	幅	厚径	材　質
曲　玉	12－1	3.7	1.5	1.0	瑪　瑙	ガラス小玉	12－16	0.25	－	0.4	ガラス
〃	12－2	4.1	1.4	0.9	〃	〃	12－17	0.25	－	0.35	〃
〃	12－3	3.3	1.2	0.6	〃	〃	12－18	0.2	－	0.4	〃
〃	12－4	0.9	1.4	0.6	〃	〃	12－19	0.2	－	0.35	〃
〃	12－5	3.2	1.1	0.8	〃	〃	12－20	0.25	－	0.4	〃
〃	12－6	2.4	1.2	0.6	〃	〃	12－21	0.25	－	0.4	〃
〃	12－7	2.8	1.0	0.8	〃	〃	12－22	0.25	－	0.4	〃
切子玉	12－8	2.7	－	1.5	水　晶	〃	12－23	0.2	－	0.4	〃
〃	12－9	2.3	－	1.5	〃	〃	12－24	0.25	－	0.4	〃
丸小玉	12－10	0.7	－	1.0	〃	〃	12－25	0.25	－	0.4	〃
〃	12－11	0.9	－	0.9	〃	臼　玉	12－26	0.6	－	0.75	滑　石
ガラス小玉	12－12	0.2	－	0.4	ガラス	〃	12－27	0.6	－	0.85	〃
〃	12－13	0.25	－	0.4	〃	金　環	12－28	3.3	3.0	0.6	青銅＋金
〃	12－14	0.25	－	0.4	〃	－	12－29	3.3	3.1	0.7	青銅＋金
〃	12－15	0.25	－	0.4	〃						

がかけられている。中央部には貫通孔が開けられており、そこに水銀珠が塗られ、水晶の自然の透明な輝きをより強調するような意図がみられる。

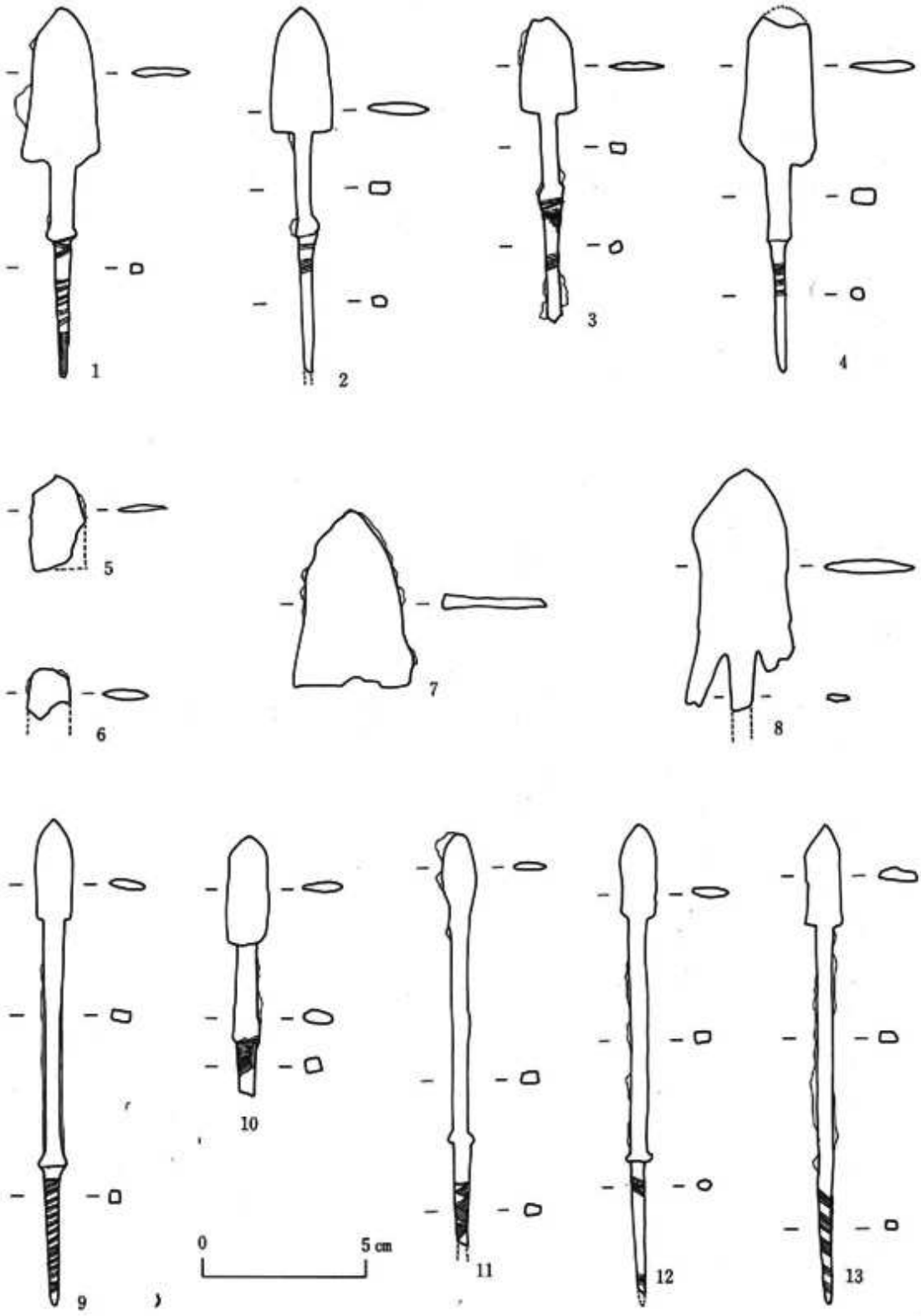
第12図10・11は、水晶製の丸小玉である。非常に小型であるが、全体に球面であり陵などない程よく磨きがかけられている。中央部には貫通孔が開けられており、切子玉と同様内部に水銀珠が塗られている。水銀珠は、カガミに塗る成分であり、水晶の輝きをより強調している。

第12図12～25は、ガラス製の小玉で、合計14個出土している。中央部には孔が開けられている。色調は、全部が青を基調にしているが、濃い青から薄い青まで3段階程に分けることができる。

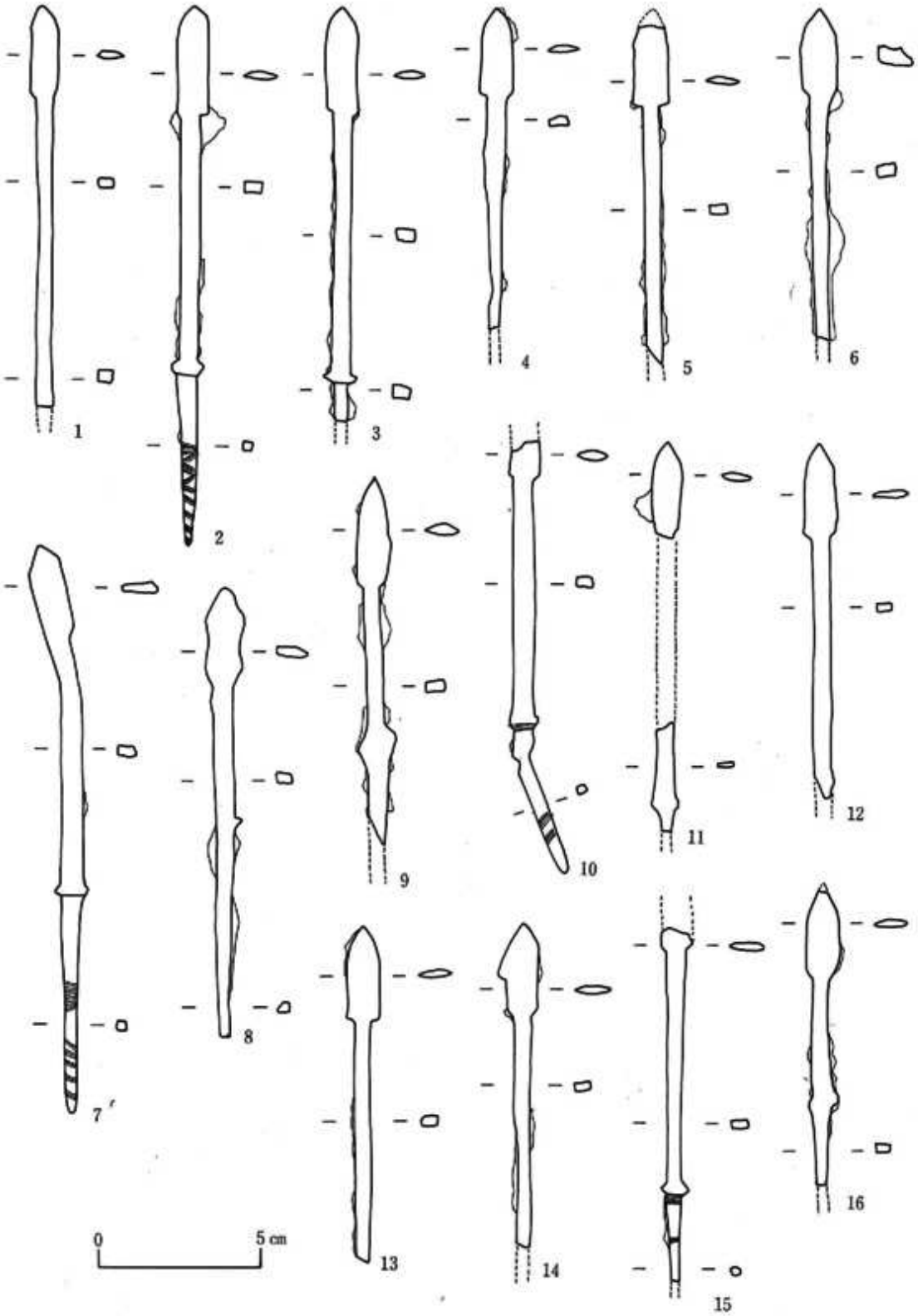
第12図28・29は金環であり、2個出土した。青銅を地金にして、アガルガム法により金がメッキされている。いずれも金の保存がよく、美事な輝きを今だ放っている。

3．鉄鏃（第14～18図、第19図1～11、口絵3・4、図版13～16）

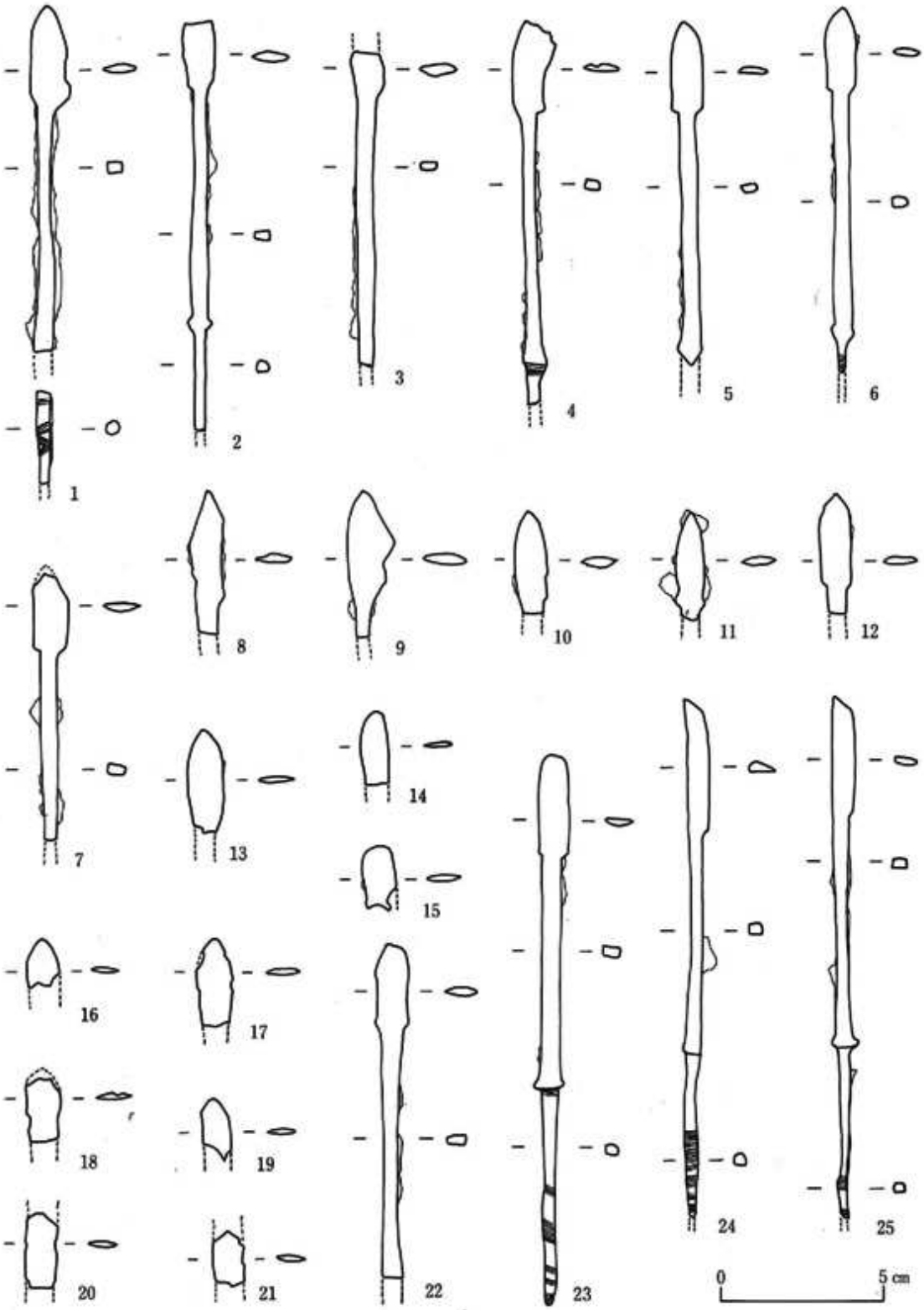
鉄鏃は、全て床面より出土しており、合計127点を数える。127点のうち、腐蝕が激しく同一個体が2分・3分され、それぞれを1点として統計してある可能性のあることを記しておきたい。出土位置は、奥壁部西側直下や奥壁近くの東側側壁付近、また、玄室中央部の框石に集中して出土した。特に、奥壁近くの東側側壁付近の出土状態は、異状なほどに多量に集中しており、恐ら



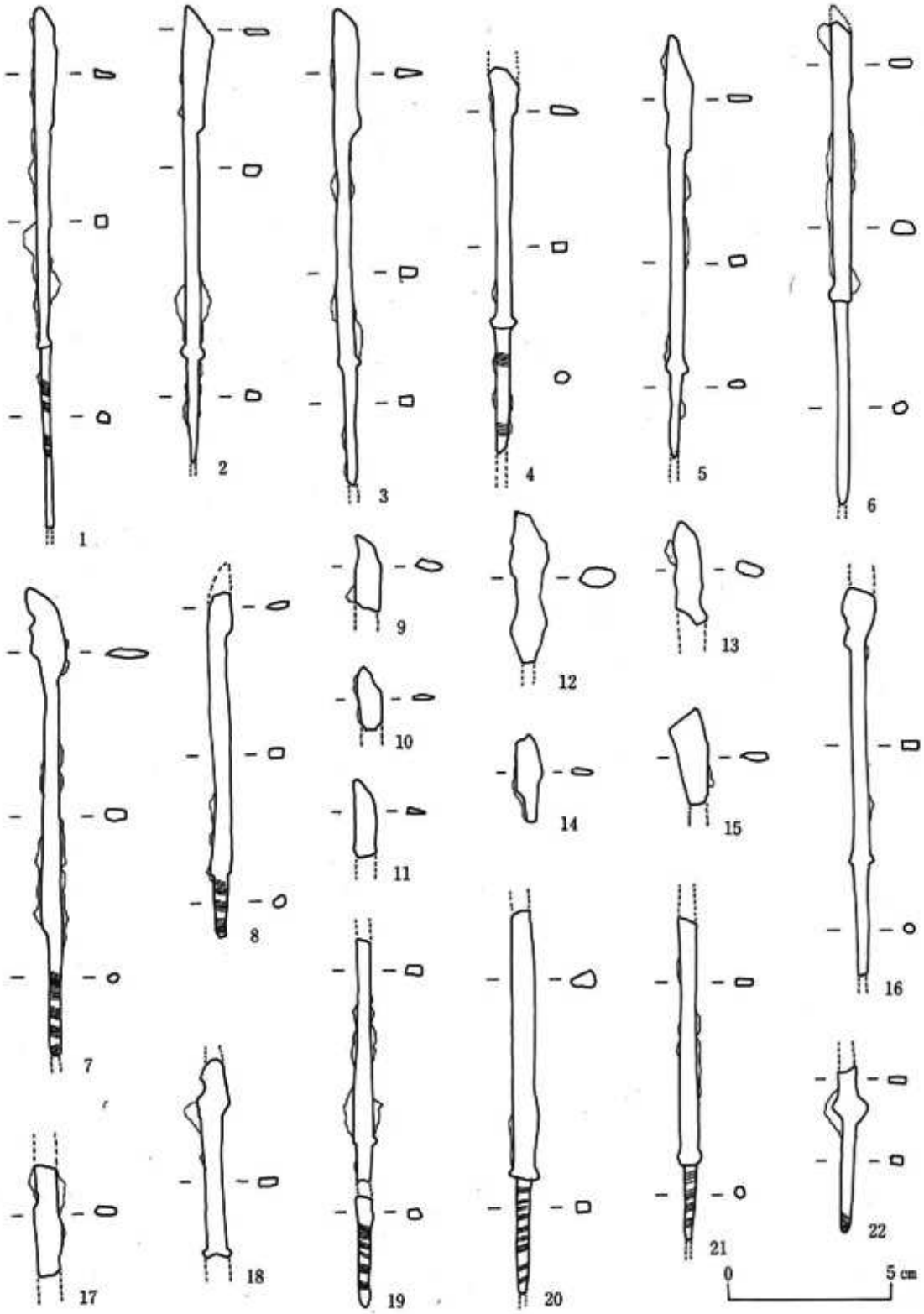
第14図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



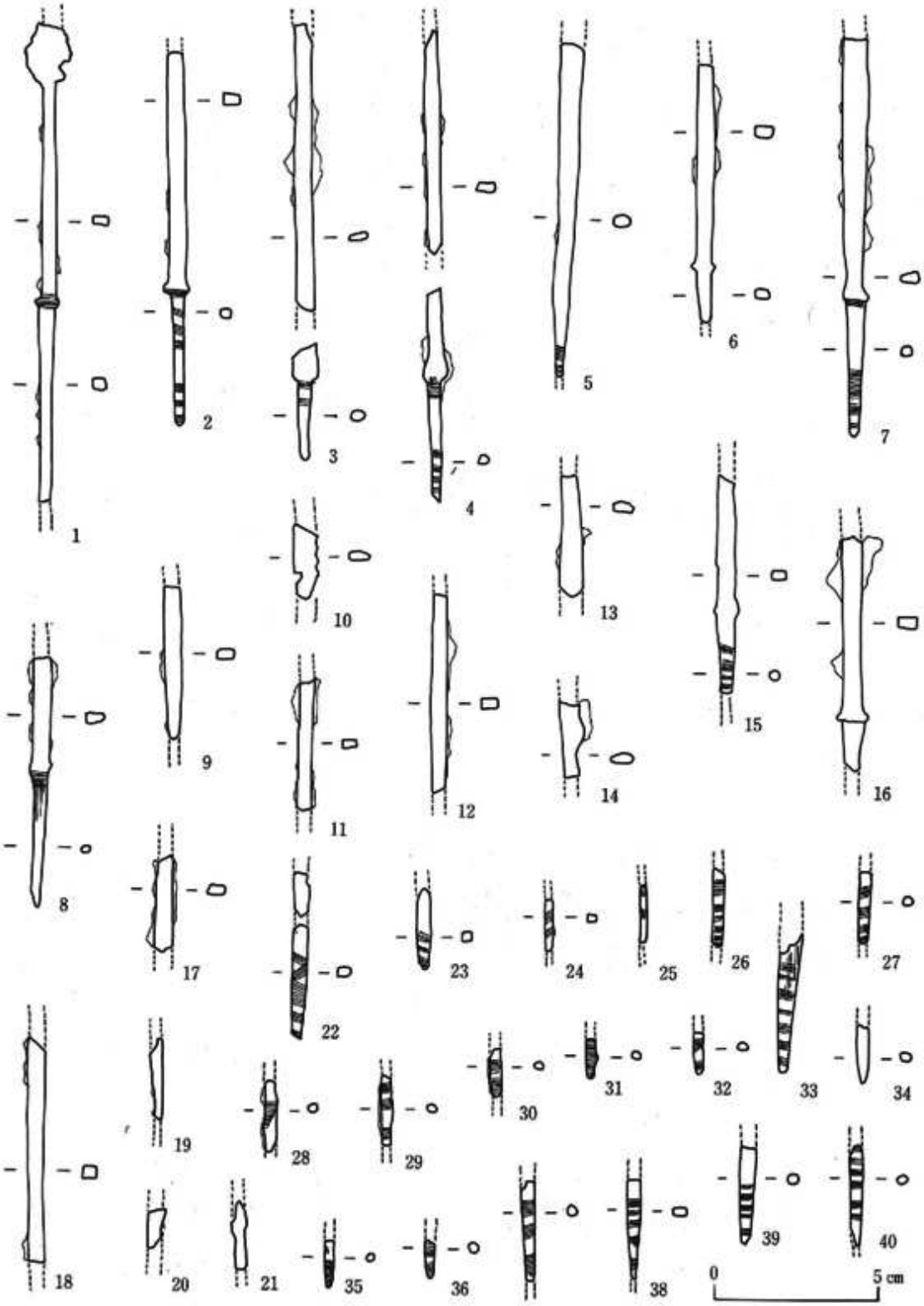
第15図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



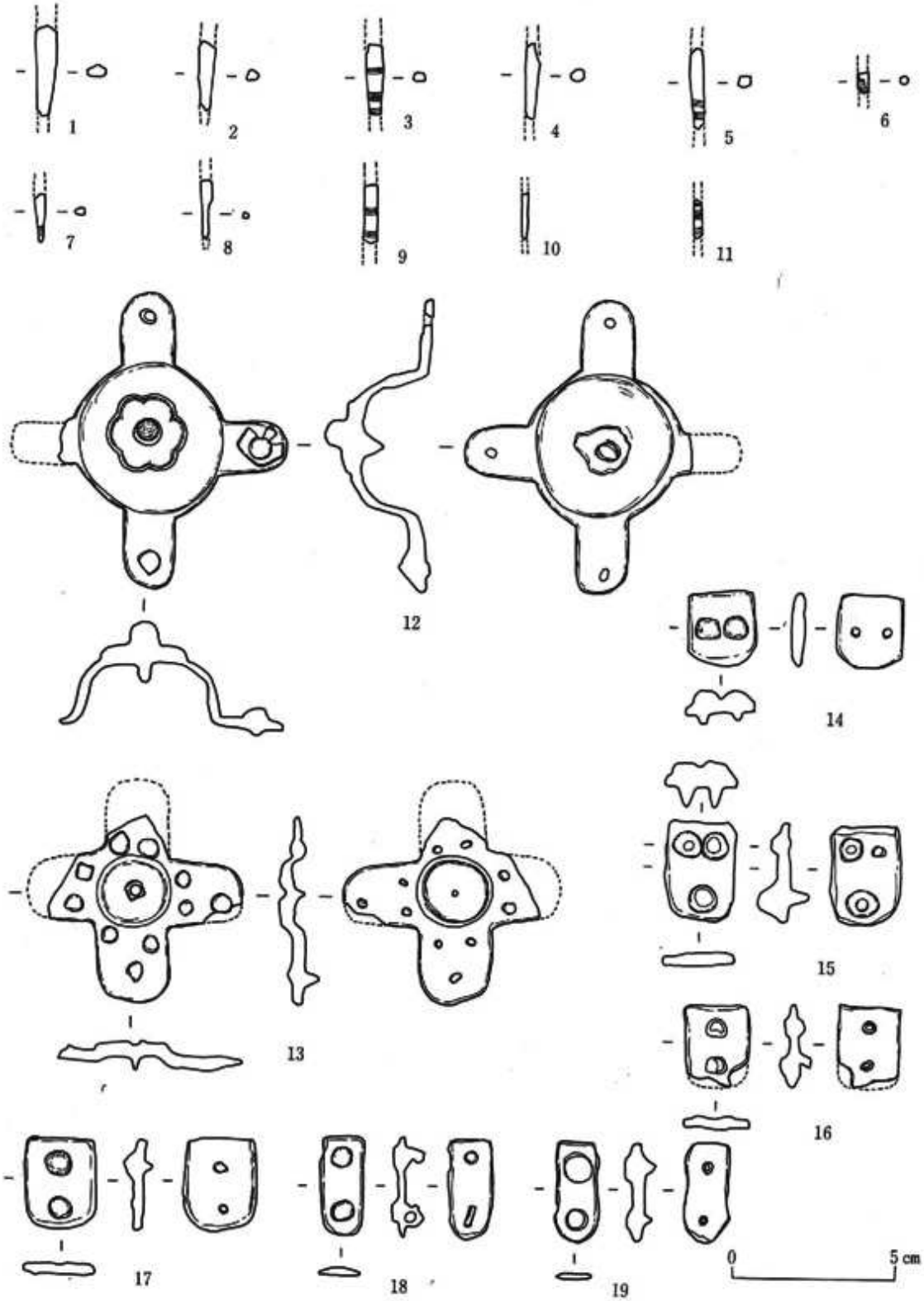
第16図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



第17図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



第18図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



第19図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）

第3表　第3号古墳出土鉄鏃統計表

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						箆被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	箆被長	箆被厚	茎長	茎厚	
14－1	短頸鏃箆被両丸長三角形式	11.2	・4.7	2.2	0.3	2.3	0.8	4.3	0.4	鏃身上部の一部のみ欠損するが、ほぼ完形。茎部に繊維残存
14－2	〃	11.1	3.8	1.8	0.3	3.3	0.6	・4.2	0.3	茎部の下部の一部欠損。ほぼ完形 茎部に繊維残存
14－3	〃	9.5	3.0	1.8	0.2	2.7	0.5	・3.7	0.4	茎部の下部欠損。茎部に木質・繊維残存
14－4	〃	11.1	・4.8	2.2	0.3	2.3	0.8	4.3	0.4	鏃身上部の一部欠損。茎部に繊維残存
14－5	両丸造長三角形式	－	・2.9	1.7	－	－	－	－	－	鏃身の一部のみ残存。
14－6	〃	－	・1.6	1.2	－	－	－	－	－	鏃身の一部のみ残存。
14－7	無頸平造長三角形式	5.4	5.4	3.6	0.4	－	－	－	－	鏃身のみ
14－8	短頸重抉両丸造五角形式	7.3	・7.2	2.7	0.4	2.0	0.7	－	－	重抉の鏃身に柄がついたもの。
14－9	長頸鏃箆被片丸造柳葉式A	14.8	3.0	1.1	0.2	8	0.7	4.3	0.5	重抉の鏃身に柄がついたもの。
14－10	短頸関箆被片丸造長三角形式	8.0	3.2	1.2	0.3	2.8	0.8	・1.7	0.5	箆被が両関を呈する。茎部に木質と繊維残存。茎部下部欠損。
14－11	長頸鏃箆被片丸造柳葉式A	12.7	・2.2	1.0	0.3	7.1	0.4	・3.2	0.5	鏃身の上部欠損。茎部の下部欠損 茎部に繊維残存。
14－12	〃	14.0	2.9	1.1	0.2	7.4	0.5	・4.0	0.3	茎部の下部の一部欠損するが、ほぼ完形。茎部に繊維残存。
14－13	〃	14.7	2.9	1.1	0.3	7.4	0.5	4.3	0.3	鏃身は鋭角的に三角形を呈する。茎部に繊維残存。
15－1	長頸鏃箆被片丸造柳葉式A	12.3	2.5	0.8	0.3	・9.8	0.5	－	－	茎部欠損
15－2	〃	16.7	3.3	0.8	0.3	8.0	0.6	5.3	0.4	茎部に繊維残存。
15－3	〃	12.8	3.2	0.9	0.3	8.3	0.6	・1.2	0.4	茎部は一部残存しているのみ。
15－4	〃	9.7	2.7	1.0	0.3	7.0	0.5	－	－	箆被部の途中で欠損。
15－5	〃	10.4	・2.5	1.0	0.3	7.9	0.5	－	－	箆被部の途中で欠損。鏃身部の一部欠損。
15－6	〃	10.2	2.8	1.1	0.3	7.3	0.4	－	－	箆被部の途中で欠損。

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						篦被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	篦被長	篦被厚	茎長	茎厚	
15－7	長頸鏃篦被片丸造柳葉式A	17.4	2.8	1.1	0.3	7.9	0.6	6.7	0.4	篦被部の上部で屈曲。茎部に繊維残存。
15－8	〃	13.3	2.7	1.0	0.3	7.7	0.6	・3.0	0.3	全体に腐蝕進行。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
15－9	〃	11.3	3.2	1.0	0.3	7.0	0.5	・1.0	0.5	全体に腐蝕進行。茎部は中間より欠損。
15－10	〃	13.3	・1.1	1.0	0.3	7.7	0.6	4.4	0.3	茎部の途中で屈曲。鏃身上部欠損。
15－11	長頸鏃篦被平丸造柳葉式A	6.4	2.8	1.0	0.2	・1.3	0.5	・0.8	0.5	篦被部は鏃身下部より棘篦被部の上部まで欠損。
15－12	〃	10.9	2.8	1.0	0.3	7.0	0.5	・1.0	0.5	茎部欠損
15－13	〃	10.5	2.9	1.1	0.3	・7.5	0.5	－	－	棘篦被部不明。茎部欠損。
15－14	長頸鏃篦被片丸造柳葉式	10.0	2.9	1.0	0.3	・7.0	0.5	－	－	篦被部途中より欠損。
15－15	長頸鏃篦被平丸造柳葉式A	10.8	0.7	1.0	0.2	7.3	0.5	・3.1	0.3	鏃身上半部欠損。茎部腐蝕進行。茎部の一部に繊維残存。
15－16	〃	9.1	2.7	1.0	0.2	6.4	0.5	－	－	茎部欠損。篦被部腐蝕進行。
16－1	〃	14.7	3.0	1.1	0.2	・6.7	0.5	・4.6	0.4	茎部は棘篦被下部より欠損。茎部に繊維残存。
16－2	長頸鏃篦被平丸造柳葉式A	12.5	・2.0	1.0	0.2	7.3	0.5	・3.1	0.3	
16－3	〃	9.5	・1.2	1.1	0.2	8.4	0.5	－	－	茎部欠損。全体に腐蝕進行。
16－4	〃	11.8	2.9	1.0	0.2	7.5	0.4	・1.2	0.4	鏃身上部腐蝕進行。棘篦被部の上部にて篦被部の幅広がる。茎部に繊維残存。
16－5	〃	10.4	2.7	1.0	0.2	7.3	0.5	・0.3	0.3	茎部欠損。
16－6	〃	11.1	2.5	1.0	0.2	7.5	0.5	1.0	0.3	茎部欠損。茎部に繊維残存。
16－7	〃	8.1	・2.2	1.1	0.2	0.5	－	－	－	棘篦被部不明。茎部欠損。
16－8	平丸造柳葉式鏃身のみ	4.3	3.3	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。
16－9	〃	4.4	3.3	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						箆被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	箆被長	箆被厚	茎長	茎厚	
16－10	平丸造柳葉式鏃身のみ	3.1	2.7	1.0	0.3	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。
16－11	〃	3.2	2.7	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。
16－12	〃	3.6	2.8	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。
16－13	〃	3.1	3.1	1.1	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。
16－14	〃	2.1	2.1	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存し、鏃身の下部欠損。
16－15	〃	2.0	2.0	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存し、鏃身の上・下部欠損。
16－16	〃	1.5	1.5	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身の上部のみ残存。腐蝕進行。
16－17	〃	2.7	2.7	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。鏃身の下部欠損。
16－18	〃	2.0	2.0	1.1	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。鏃身の上・下部欠損。全体に腐蝕進行。
16－19	〃	1.9	1.9	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ。鏃身の下部欠損。
16－20	平丸造柳葉式鏃身のみ	2.2	2.2	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。茎部欠損。
16－21	〃	1.6	1.6	1.0	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ残存。茎部欠損。
16－22	長頸棘箆被平丸造柳葉式B	10.2	2.6	1.0	0.2	7.7	0.5	－	－	茎部欠損。
16－23	〃	16.8	3.0	1.0	0.2	7.0	0.5	6.6	0.4	長頸棘箆被平丸造柳葉式であるが、鏃身の先が丸く、従来鑿前式と繊維残存。
16－24	長頸棘箆被片切刃片筒式	15.7	4.1	0.7	0.3	6.7	0.4	5.0	0.4	茎部の下部欠損。茎部に木質と繊維残存。
16－25	〃	16.0	3.5	0.7	0.2	7.0	0.5	5.1	0.3	茎部の下部欠損。茎部に木質と繊維残存。
17－1	〃	15.8	3.6	0.7	0.2	7.0	0.4	・5.5	0.3	棘箆被部は腐蝕進行。茎部の下部欠損。茎部に木質と繊維残存。
17－2	〃	14.0	3.7	1.0	0.2	7.0	0.4	・3.2	0.4	鏃身部の腐蝕進行。茎部の下部欠損。
17－3	〃	14.6	4.0	0.7	0.2	7.0	0.5	・3.7	0.4	茎部の下部欠損。茎部に木質と繊維残存。

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						篦被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	篦被長	篦被厚	茎長	茎厚	
17－4	長頸棘篦被片切刃片箭式	11.7	1.5	0.8	0.2	6.2	0.6	3.8	0.4	鏃身の上部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
17－5	〃	13.0	3.4	0.8	0.2	6.8	0.5	・2.7	0.4	茎部の上部のみ残存。
17－6	〃	14.7	・2.0	0.7	0.2	6.5	0.5	・6.2	0.3	鏃身部の上部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
17－7	〃	14.3	2.6	1.0	0.2	7.6	0.5	・4.1	0.4	全体に腐蝕進行。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
17－8	〃	10.4	1.2	0.7	0.2	7.4	0.5	1.9	0.3	鏃身部の上部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
17－9	片切刃片箭式鏃身のみ	2.3	2.3	0.8	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ。
17－10	片切刃片箭式鏃身のみ	1.9	1.9	0.7	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ。
17－11	〃	2.3	2.3	0.7	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ。
17－12	〃	4.7	4.0	0.9	0.3	－	－	－	－	鏃身部のみ。全体の腐蝕進行。
17－13	〃	3.2	3.2	0.8	0.3	－	－	－	－	鏃身部のみ。全体の腐蝕進行。
17－14	〃	2.6	2.6	0.7	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ。
17－15	長頸棘篦被片丸造鑿箭式	3.0	3.0	0.9	0.2	－	－	－	－	鏃身部のみ。鑿箭式と考えられる。
17－16	長頸棘篦被鏃身部不明	11.7	2.0	0.8	0.3	6.4	0.5	・3.4	0.4	鏃身部は腐蝕が著しく形態不明。鏃身上部欠損。茎部下部欠損。茎部に繊維残存。
17－17	鏃身部欠損、篦被部、茎部のみのもの	3.4	－	－	－	－	0.7	－	－	篦被部の一部のみ。
17－18	〃	6.0	－	－	－	－	0.7	－	－	篦被部の一部のみ。
17－19	〃	11.2	－	－	－	6.0	0.5	4.8	0.3	鏃身部欠損。茎部の中間欠損。茎部に繊維残存。棘篦被部存在。
17－20	〃	11.6	－	－	－	8.0	0.5	・3.5	0.4	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。棘篦被部存在。
17－21	〃	9.8	－	－	－	・7.5	0.6	2.3	0.3	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。棘篦被部存在。
17－22	〃	5.0	－	－	－	1.9	0.6	3.3	0.4	鏃身部欠損。篦被部下部のみ残存。茎部の下部欠損。茎部に木質と繊維残存。棘篦被部存在。

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						箆被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	箆被長	箆被厚	茎長	茎厚	
18－1	長頸棘箆被	14.7	・1.8	1.1	－	6.9	0.5	・6.0	0.4	鏃身部は腐蝕により形態不明。茎部の下部欠損。
18－2	鏃身部欠損、箆被部、茎部のみのもの	11.4	－	－	－	・7.3	0.5	4.0	0.3	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。棘箆被部存在。
18－3	〃	12.3	－	－	－	・8.8	0.5	2.5	0.4	鏃身部欠損。箆被部の一部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
18－4	〃	14.5	－	－	－	・10.8	0.5	3.8	0.3	
18－5	〃	10.2	－	－	－	7.5	0.6	・2.3	0.3	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。棘箆被部存在。
18－6	〃	7.8	－	－	－	6.1	0.6	1.5	0.4	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。棘箆被部存在。
18－7	〃	12.2	－	－	－	・8.0	0.6	4.1	0.3	鏃身部欠損。茎部に繊維残存。
18－8	〃	7.6	－	－	－	3.4	0.6	4.0	0.3	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。棘箆被部存在。
18－9	〃	4.7	－	－	－	－	0.6	－	－	箆被部の一部のみ残存。
18－10	〃	2.2	－	－	－	－	0.7	－	－	箆被部の一部のみ残存。
18－11	〃	4.0	－	－	－	－	0.6	－	－	箆被部の一部のみ残存。
18－12	〃	6.0	－	－	－	－	0.6	－	－	箆被部の一部のみ残存。
18－13	〃	3.6	－	－	－	－	0.6	－	－	箆被部の一部のみ残存。
18－14	〃	2.4	－	－	－	－	0.6	－	－	箆被部の一部のみ残存。腐蝕進行。
18－15	〃	6.6	－	－	－	4.3	0.6	2.2	0.3	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。棘箆被部存在。
18－16	〃	7.0	－	－	－	5.5	0.6	1.6	0.4	鏃身部欠損。茎部の下部欠損。茎部に繊維残存。
18－17	〃	3.1	－	－	－	－	0.6	－	－	箆被部の一部のみ残存。
18－18	鏃身部欠損、箆被部、茎部のみのもの	6.8	－ －	－ －	－ －	－ －	0.6 －	－ －	－ －	箆被部の一部のみ残存。
18－19	〃	2.5	－	－	－	－	－	－	－	箆被部の一部のみ残存。

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						篦被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	篦被長	篦被厚	茎長	茎厚	
18－20	鏃身部欠損、篦被部、茎部のみのもの	1.2	－	－	－	－	－	－	－	篦被部の一部のみ残存。
18－21	〃	2.1	－	－	－	－	－	－	－	篦被部の一部のみ残存。
18－22	茎部一部のみ	－	－	－	－	－	－	5.0	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－23	〃	－	－	－	－	－	－	2.5	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－24	〃	－	－	－	－	－	－	1.6	0.2	茎部のみ。繊維残存。
18－25	〃	－	－	－	－	－	－	1.8	0.2	茎部のみ。繊維残存。
18－26	〃	－	－	－	－	－	－	2.5	－	茎部のみ。繊維残存。
18－27	〃	－	－	－	－	－	－	2.1	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－28		－	－	－	－	－	－	2.2	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－29	〃	－	－	－	－	－	－	2.1	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－30	〃	－	－	－	－	－	－	1.5	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－31	〃	－	－	－	－	－	－	1.2	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－32	〃	－	－	－	－	－	－	1.3	0.3	茎部のみ。繊維残存。腐蝕進行。
18－33	〃	－	－	－	－	－	－	4.3	0.4	茎部のみ。繊維残存。
18－34	〃	－	－	－	－	－	－	1.8	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－35	〃	－	－	－	－	－	－	1.5	0.2	茎部のみ。繊維残存。
18－36	〃	－	－	－	－	－	－	1.2	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－37	茎部一部のみ	－	－	－	－	－	－	3.2	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18－38	〃	－	－	－	－	－	－	3.2	0.3	茎部のみ。繊維残存。

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						箆被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	箆被長	箆被厚	茎長	茎厚	
18−39	茎部一部のみ	−	−	−	−	−	−	3.0	0.3	茎部のみ。繊維残存。
18−40	〃	−	−	−	−	−	−	3.1	0.3	茎部のみ。繊維残存。
19−1	茎部に一部 箆被部	2.8	−	−	−	−	0.5	1.9	0.4	茎部、箆被部、棘箆被部の各一部存在。
19−2	茎部のみ	−	−	−	−	−	−	2.1	0.3	茎部のみ。
19−3	〃	−	−	−	−	−	−	2.2	0.3	茎部のみ。繊維残存。
19−4	〃	−	−	−	−	−	−	2.4	0.3	茎部のみ。
19−5	〃	−	−	−	−	−	−	2.5	0.3	茎部のみ。繊維残存。
19−6		−	−	−	−	−	−	0.6	0.2	茎部のみ。繊維残存。
19−7		−	−	−	−	−	−	1.6	0.3	茎部のみ。繊維残存。
19−8		−	−	−	−	−	−	1.8	0.2	茎部のみ。繊維残存。
19−9	茎部破片	−	−	−	−	−	−	1.8	−	茎部の破片。
19−10	茎部のみ	−	−	−	−	−	−	1.5	−	茎部の破片。
19−11	〃	−	−	−	−	−	−	1.2	−	茎部の破片。

く束にして副葬したのではないかと思われる。

鉄鏃の分類は、「財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　198-」でまとめた内容を参考にして、第3表に示した。以下に基礎的な分類方法を示しておく。

I．頸部の形態による分類

○頸部の長さによる分類

1長頸、2短頸

○箆被の有無及び形態による分類

1無箆被、2関箆被、3棘箆被

II、鏃身部の形態による分類

○逆刺の有無及び形態の分類

1腸快、2重快、3関有、4関無

○鏃身部の刃のつき方及び断面形による分類

A両刃　刃が鏃身の両側につくもの

1両丸、2片丸、3平、4鏑、5片平鏑

6片平鏑、7切刃、8片平刃、9端刃

B片刃　片側にのみ刃を有し鏃身が刀状を有するもの

1平刃、2切刃、3片切刃、4端刃

○鏃身の平面形態による分類（両刃）

A柳葉、B長三角、C正三角、D五角

E鑿

尚、以上の形態を基本とした分類に基づき、時間的経過の中で型式を主体に各時期区分が可能であるとし、その内容が示されている。

Ⅰ期　長頸鏃の出現以前をⅠ期とする（5世紀前半まで）。

Ⅱ期　長頸鏃が出現し、短頸鏃と共伴する時期をⅡ期とする（5世紀末まで）。

Ⅲ期　長頸化した箆被に棘状突出部をもつもの（棘箆被）が出現し、Ⅱ期と共伴するものをⅢ期とする（6世紀）。

Ⅳ期　鑿箭式の盛行期をⅣ期とする。Ⅲ期において主体的な存在であった長頸の棘箆被に柳葉形や長三角形の鏃身部の付くものが衰え、それにかわって鑿箭式が主流となる（7世紀初頭～7世紀前半）。

Ⅴ期　鑿箭式・片刃箭式において端刃がその主流となる時期をⅤ期とする（7世紀中葉～後半）。

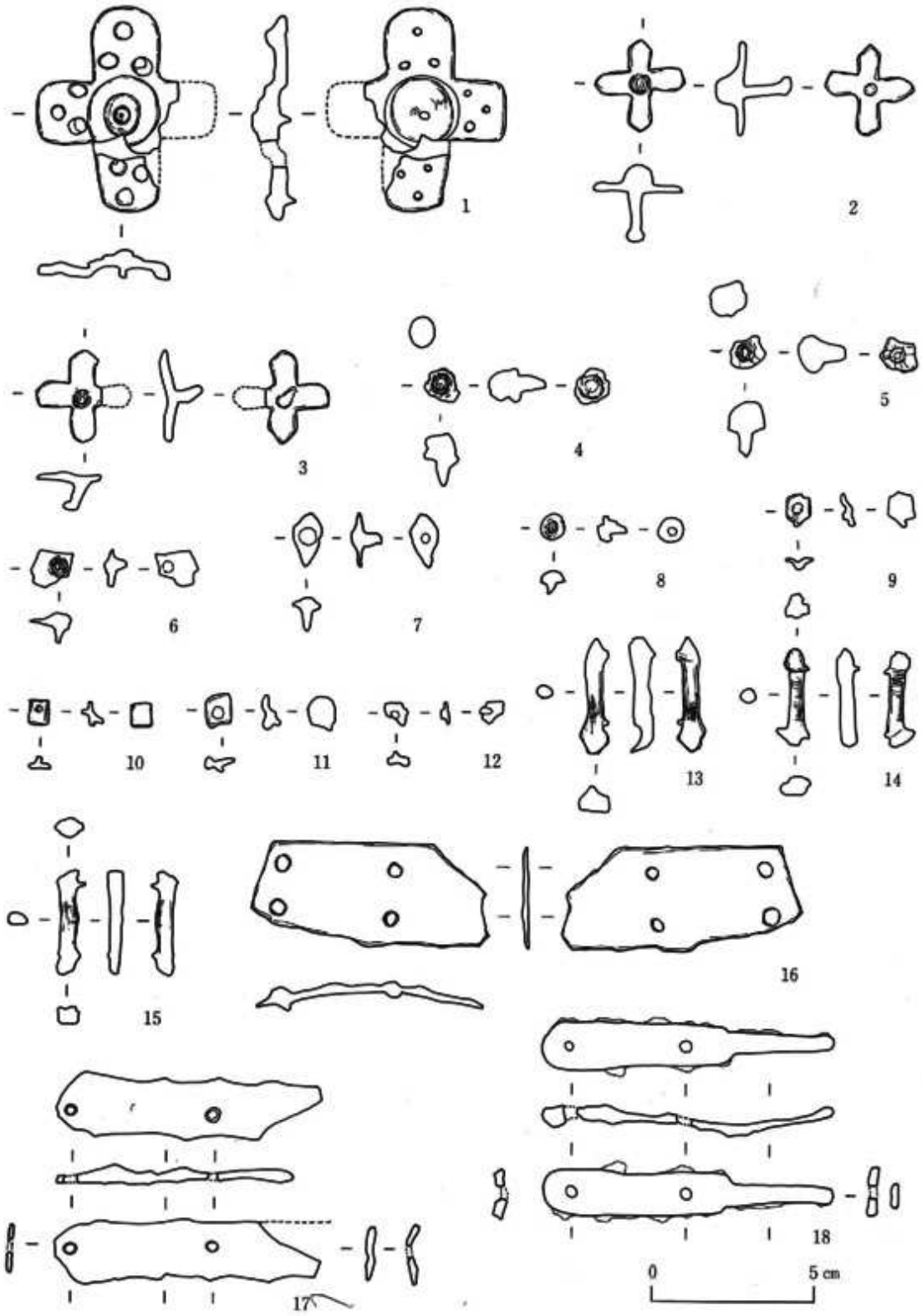
山ノ神第3号古墳出土の鉄鏃は、圧倒的に長頸鏃が多く、短頸鏃は6点だけである。この分類からすると総体的にⅢ期に該当し、他の遺物の編年的位置関係をみても妥当であると思われる。

4．馬具（第19図12～19、第20図1～15、第21図1、口絵4・5、図版16～18・20）

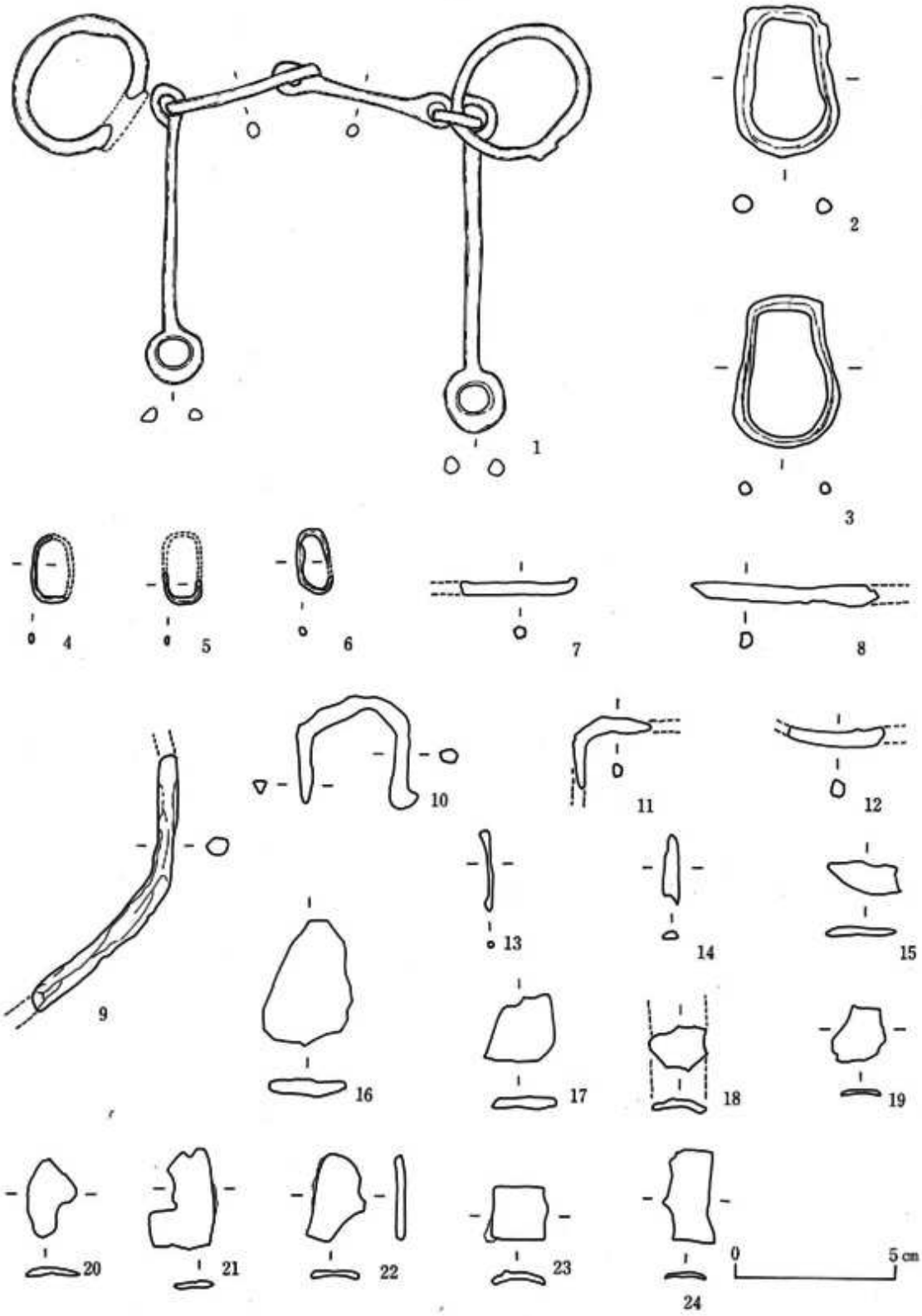
馬具は、第19図12の雲珠、同図13～19及び第20図1の辻金具、同図2～15の飾金具及び留金具、第21図1の素環鏡板付轡が出土しているが、この他に鉄製の板状の破片や釘状の破片が出土しており、これらの中には馬具に関する資料があるものと思われる。

雲珠は、玄室中央部の框石の東側側壁部直下で出土した。半球形状の鉄製の飾金具で、馬をとりまく革帯が十字に交わる箇所に取り付けたもので、取り付け部は十字形に付けられ、取り付け金具の穴と、そのうち1箇所には金具も残存している。半球形の頂部には、6弁の花びらを形ちどった青銅製の飾り金具が、取り付け金具により取り付けられており、一部に金箔が付着していたことから、全体に金箔されていた可能性がある。半球形部は、直径4.5cm、取り付け部も含めると9cm、厚さ0.3～0.5cmを測る。

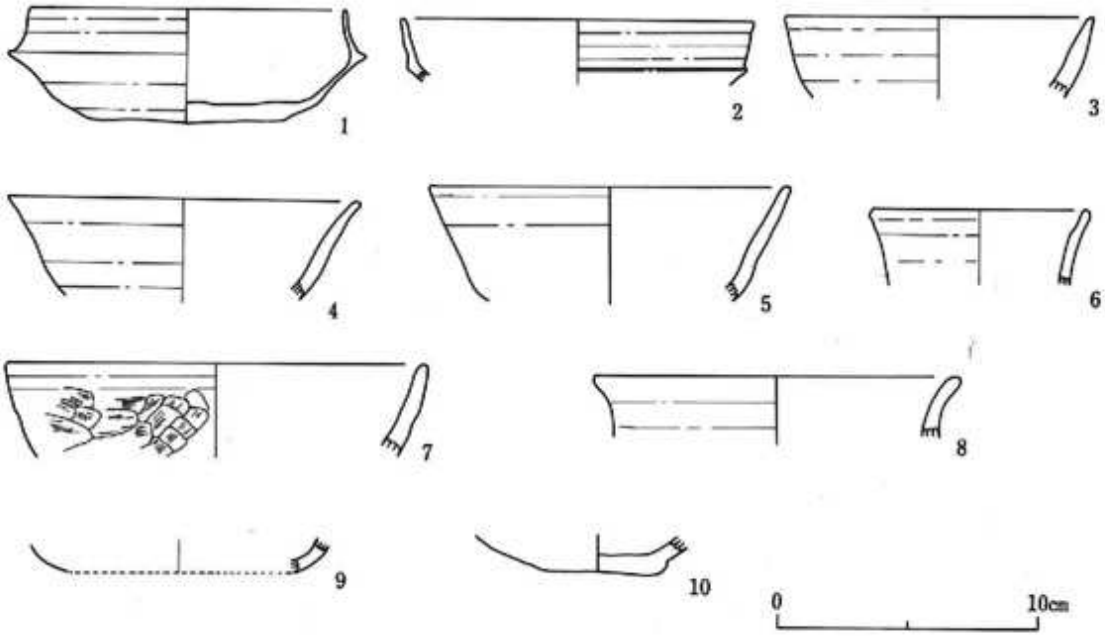
辻金具は、比較的多く出土した。凹凸はあるが平坦な鉄板を、基本型として十字型に作成してあり、革帯が十字に交わる箇所を連結する金具である。第19図13と第20図1は、良好な保存状態で、南側の框石に近い所で出土した。いずれも十字型をなしており、中央部は円形でやや盛り上がっており、中心部に取り付け金具が残されている。十字の取り付け部は、それぞれ3個の取り付け穴が開けられており、一部に取り付け金具が残されている。13は、中心部の円形が2.2cm、全長で約7cm、1は、中央部で2.2cm、全長6.3cmを測る。第19図14～19も同様の辻金具であるが、



第20図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



第21図　第３号古墳出土遺物実測図（１：２）



第22図　第３号古墳出土土器実測図（１：３）

18・19のように取り付け部が細身に作られているものや、取り付け金具の穴が２穴のものもある。これらの辻金具は、金箔されていたのではないかと思われる。

飾金具は、基本的には取り付け金具であるが、さまざまな種類のものが出土している。第20図２・３は、これ自体が取り付け具でありしかも飾りの役割をもつものである。他の資料の中にも同種のものが含まれている可能性がある。13～15は異質の金具で、厚味のある金具の取り付けに用いられたものである。

轡は、南側框石付近で出土した。素環鏡板付轡で、素環部の片方が破損している。食（はみ）の部分は10cm、手綱連結部は10cm前後、素環部の直径は4.5cm×４cmを測る。全体に保存が良い。

５．冑（第20図16、図版17・19）

冑の一部である極めて薄い鉄板が、雲珠と共に出土した。取り付け部の孔が４個開けられている。全体に冑の面に合わせたと思われ、微妙に湾曲している。唯一の出土であり貴重である。

６．その他の資料

第21図２・３は、帯金具の一部である。玄室奥の東側側壁部下で出土した。第20図17・18は、連結金具と思われるが、用途は不明である。第21図４～６は、細い鉄製の金具、９～12は断面が丸型の釘状の資料である。その他鉄板状の資料など多数の出土品がある。

第Ⅴ章　山ノ神第４号古墳

第１節　遺　　構

１．位置と環境

山ノ神第４号古墳は、本調査対象地区の最東端で、第３号古墳の東側に隣接して存在していた。従って、同様八丁地川の左岸河岸段丘の段丘際に位置しており、立地環境はすこぶる良い所である。

本古墳は、山ノ神古墳群の中の一角を締めており、内容については第Ⅳ章に記述したとおりである。八丁地川水系には、山ノ神古墳及び内裏塚第１・２号古墳を最上流部にして、鹿曲川と合流する地点まで、数カ所の古墳群が存在しており、いわば墓域的な雰囲気を漂わせている。

調査は、第３号古墳と併行して実施し、大きな成果を得ることができた。

２．墳丘（第23図、図版26）

本古墳は、調査前にはすでに墳丘のほとんどが削平され、その上に馬頭観世音碑などの石碑が幾つか建立され、一見して古墳かどうか見分けがつかない状態になっていた。八丁地川の段丘線は、丁度古墳の存在している位置を通っているため、東側から西側を臨むと全体が墳丘のように見えるが、段丘を下る斜面を利用して盛土をし古墳を構築していたものと思われる。耕作により削平した土を南側へ広げ、畑地をより広く造成した感があるので、基本的にどこまでが古墳であったのかは、はっきり把握することができなかった。耕作は、石室の床面直上まで行なわれており、トレンチを広く設けて確認したが、全体の範囲を確認することができなかった。

３．石室（第23図、図版27・28）

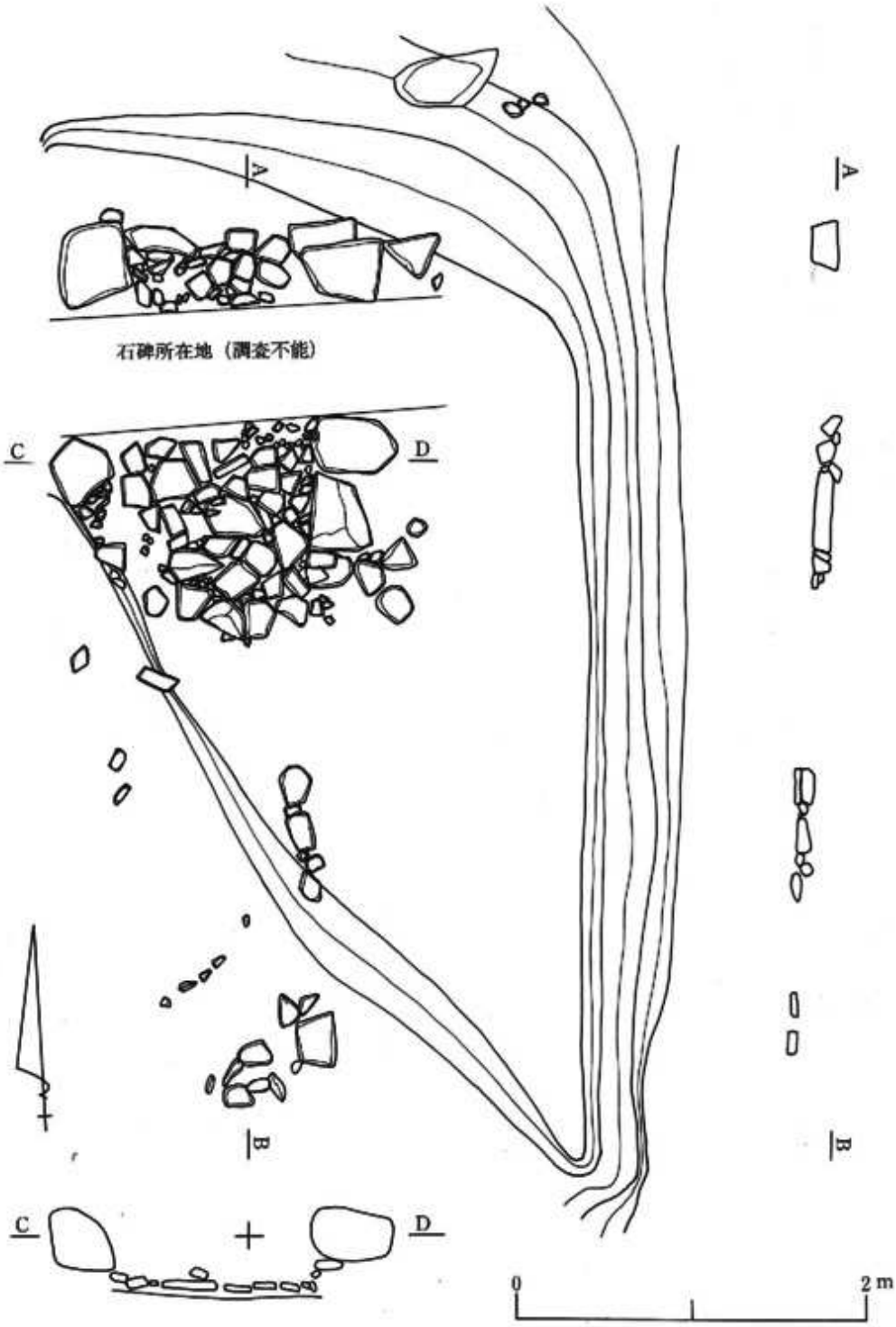
本古墳の石室は、開墾や耕作によりかなりの範囲が削平され、残存する部分は極めて僅かである。確認された部分は、北側にあるべき奥壁がすでに存在していないところから、奥壁の手前の側壁部から玄室の中央部ないしは中央部より奥壁に近い位置の側壁及び床面と、南側に僅かに側壁と床面が検出されている。

側壁は、方形に近い大礫を根石に用いて並べてあり、根石より上部は全く存在していなかった。

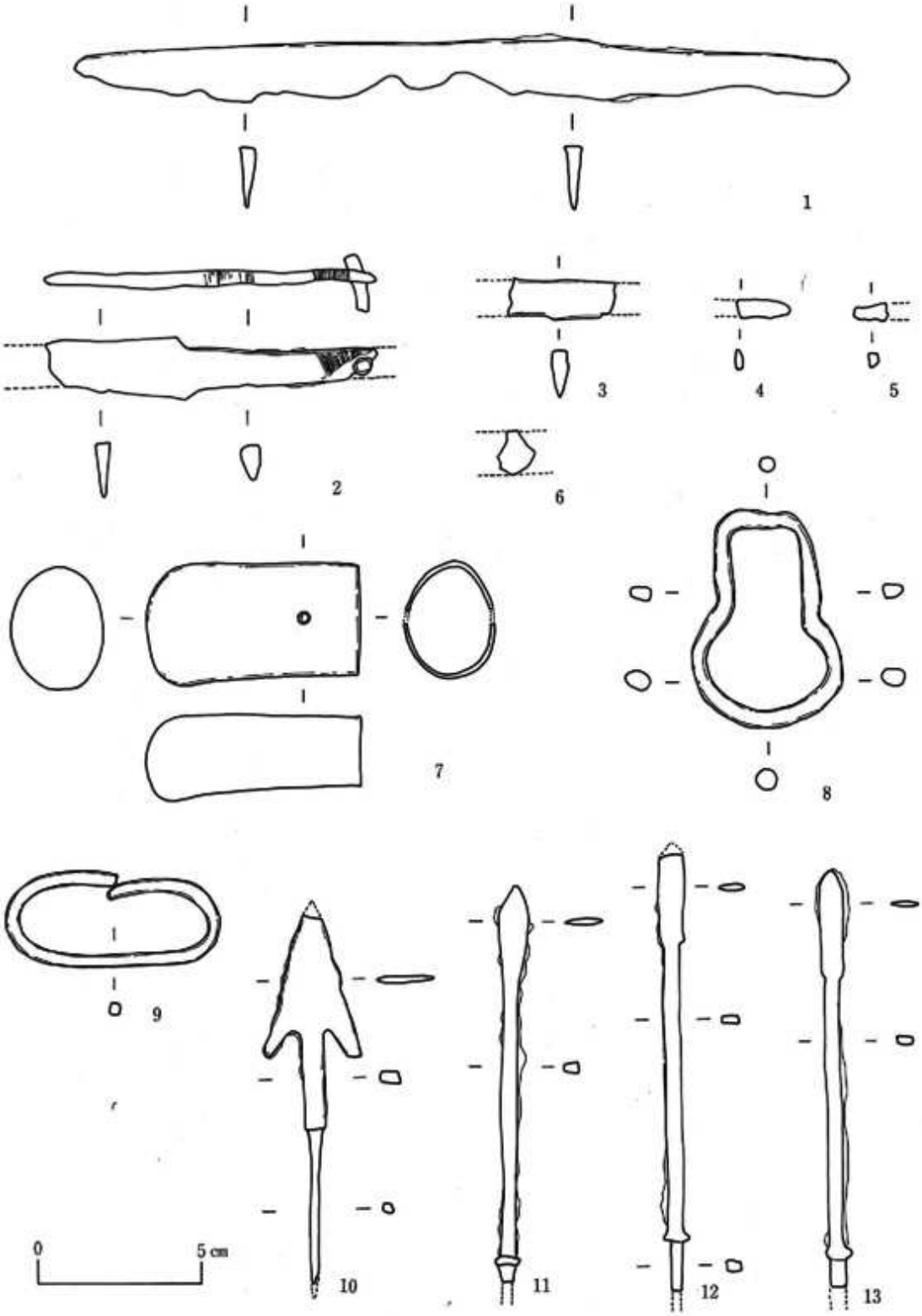
床面は、第３号古墳と同様鉄平石を密に敷き並べてあり、隙き間には鉄平石の小礫や河原の小礫を詰めてあり、丁寧な造りになっていた。

石室の主軸は、N3.5°Eで僅かに東を向いているが、ほぼ真北方向といってもよい。規模は、主軸方向に対して５ｍまで測定することはできるが、破壊が激しく不明といわざるを得ず、幅は側壁間の測定により116cmを測る。

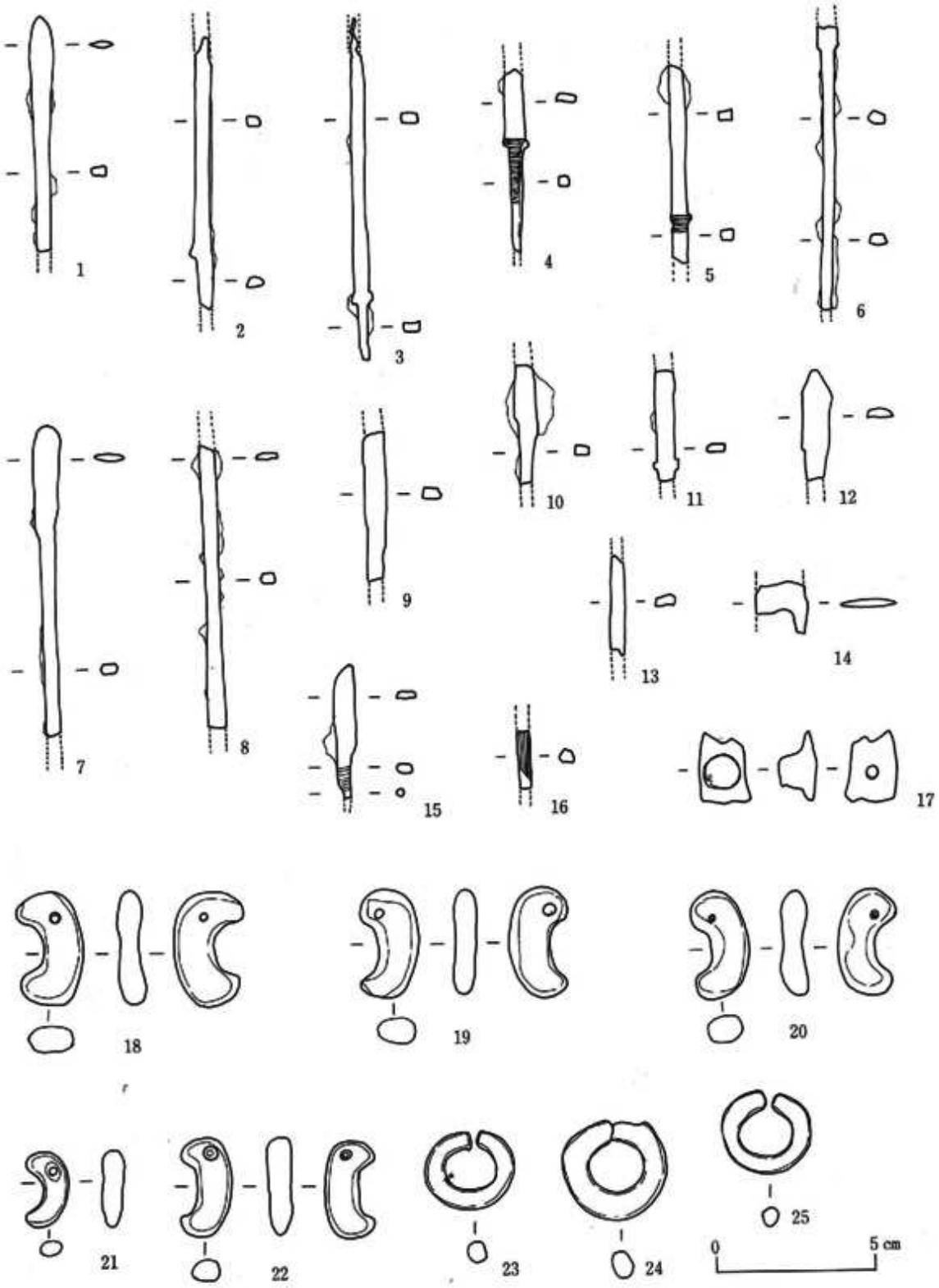
上部構造は、根石以外は全く存在していなかったので知るすべもないが、馬頭観世音碑等の２・



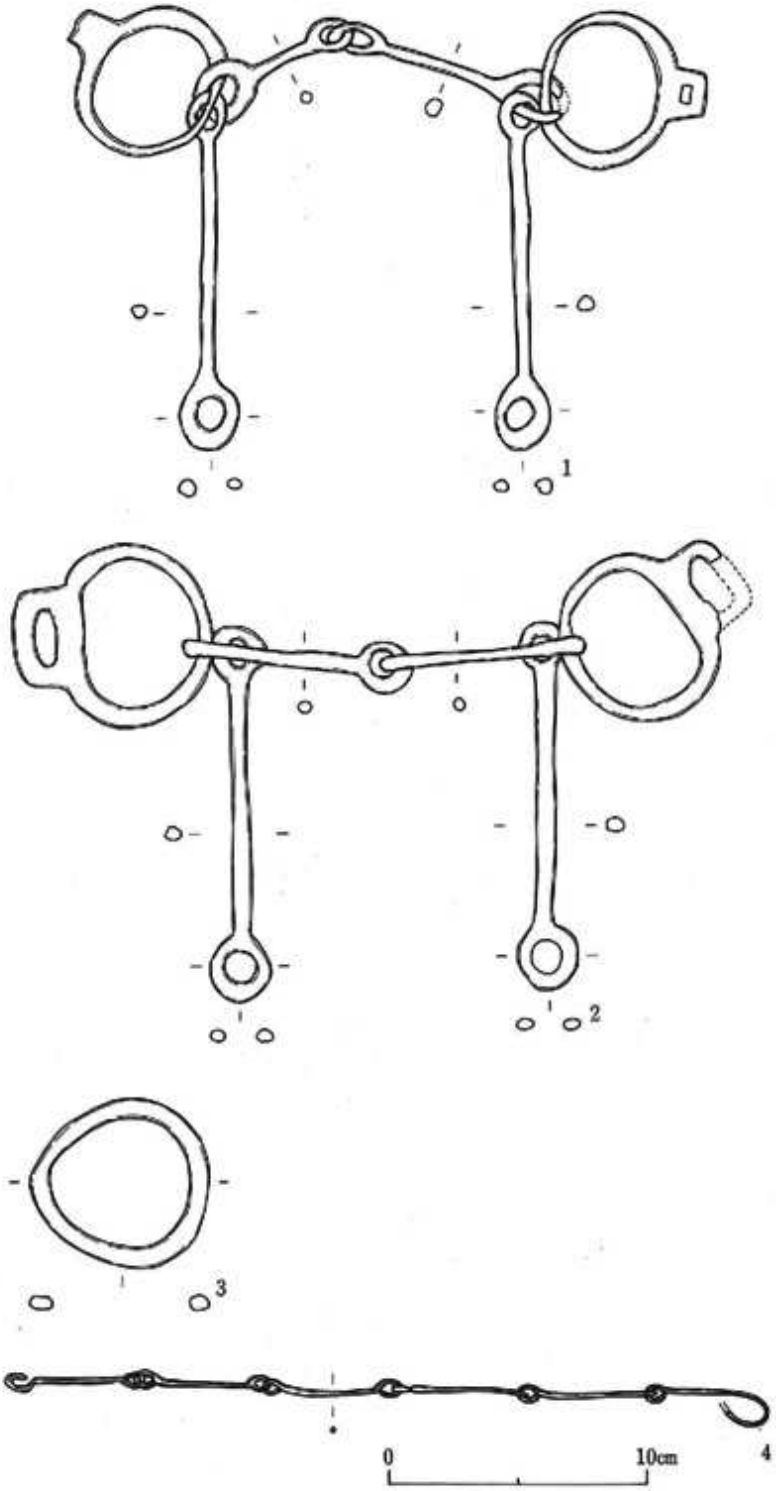
第23図　第４号古墳実測図（１：40）



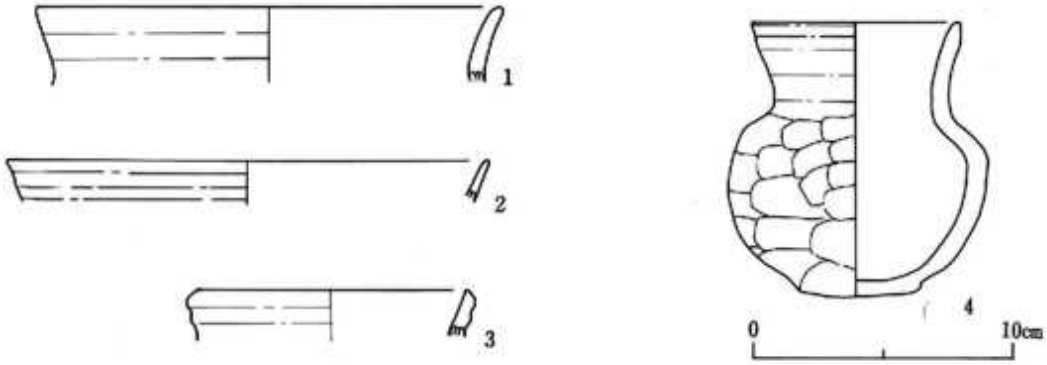
第24図　第４号古墳出土遺物実測図（１：２）



第25図　第４号古墳出土遺物実測図（１：２）



第26図　第４号古墳出土遺物実測図（１：３）



第27図　第４号古墳出土土器実測図（１：３）

第４表　第４号古墳出土装飾品統計表

種　別	挿図番号	長径	幅	厚径	石　質	種　別	挿図番号	長径	幅	厚径	石　質
曲　玉	25－18	3.6	1.3	0.6	瑪　瑙	曲　玉	25－22	3.1	1.1	0.8	水　晶
〃	25－19	3.5	1.5	0.7	〃	金　環	25－23	2.9	2.5	0.6	青銅＋金
〃	25－20	3.4	1.2	0.6	〃	〃	25－24	3.3	3.2	0.8	鉄＋金
〃	25－21	2.4	0.8	0.7	〃	〃	25－25	2.8	2.6	0.6	青銅＋金

３の石碑や、石碑の前に置かれていたやや凹んだ水石は、本古墳の天井石を利用して建立したのではないかと考えられる。

残存した部分は比較的良好な状態であったので、基本的な構造を把握することができたし、また、次に示す出土遺物も時期を知る上では十分な資料であった。

第２節　遺　　物

本古墳から出土した遺物は、量的にはあまり多いとはいえないが、さまざまな種類の良好な資料が出土しており、性格や年代を知るには十分であるといえる。また、土地所有者が本古墳から出土した遺物を保有しており、志よく提供してくださったので、遺構こそ湮滅状態ではあったが、遺物から当時の状況を伝えることは可能である。

１．直刀・刀子・大刀（第24図１～７、口絵７、図版28・29）

第24図１と２は、小型の直刀と把握すべきか、あるいは大型の刀子と把握すべきなのか判断に苦しむ資料である。１は、茎が僅かに欠損しているが、切先からの長さ23.5cm、茎長5.6cm、身幅1.6cmを測る。鋒は直線でなくややナデ肩状に湾曲しているのが特徴である。また、刃部は全体に欠損しており、使用痕であるか腐蝕による欠損であるのかは不明である。２は、刃部と茎の一部

第5表　第4号古墳出土鉄鏃統計表

挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
						箆被部		茎部		
			身長	身幅	身厚	箆被長	箆被厚	茎長	茎厚	
24－10	短頸箆被腸抉両丸造三角形式	11.3	・4.3	1.8	0.2	3.0	0.6	・4.6	0.3	鏃身部の上部の一部欠損。
24－11	長頸棘箆被片丸造柳葉式	12.2	3.0	1.2	0.2	9.0	0.5	・0.6	0.4	茎部の一部欠損。
24－12	〃	13.3	・2.8	0.8	0.2	9.0	0.5	・1.6	0.4	鏃身部の上部の一部欠損。茎部の下部欠損。
24－13	〃	12.7	3.2	0.9	0.2	8.5	0.5	・1.0	0.4	茎部は一部のみ残存。棘箆被部に繊維残存。茎部に木質部残存。
25－1	〃	7.4	3.0	0.7	0.2	4.3	－	－	－	茎部の下部欠損。
25－2	長頸棘箆被	8.5	－	－	－	・6.8	0.5	・1.5	0.5	鏃身部欠損。
25－3	〃	10.7	・1.5	－	－	・8.0	0.5	・1.6	0.5	鏃身部の一部残存。茎部の一部残存。
25－4	〃	5.7	－	－	－	・2.5	0.7	・3.3	0.3	鏃身部欠損。茎部の一部残存。棘箆被部及び茎部に繊維残存。
25－5	〃	6.2	－	－	－	・4.8	0.5	・1.4	0.4	鏃身部欠損。茎部の一部残存。棘箆被部及び茎部に繊維残存。
25－6	〃	8.9	－	－	－	・8.8	0.5	－	－	鏃身部と茎部欠損。茎部の一部のみ残存。
25－7	長頸棘箆被片丸造鑿矢式	9.8	3.2	0.9	0.3	・6.3	0.5	－	－	鏃身部は片丸造鑿矢式。鏃身部は腐蝕進行。茎部の一部欠損。
25－8	長頸棘箆被片丸造柳葉式	8.9	・1.1	0.8	0.2	・7.8	0.5	－	－	茎部の一部欠損。鏃身部の一部残存。
25－9	長頸－	4.6	－	－	－	・4.6	0.6	－	－	鏃身部と茎部の一部欠損。
25－10	〃	3.8	－	－	－	・3.8	0.6	－	－	鏃身部と茎部の一部欠損。
25－11	〃	3.4	－	－	－	・3.4	0.6	－	－	鏃身部と茎部の一部欠損。
25－12	長頸－片丸造柳葉式	3.4	2.6	0.8	0.2	－	－	－	－	鏃身部残存。茎部欠損。
25－15	短頸片矢式	4.2	2.8	0.6	0.2	1.1	0.5	・0.3	0.3	鏃身部残存。茎部は一部残存。茎部は繊維残存。
25－16	茎部のみ	1.8	－	－	－	－	－	・1.8	0.5	茎部のみ。

のみが残存している資料である。茎部には目釘がそのまま残っており、また、繊維が炭化し付着している。本資料は、身厚0.5cmとかなり厚く、製作がしっかりしているものである。3～5は、直刀ないし刀子の破片である。7は、鉄製円頭大刀の柄頭である。長さ6.5cm、幅3.5cm、厚さ2.5cmを測る。頭部から4.7cmの位置に目釘穴が開けられている。大刀に関する資料は、当町にとっては初めての発見であり、極めて貴重である。

2．金具類（第24図8・9、口絵8、図版30）

8・9は、帯金具に関係する資料かと思われる。8は、ベルトの留め金具、9は留め金具で留めた革帯を通す金具と考えられる。第3号古墳でも玄室内から2点出土しており、本資料も玄室部床面から出土したものである。

3．鉄鏃（第24図10～13、第25図1～13、15・16、口絵7、図版29）

鉄鏃は、合計19点出土しているが、このうち数点は土地所有者が以前に本古墳から採取したものも含まれている。また、腐蝕の激しいものもあり、同一個体が折損している点数に含まれている可能性もある。形態的には、10は、短頸箆被腸快両丸造三角形式で、刃部先端部と茎部の末端の一部が欠損しているが、全体に保存が良い。時期的に古いとみられる短頸の資料は15にもみられるが、短頸片矢式である。その他の資料は長頸であるが、完全に整っているものはない。11～13、第25図1は柳葉式で、刃部に逆りのあるものとないものが存在している。第25図4・5・15・16は、茎部に繊維や木質部が残存している。

4．装飾品（第25図18～25、口絵6、図版31・32）

装飾品は、曲玉5点と金環が3点出土している。第25図18～20・22は、形態的にコの字型を程しており、21は三日月状の形態をなしている。石質は、18～21は瑪瑙製、22は水晶製である。水晶製の曲玉は、当町では初めての出土である。金環は23～25の3点が出土している。23と25は、青銅製で、大きさもほぼ同様であり、全体に金箔が良好に残っている。24は鉄製の珍しい資料で、腐蝕が激しいが断面が丸ではなくやや偏平である。金箔は全く残存していない。

5．馬具（第26図1～3、口絵8、図版30・31）

馬具は3点出土しているが、いずれも土地所有者から提供していただいた資料である。1と2は、素環鏡板付轡、3は素環部の資料で、いずれも保存状態が良い。

6．土器（第27図1～4、図版32）

本古墳から出土した土器は、土師器の甕1、須恵器の坏2、須恵器の壺形土器の破片である。4は、古墳に隣接する畑から出土した大型の手捏土器で、土地所有者から提供していただいた。

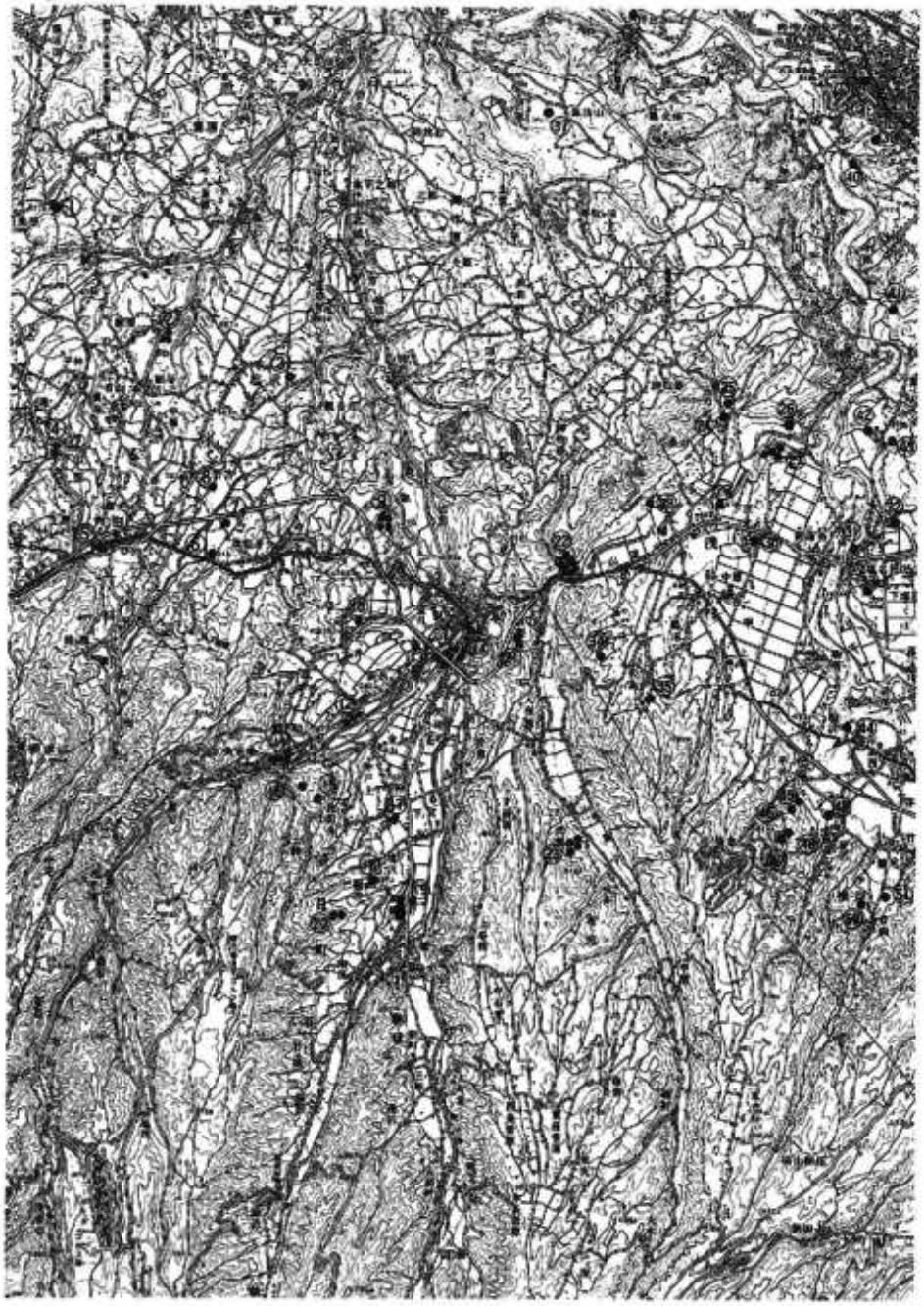
第Ⅳ章　総　　括

山ノ神A遺跡は、B遺跡とともに、下吹上遺跡、上吹上遺跡、平石遺跡など八丁地川水系を代表する遺跡と一連の遺跡であるが、水田造成等により破壊を余儀なくされ、遺構を確認することはできなかった。出土したのは縄文時代早期から中期末葉にまで及ぶ僅かな土器片と石器だけであったが、周辺の遺跡のあり方と近似しており、特に早期の押型文土器、前期前半の土器、中期初頭から末葉までの土器などが集中している。

これら一連の調査により、縄文時代の編年体系の組み立てがかなり可能となってきており、蓼科山北麓地域全体の歴史的変遷を把握する上でも貴重な所見を得ることができた。

山ノ神第３・４号古墳は、本文中にも記述したが、特に第３号古墳は外見上ではかなり破壊を受け良好な状態ではなかったが、半地下式の石室構造をもっており、内部の状況は誠に保存が良く、遺物も良好な状態で出土した。第４号古墳も、外見上は煙滅状態であったが、僅かに残された床面より、曲玉や鉄鏃などの貴重な遺物が出土した。

八丁地川水系の古墳は、上流より内裏塚第１・２号古墳（５世紀代・山頂墳）、山ノ神古墳群第１～４号古墳（６世紀代）―第１号古墳は、昭和36年に桑畑造成にともなって破壊され、遺物を中心に現地調査が行なわれ、直刀19、小刀子２、刀装具20、馬具４、埴輪片４、鉄鏃53、勾玉７、管玉１、切子玉２、丸玉17、金環13、銀環１、金鈴２など合計127点の遺物が出土している。真光寺古墳群第１～４号古墳（７世紀）―第１号古墳は、昭和57年度に発掘調査され、良好な状態で石室構造が検出されるとともに、直刀１、刀子６、金環３、銀環１、土師器甕片１、フラスコ形長頸壺１が出土している。大塚古墳群第１～２号古墳（７世紀）―第１・２号古墳は昭和55年度に発掘調査、尾崎古墳群第１～４号古墳（７世紀）―第４号古墳は、昭和55年度発掘調査が実施されるなど、多くの古墳群の存在と、調査の成果が得られている。しかし、これ程の古墳が存在しているにもかかわらず、生活址である住居址の確認がまだなされていないのは気がかりである。分布調査の結果をみても、遺物の散分しているところが見あたらず、今後における大きな課題であるといえる。もうひとつの課題は、狭長ないわばさえぎられ限定された地域に多くの古墳が点在しているところをみると、長期間に渡る古墳時代の墓域として把握できないかということである。この課題を考えるには、地域を制定していた豪族（氏族）の解明をしなければならない。それが、後に名のみられる望月氏とどのような関連があるのか、あるいは望月氏そのものであるのかという問題も表出してくる。この問題は、現在のところ望月牧の存在から遡りながら歴史的初源をさぐっていかなければ解明できないと考えている。また、望月牧の内容は単に地域的な課題にとどまらず、中央政権とのつながりの中で把握する必要があり、さらには古東山道や後沖遺跡で発見された玉つくり工房跡などについても当然関連した問題として把握していかなくてはならないと思われる。このような中で、山ノ神第３・４号古墳の調査は、古墳時代の様相を解明して



第28図　望月町周辺の古墳分布図（1：100,000）

第6表　望月町周辺の古墳一覧表

立　科　町

①	君塚古墳	②	中尾古墳群1号～3号	③	塩沢古墳
④	中村古墳群1号～2号	⑤	正明寺古墳	⑥	火の雨塚古墳
⑦	釜石古墳	⑧	松の木古墳		

望　月　町

⑨	武陵古墳群1号～4号	⑩	上新井原古墳	⑪	山ノ神古墳群1号～4号
⑫	真光寺古墳群1号～4号	⑬	大塚古墳群1号～	⑭	尾崎古墳群1号～4号
⑮	内裏塚第1号古墳	⑯	内裏塚第2号古墳	⑰	王塚古墳
⑱	姫塚古墳	⑲	金塚古墳群1号～11号	⑳	栃久保古墳1号～2号
㉑	布施山寺古墳	㉒	柳沢古墳群1号～8号	㉓	大林古墳群1号～4号

浅　科　村

㉔	入の沢第1号古墳	㉕	入の沢第2号古墳	㉖	火の雨塚古墳
㉗	土合古墳群1号～4号	㉘	蓮田唐沢古墳	㉙	経塚古墳
㉚	―――	㉛	上の平塚古墳	㉜	洞口古墳
㉝	原古墳	㉞	茨尾根古墳	㉟	宮脇古墳

小　諸　市

㊱	観音平古墳	㊲	宝塚古墳	㊳	鹿島古墳
㊴	万才海土古墳	㊵	与良平古墳	㊶	八幡在家古墳
㊷	宮下古墳	㊸	宮前古墳		

佐　久　市

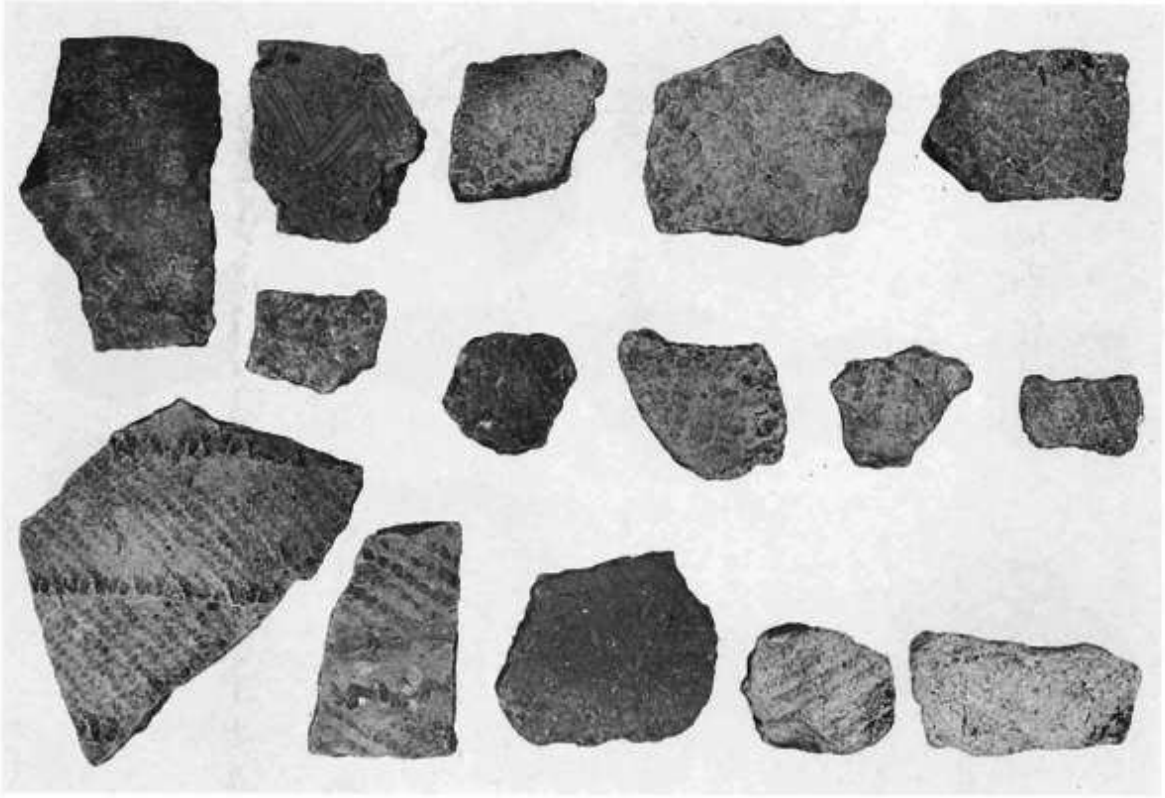
㊹	火の雨塚古墳	㊺	瀧峯第1号古墳	㊻	瀧峯第2号古墳
㊼	堂の入山第1号古墳	㊽	堂の入山第2号古墳	㊾	坪の内古墳
㊿	釜塚古墳	(51)	墓陵古墳		

いくための重要な資料を提供するものであり、視標となりうるものである。

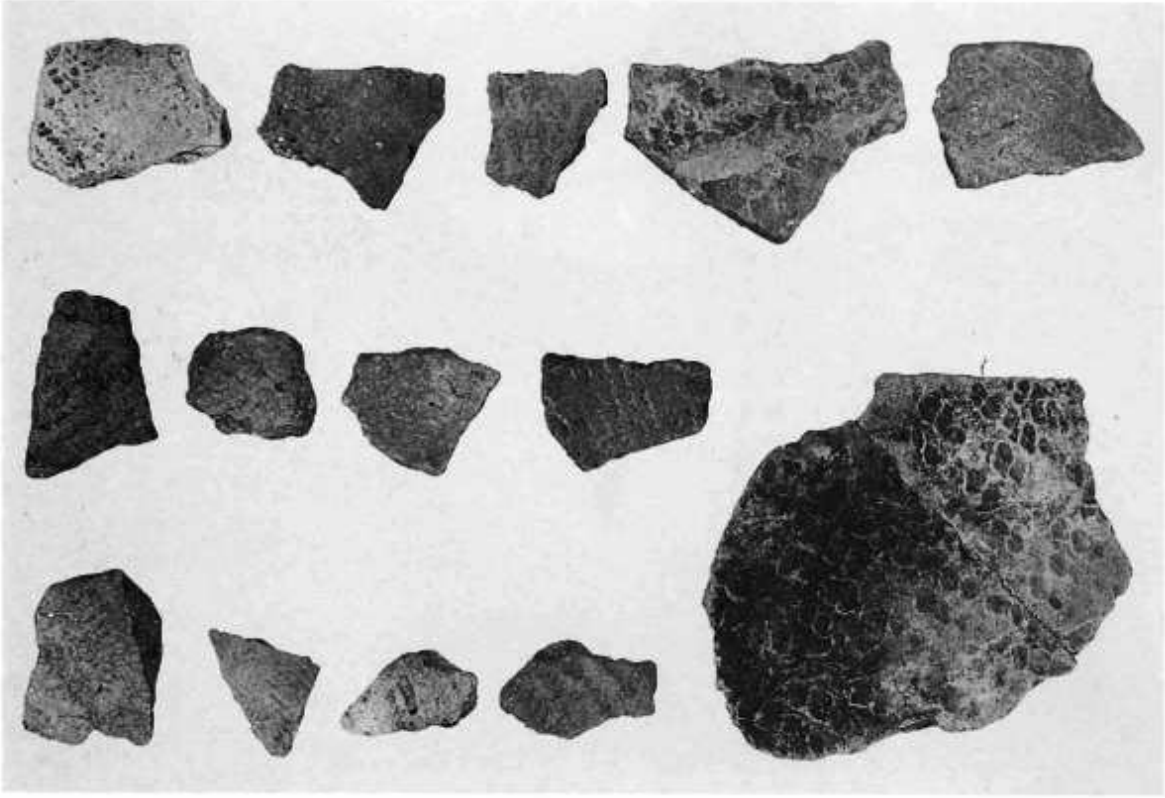
第28図は、望月町周辺の古墳分布図であるが、これにより分布の地域的把握が可能かと思われる。大きくは、鹿曲川、布施川、千曲川に囲まれた御牧原台地には古墳は存在せず、その周辺地域に分布していたり、蓼科山の裾野である鹿曲川と布施川の間の御牧原台地へつながる尾根を境にして、東側と西側地域では分布域が大きく2分されている。しかし、よく観察すると、瓜生坂が双方の分布のつながる地点として極めて重要な位置を締めていることがわかる。

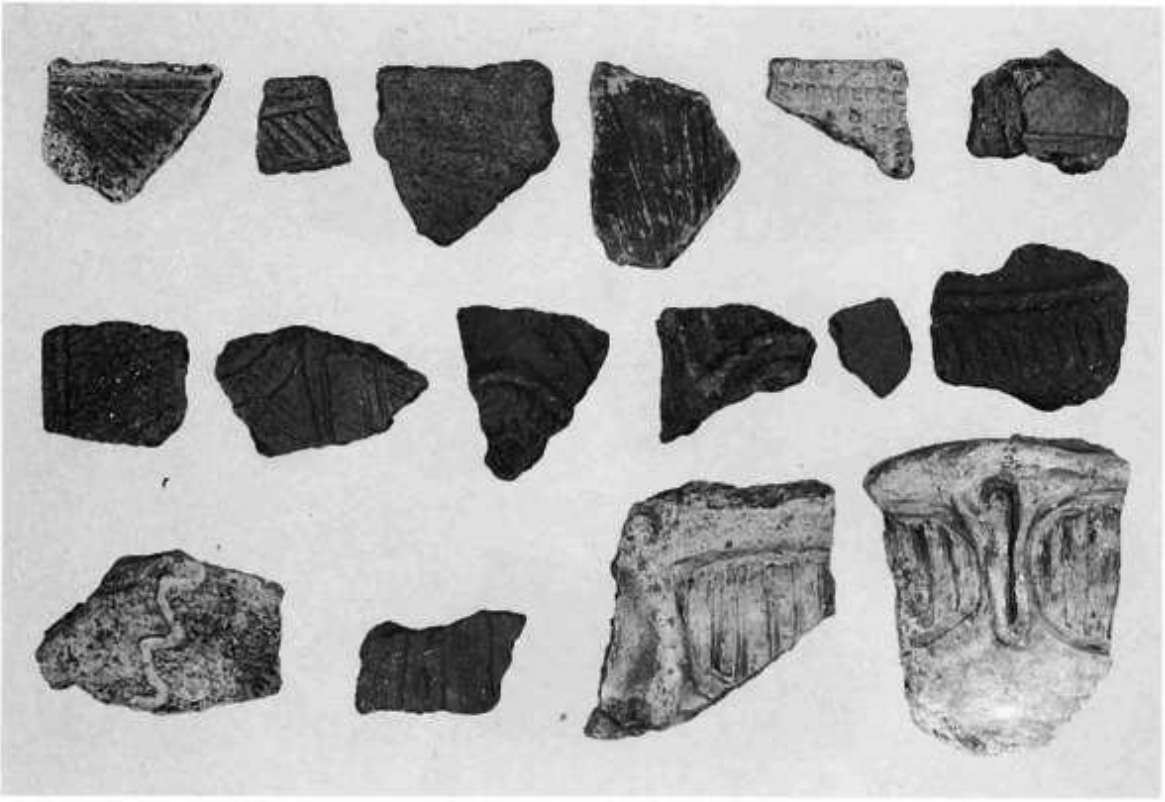
紙数の関係で多くは語れないが、広域的にみた一つの古墳のあり方、あるいは古墳そのものの様相、氏族・豪族の内容など、実に様々な研究課題があり、本調査の内容もこれらの一担を担って、歴史の解明に大きく役立つものと期待されるものである。

図版一　A遺跡全景

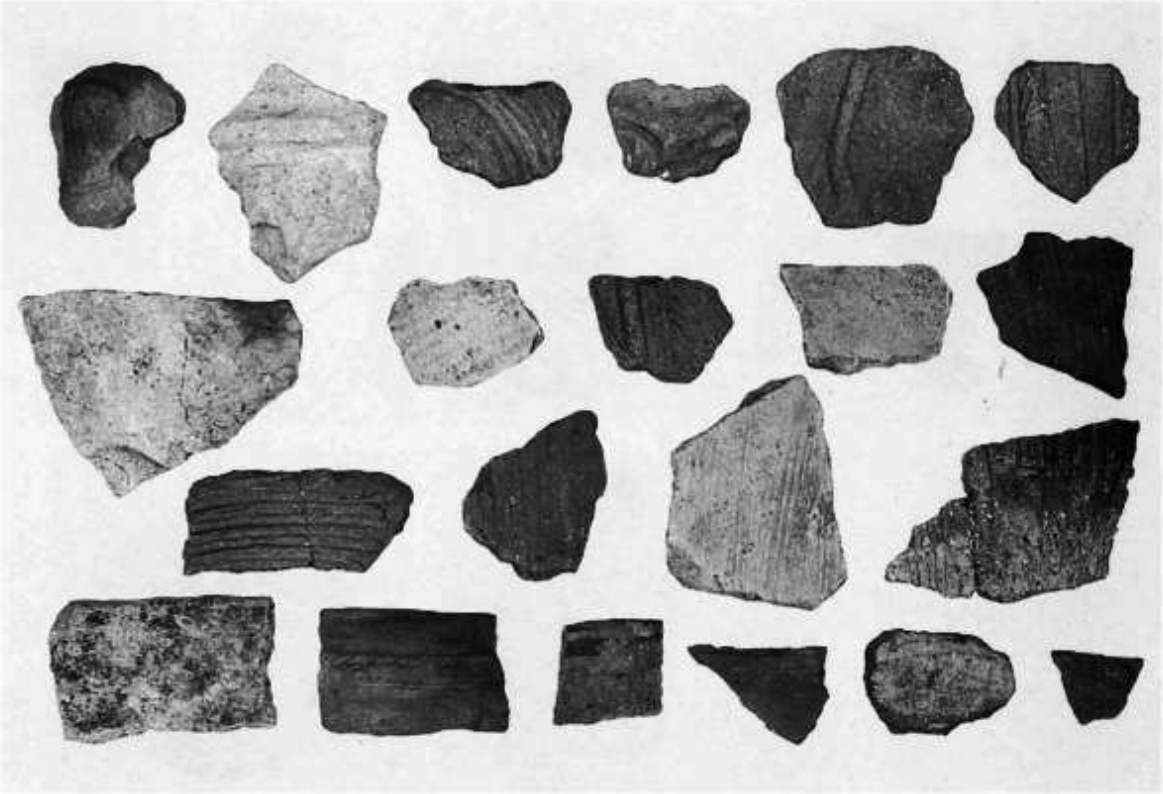


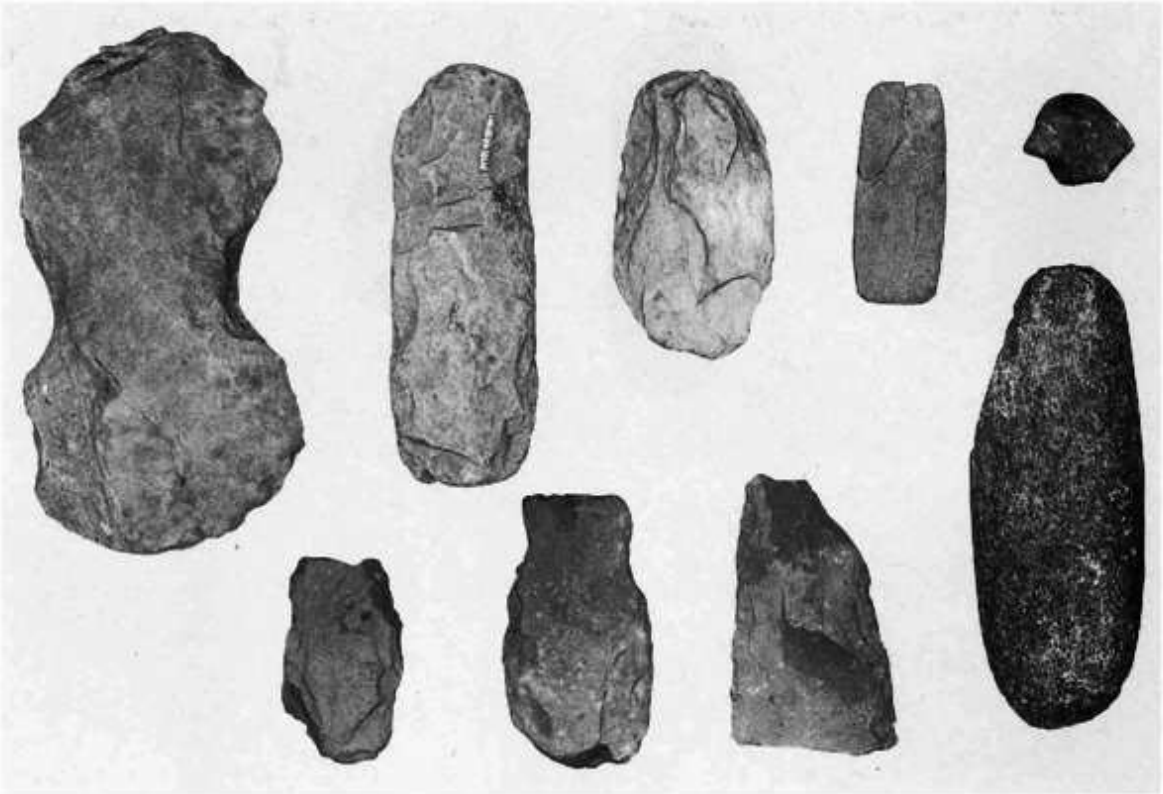
図版二　A遺跡



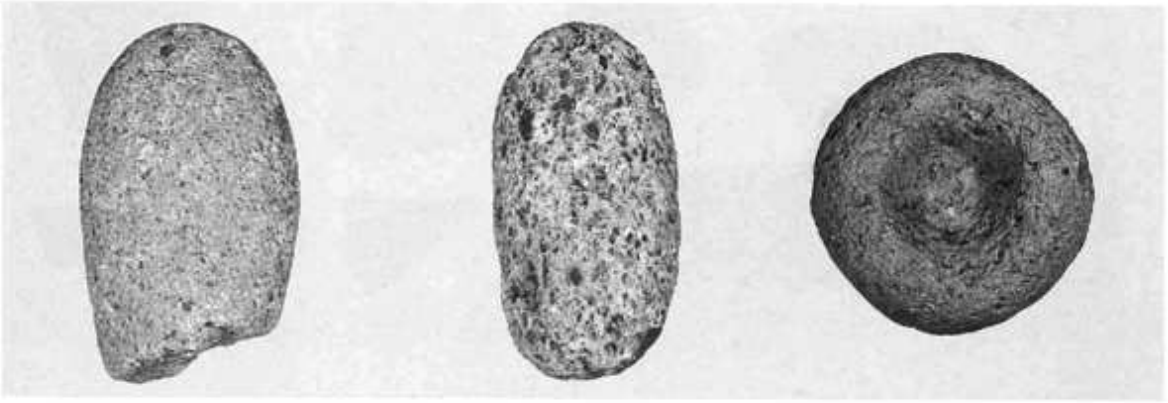


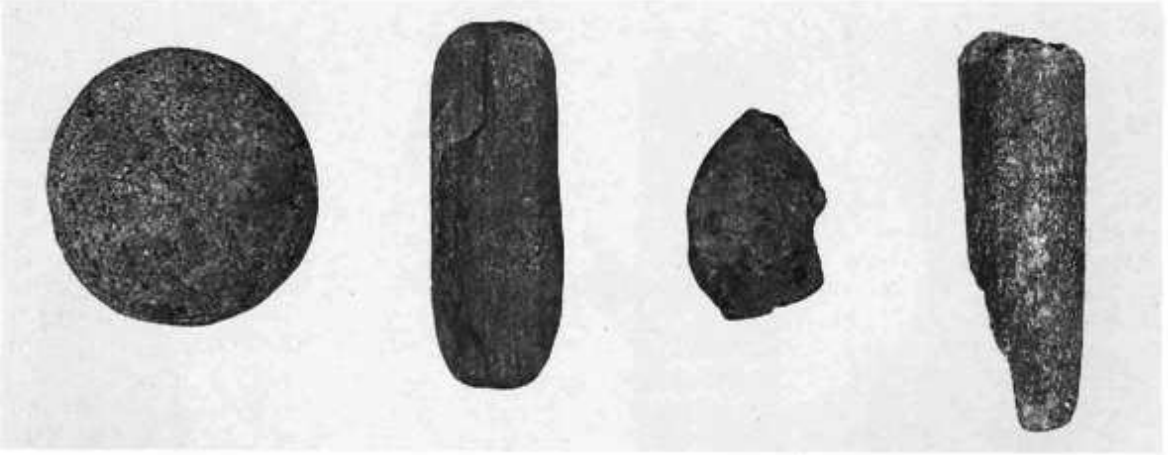
図版三　A遺跡





図版四　A遺跡

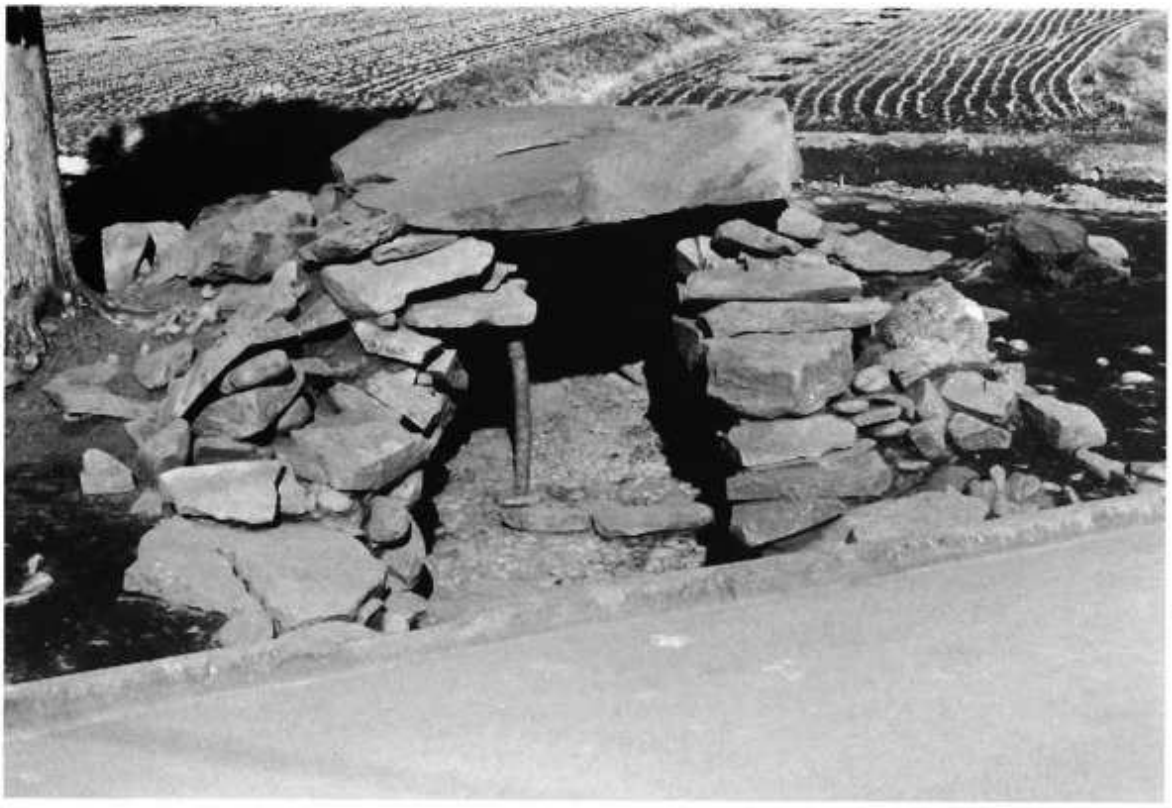




第３号古墳全景（南側より）

第３号古墳全景（東側より）

図版六　第三号古墳



石室全景

側壁及び床面の状態

初期床面の構築段階

玄室の様子

図版八　第三号古墳

玄室・奥壁の状態

東側側壁の状態

東側側壁及び床面の状態

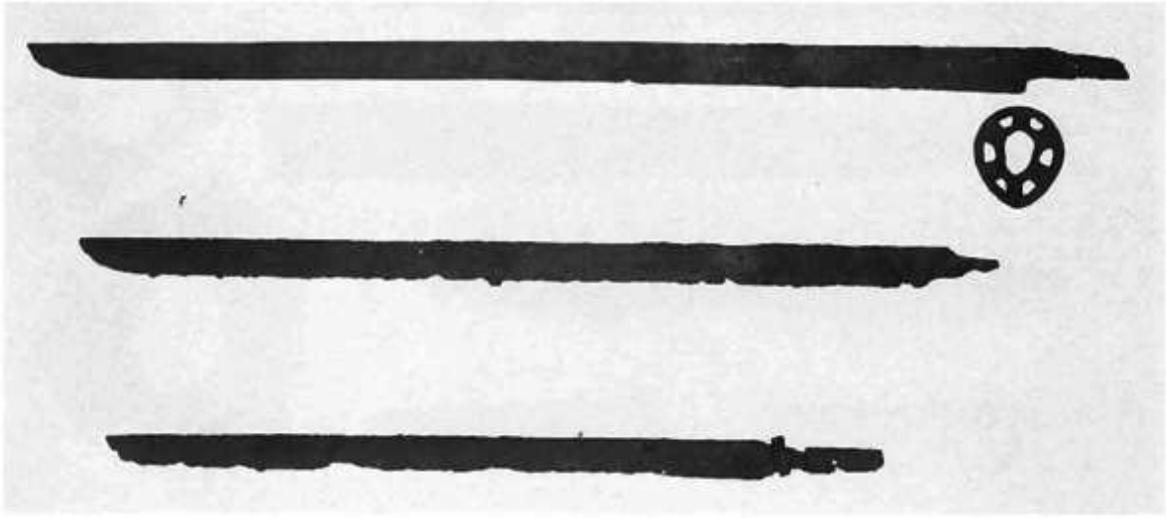
西側側壁の状態

図版十　第三号古墳

石室内框石

床面の状態

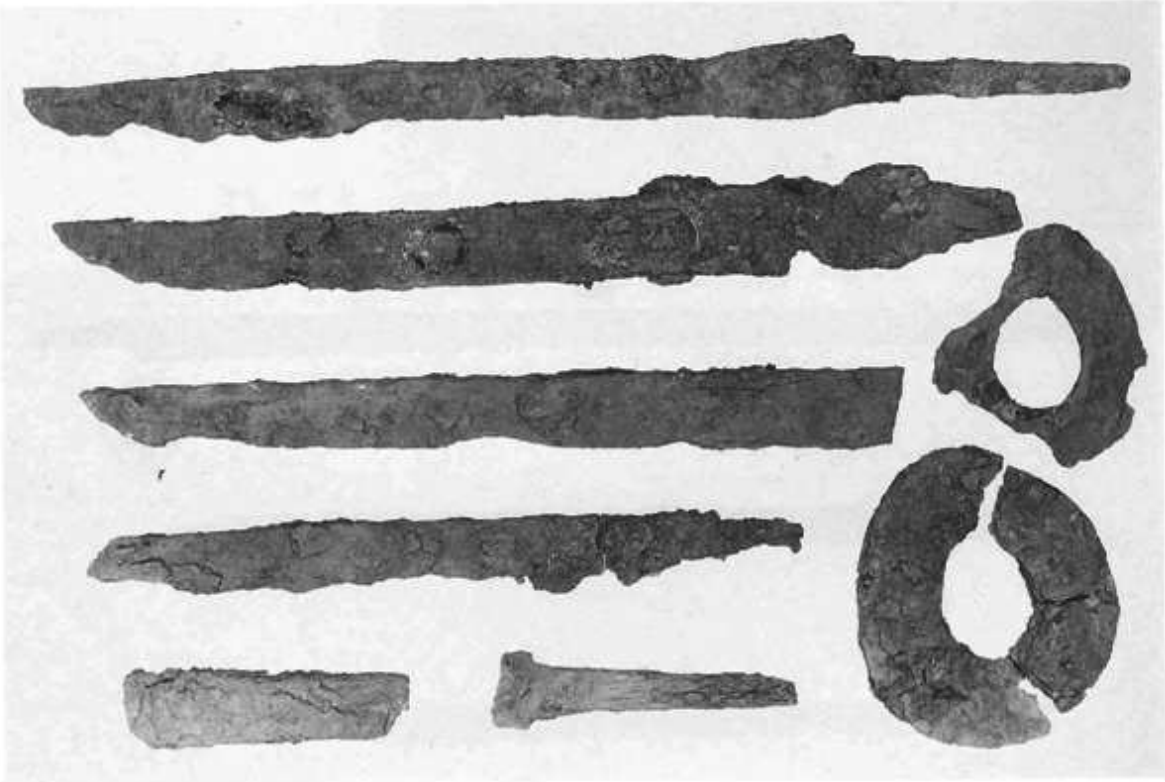
直刀出土状態



直刀・鍔

図版十二　第三号古墳

直刀・刀子・轡出土状態

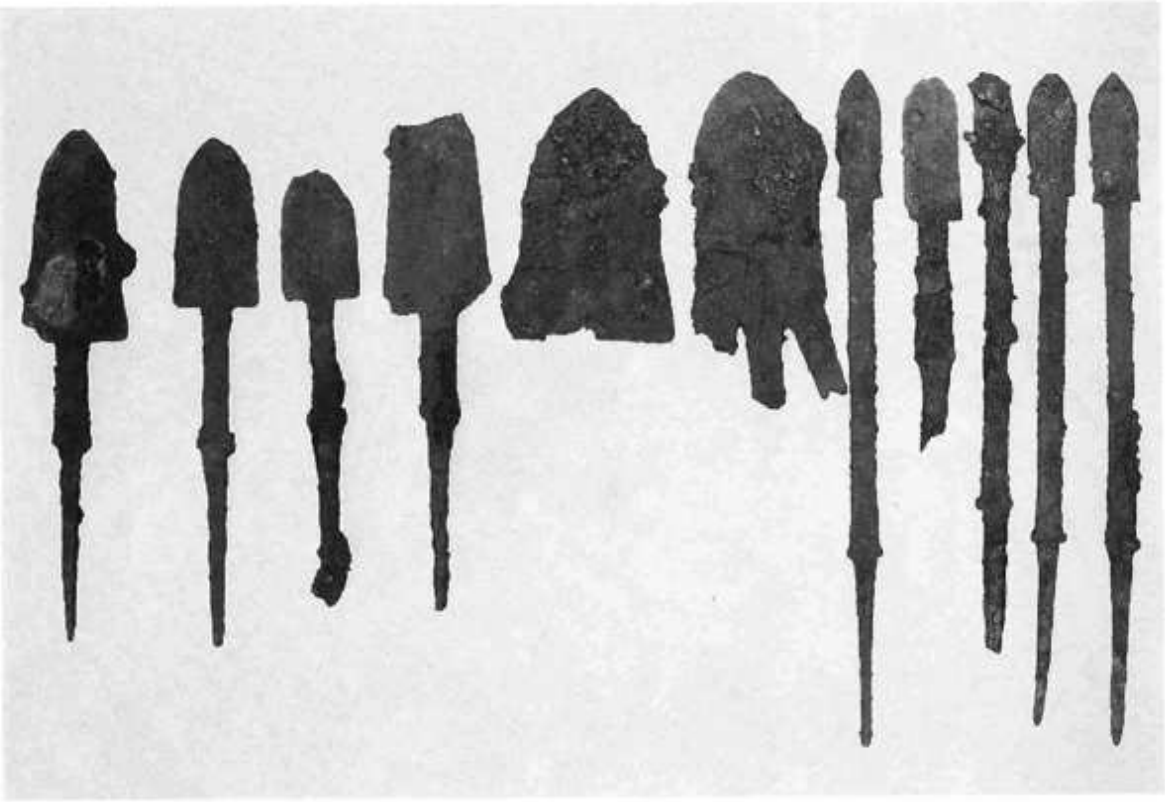


直刀・刀子・鍔

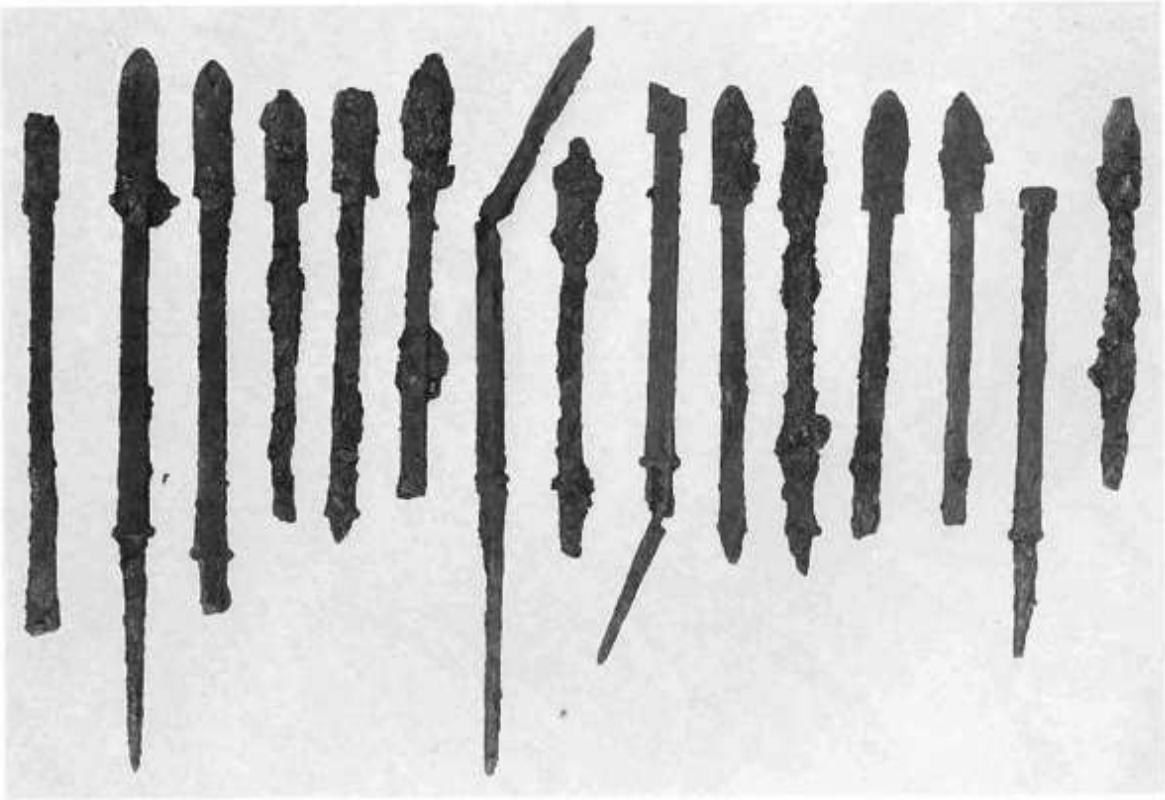
直刀・刀子・鉄鏃出土状態

鉄鏃出土状態

図版十四　第三号古墳

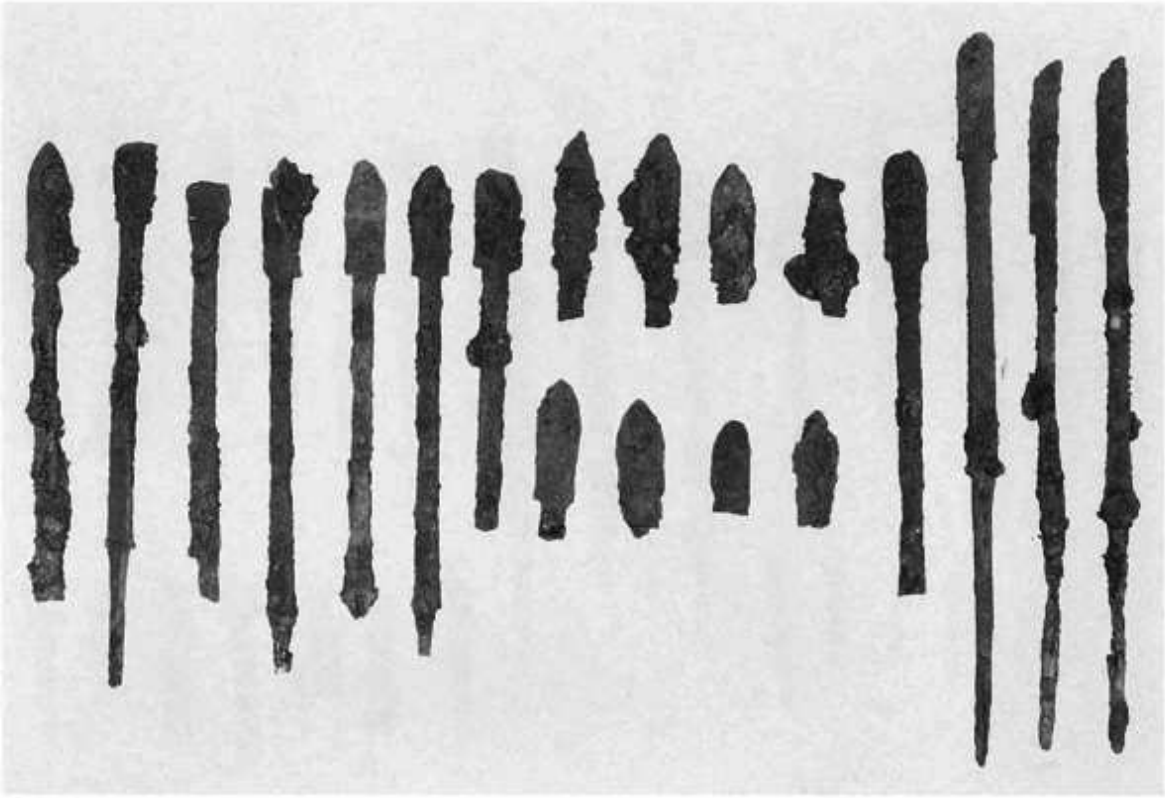


鉄鏃

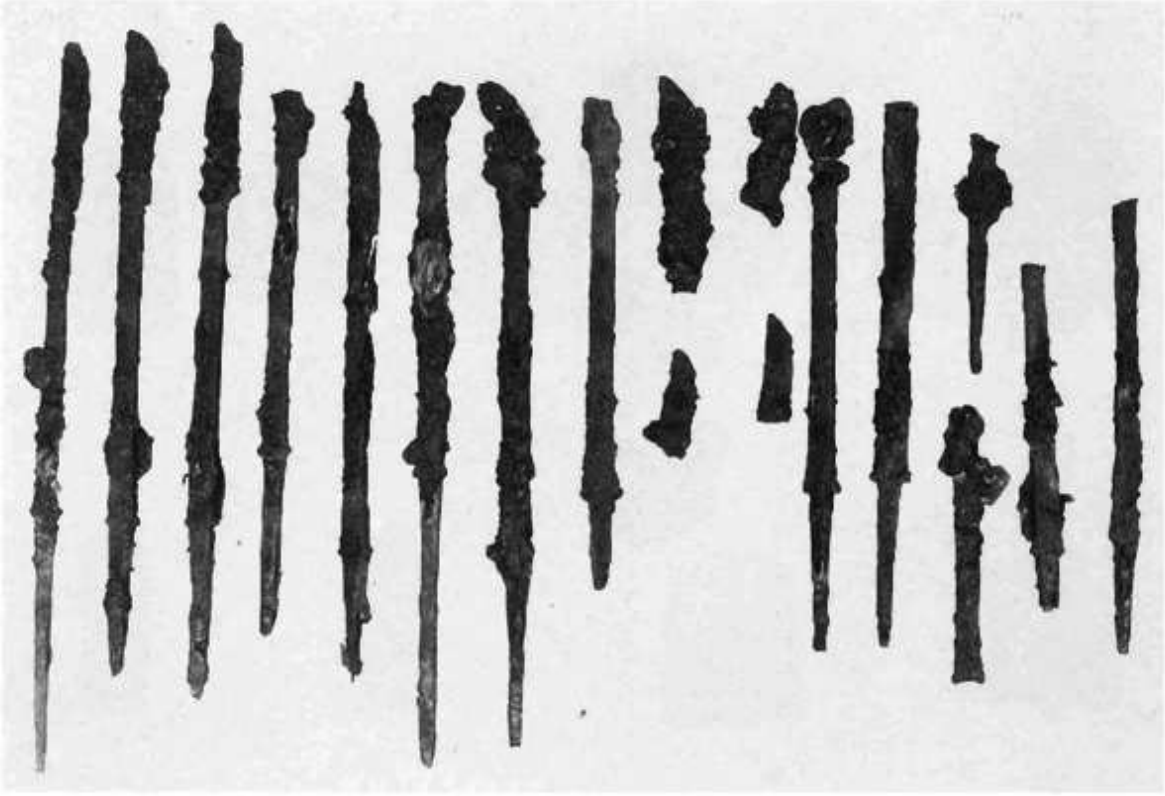


鉄鏃

図版十五　第三号古墳

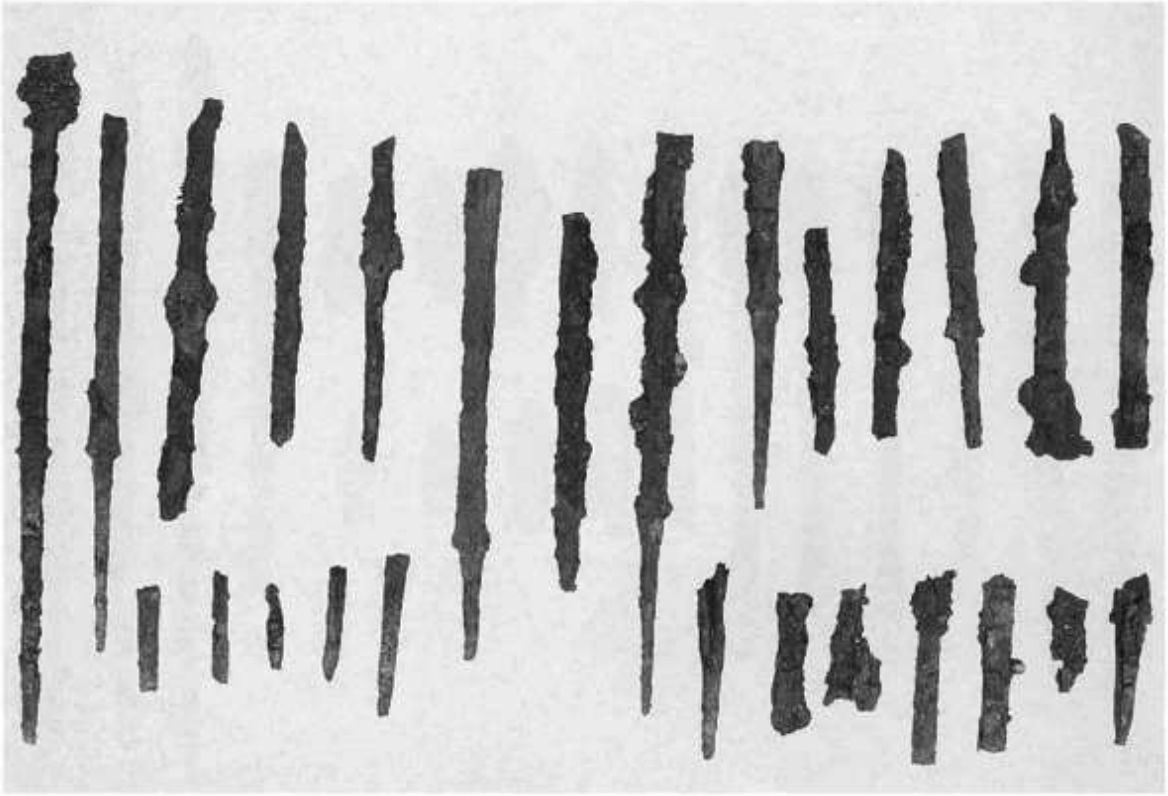


鉄鏃

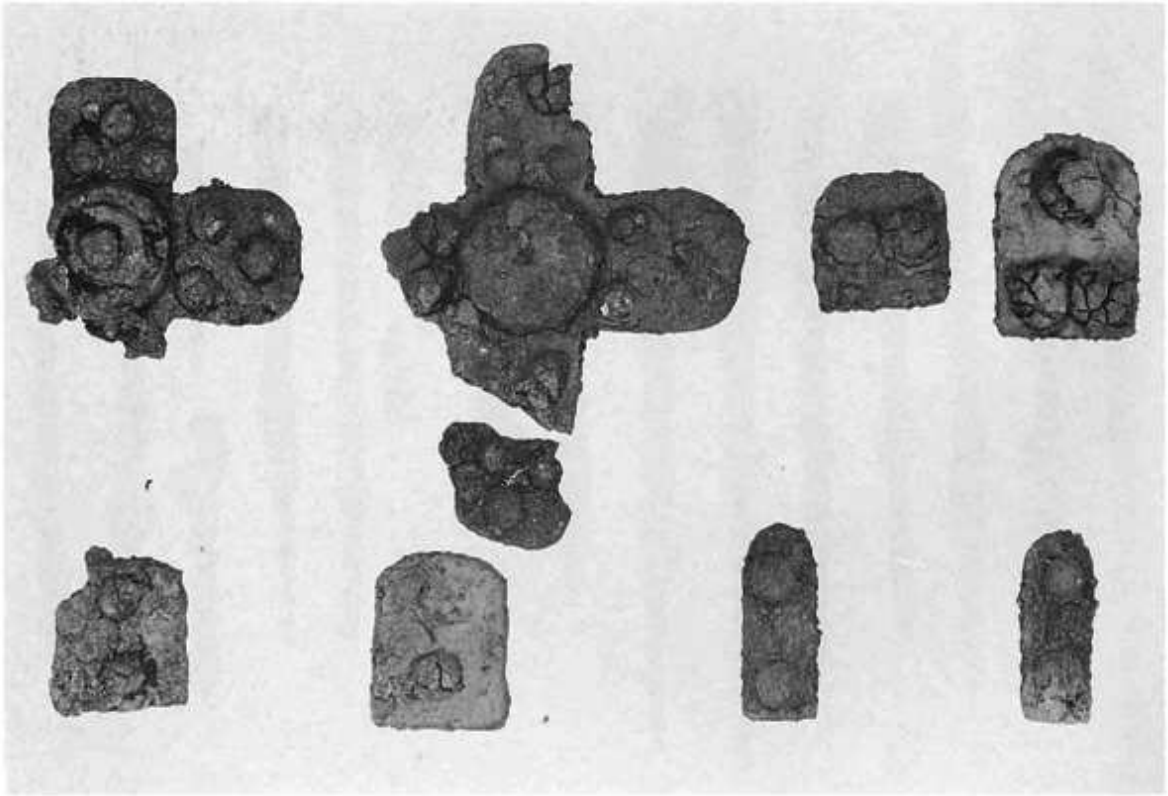


鉄鏃

図版十六　第三号古墳



鉄鏃

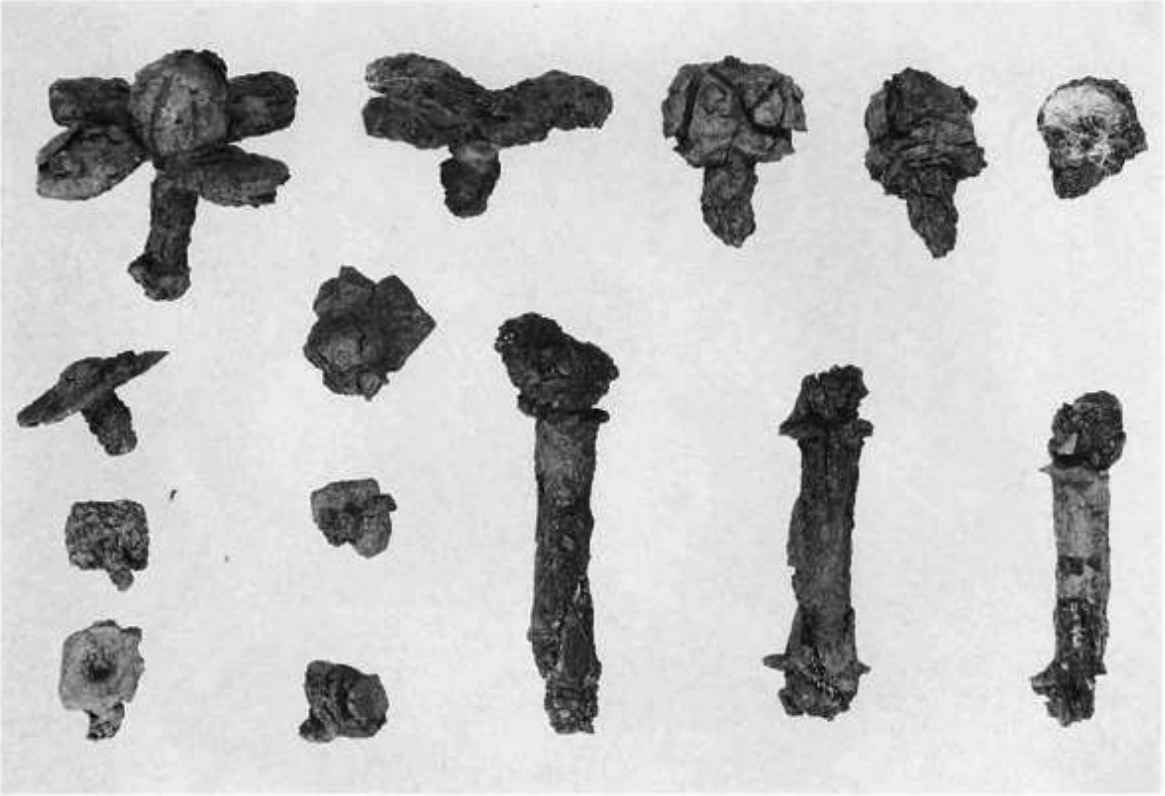


辻金具

辻金具出土状態

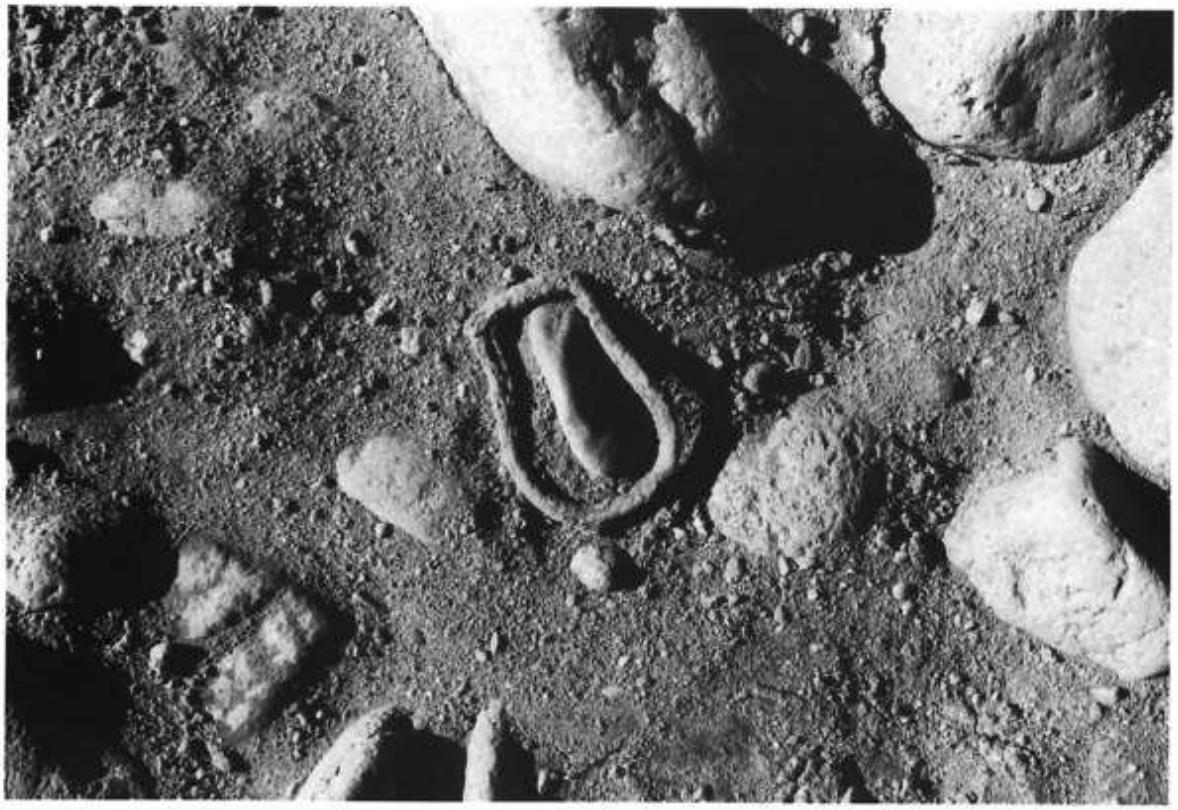
雲珠・胄出土状態

雲珠

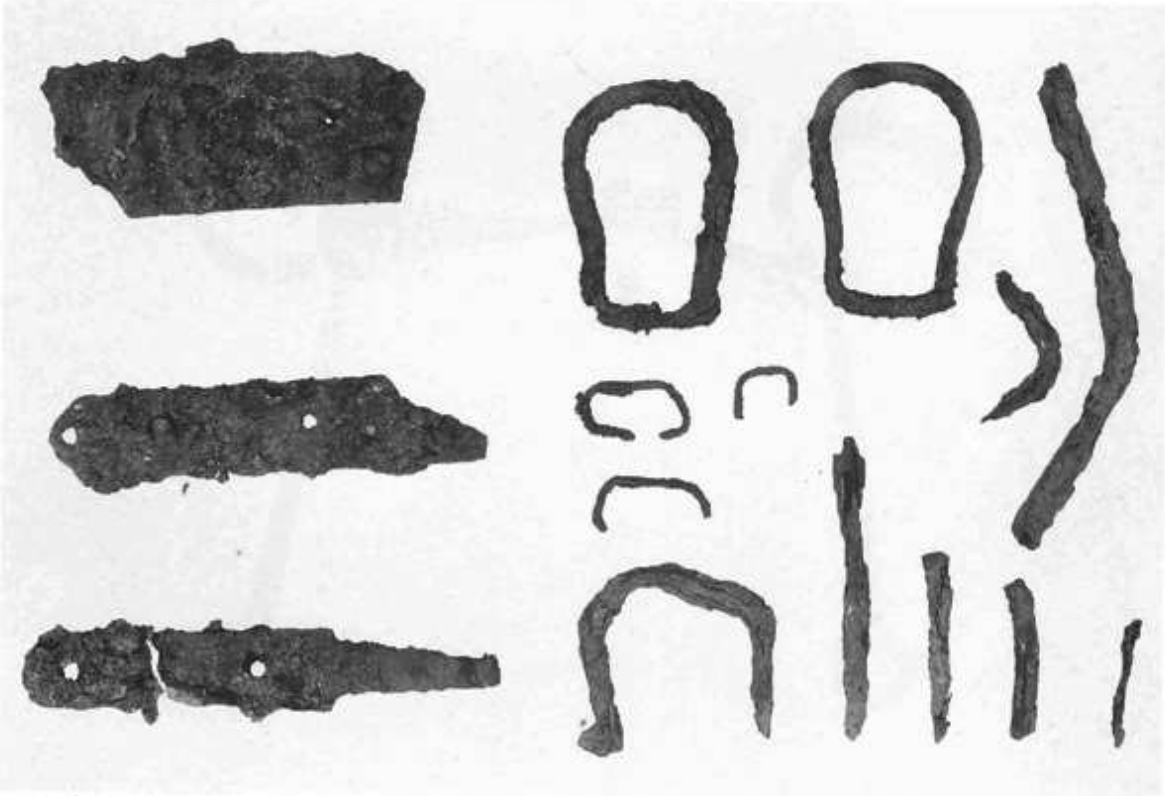


接合金具（鋲類）

図版十九　第三号古墳

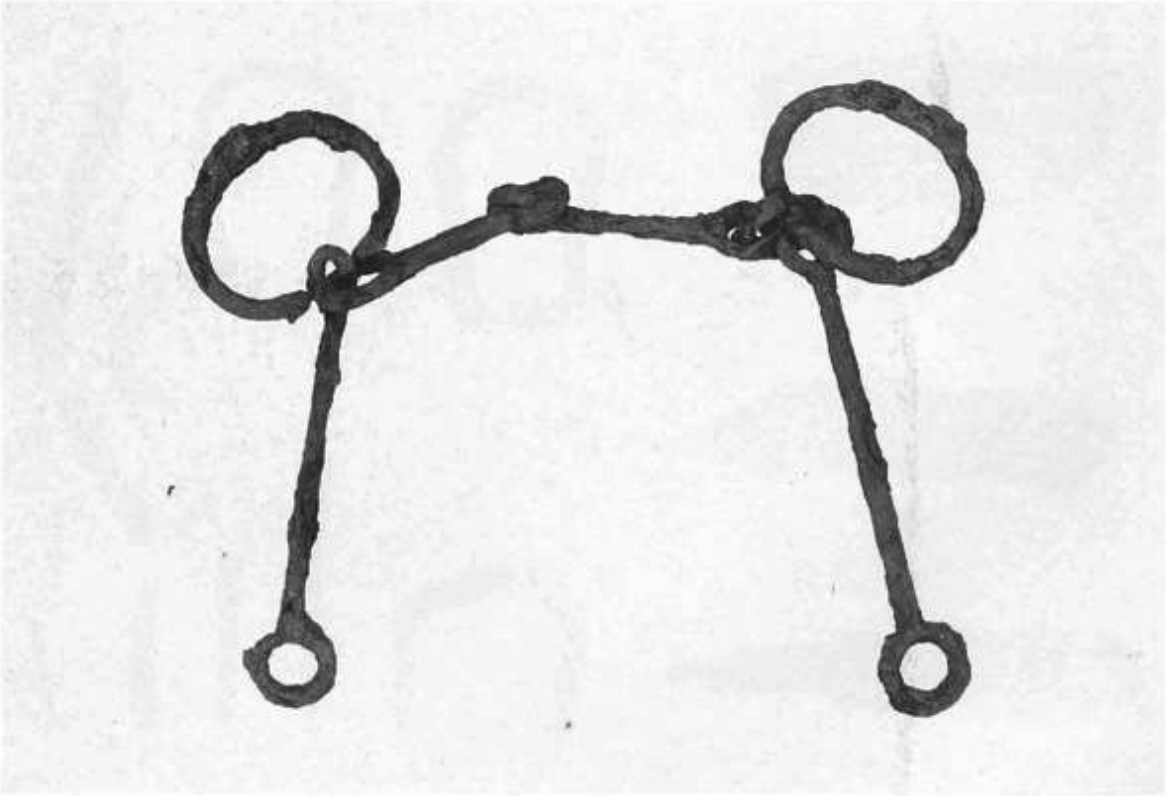


帶金具出土状態



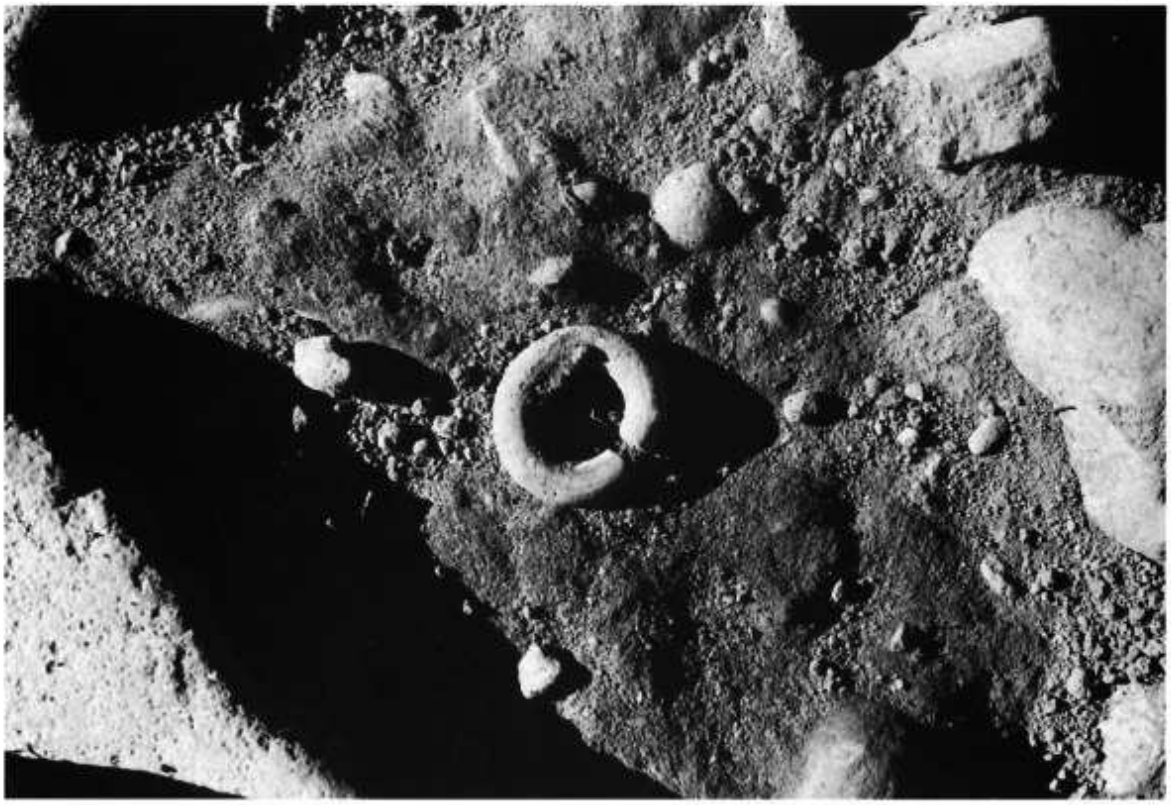
冑・帶金具・角クギその他金具類

轡・小形丸玉出土状態

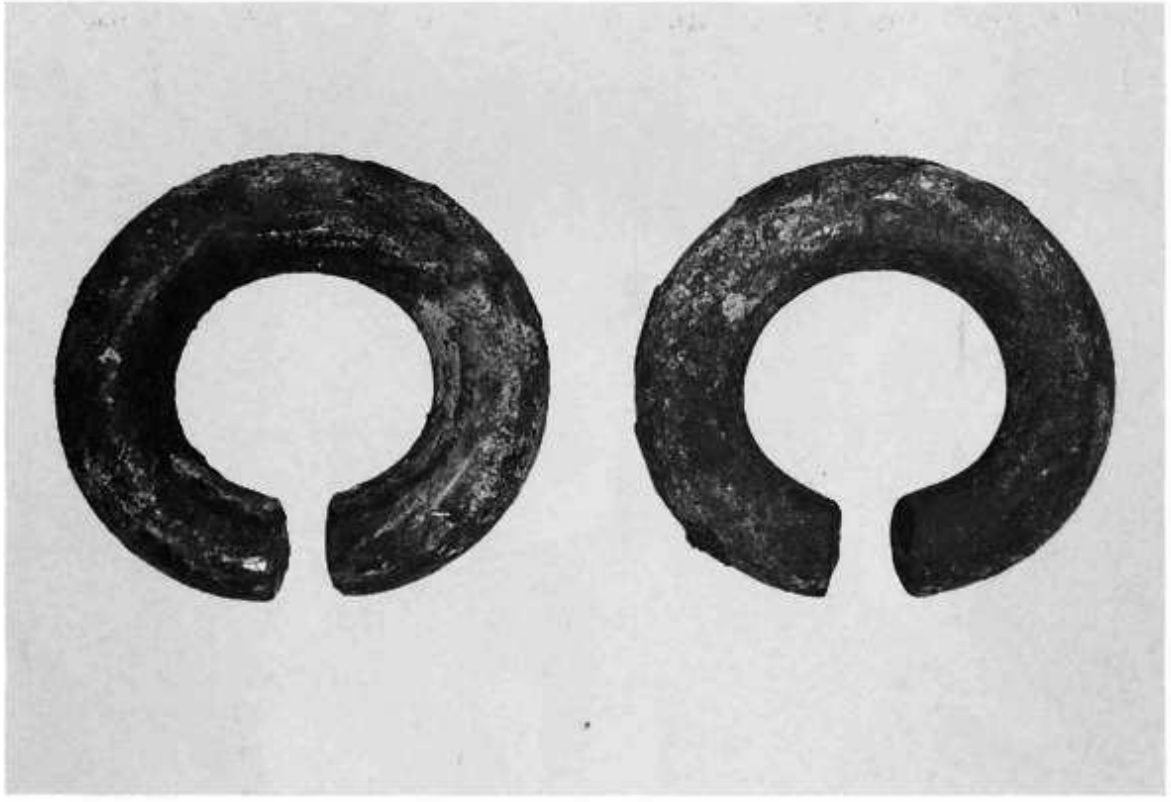


轡

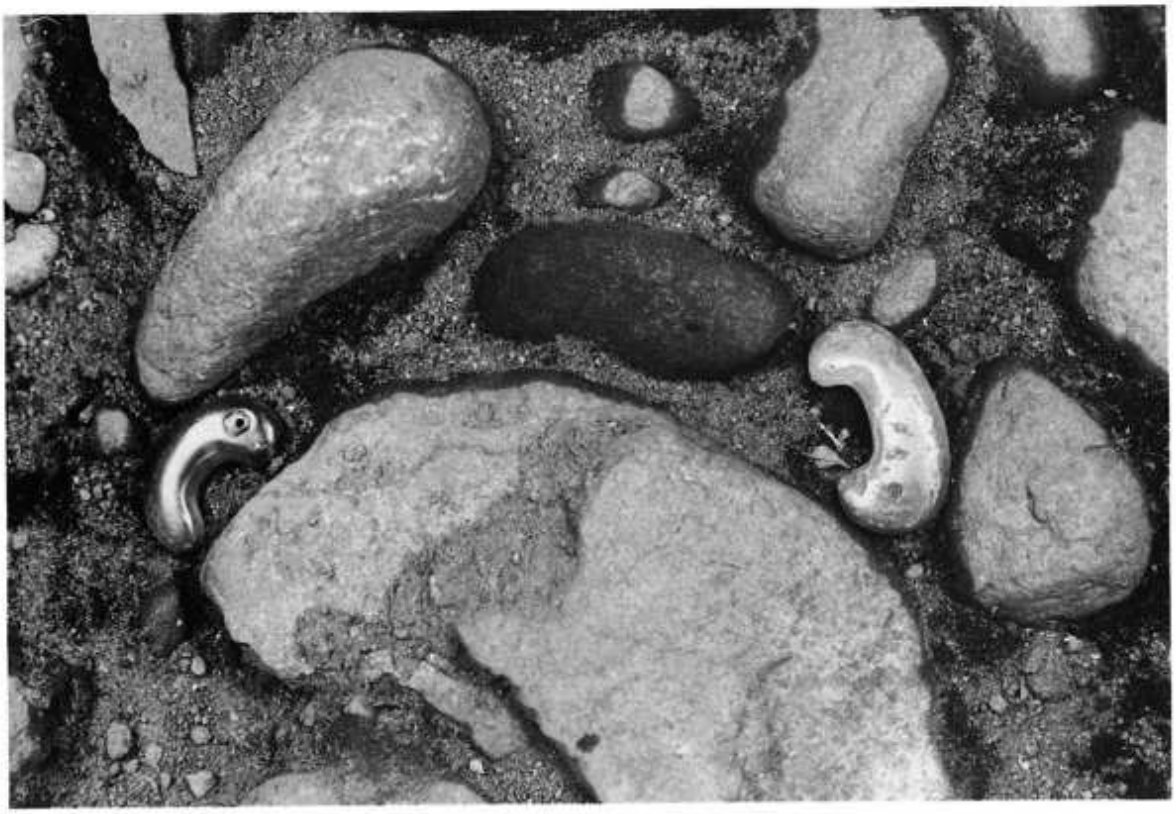
図版二十一　第三号古墳



金環出土状態

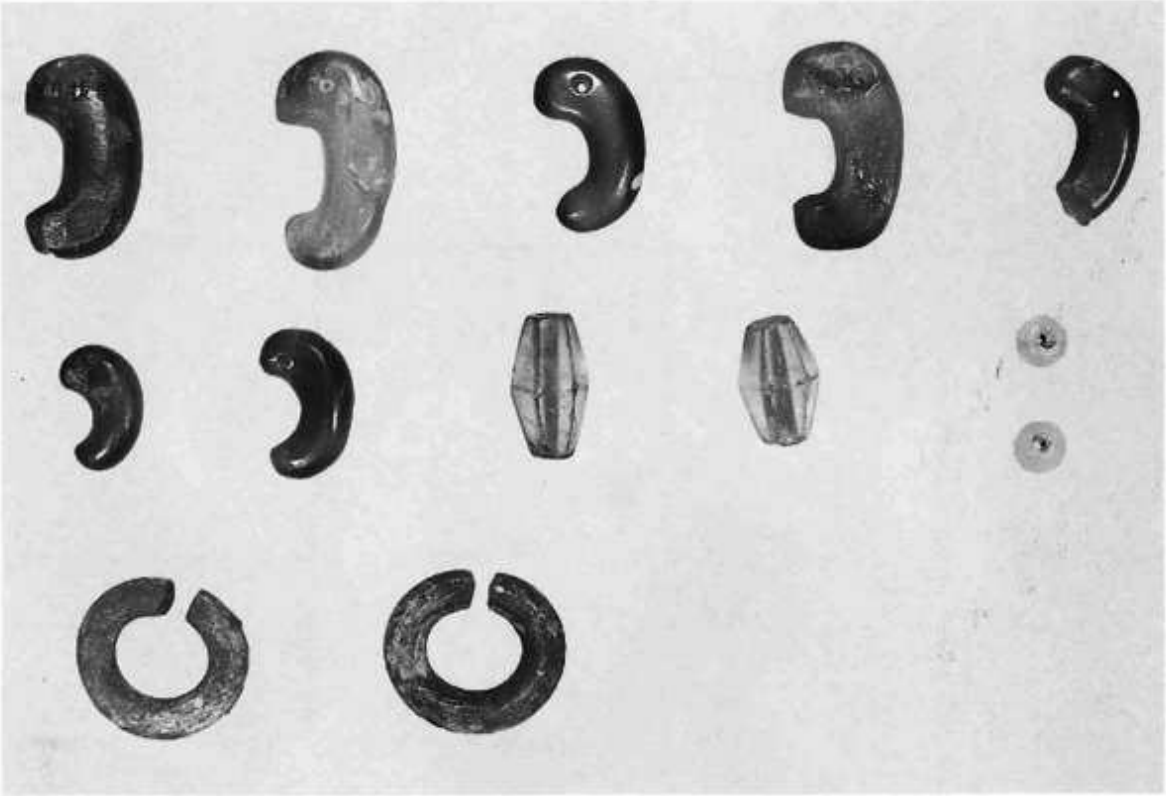


金環

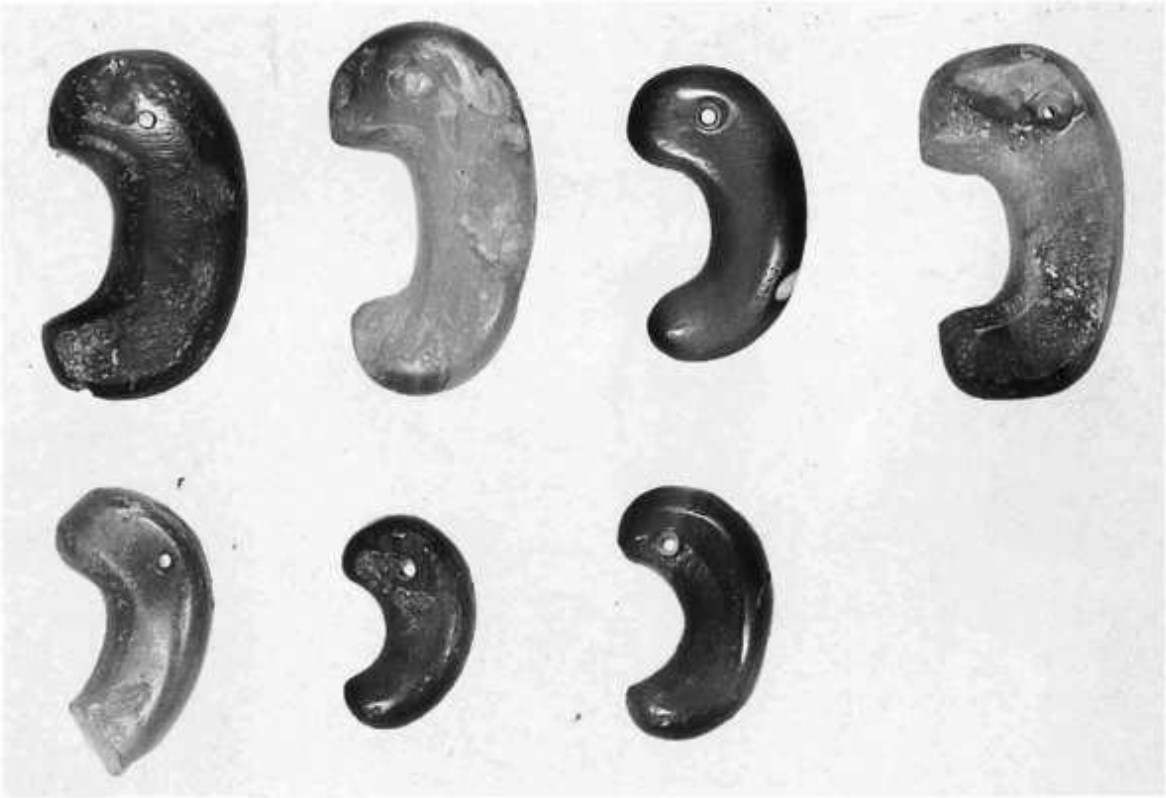


勾玉出土状態

勾玉出土状態

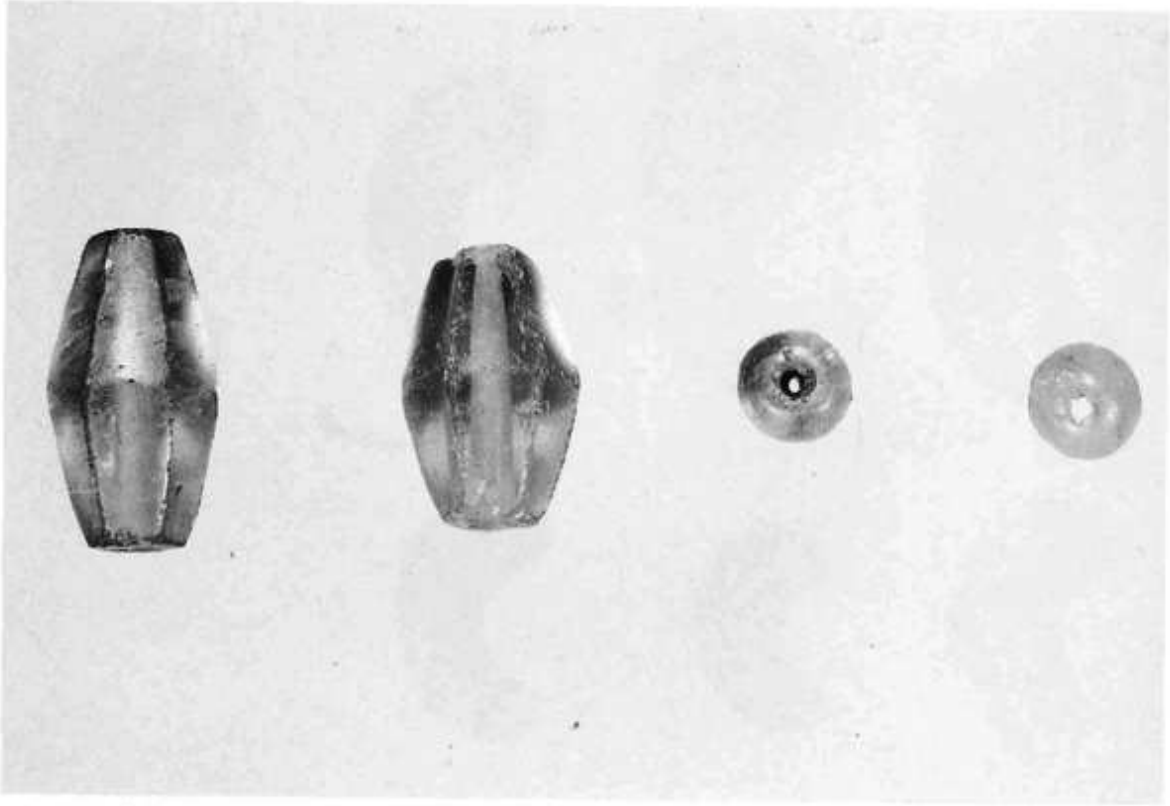


勾玉・切子玉・丸小玉・金環

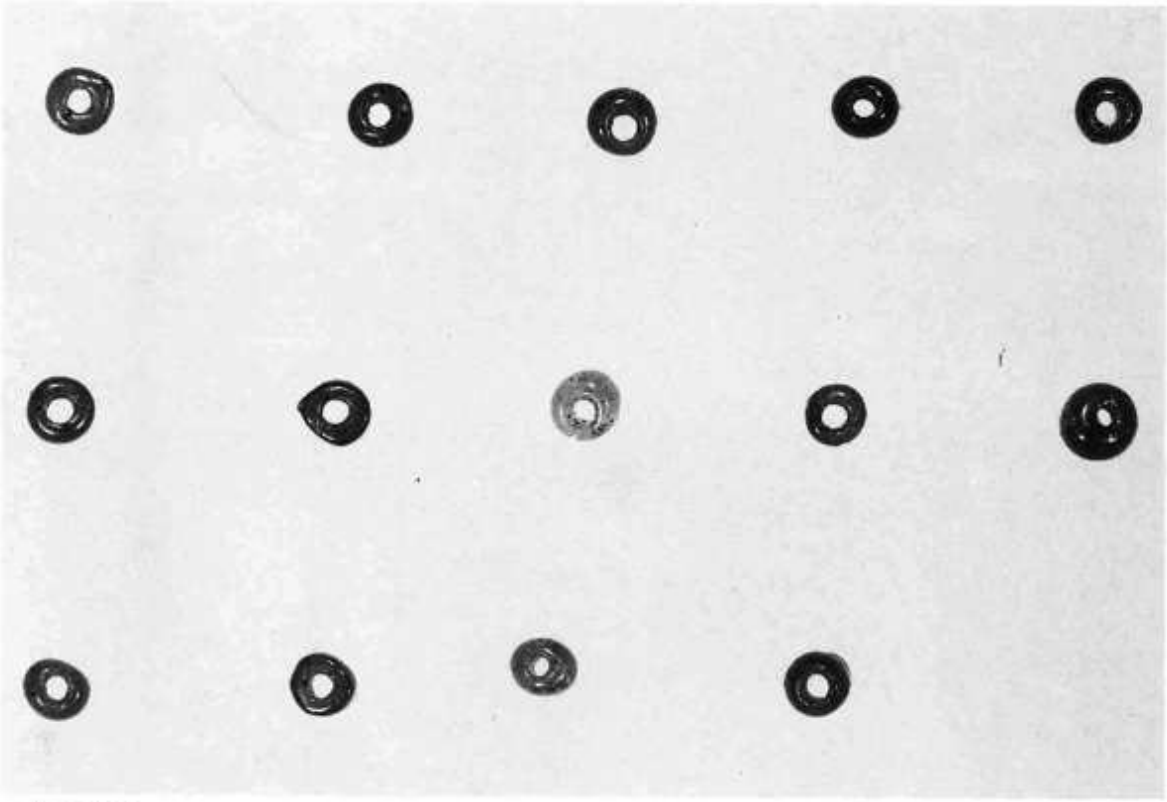


勾玉（拡大）

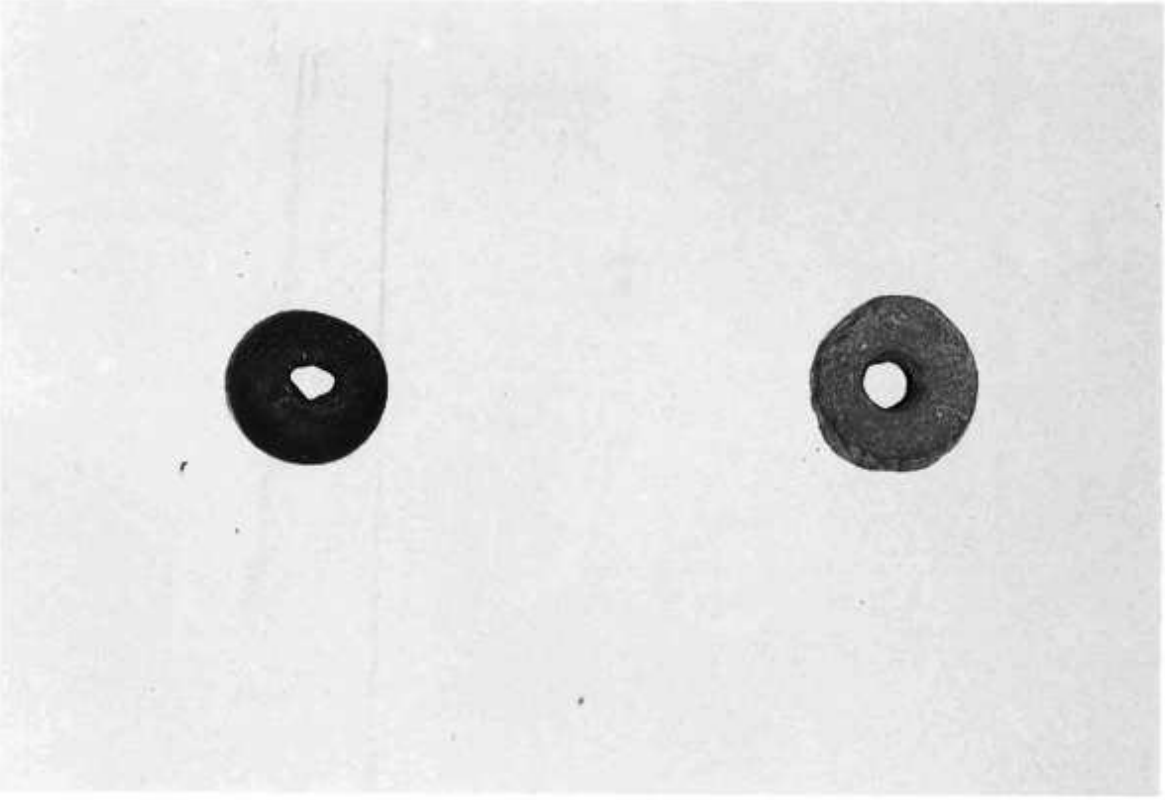
切子玉出土状態



切子玉・丸小玉



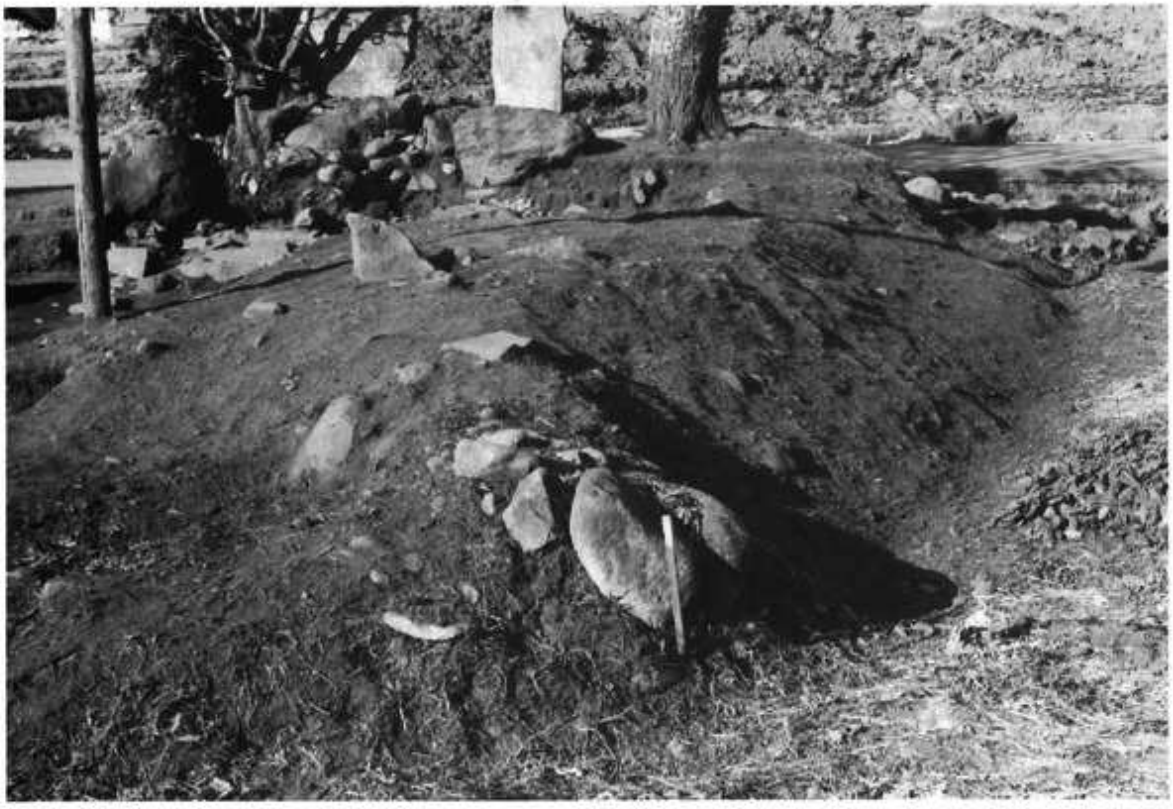
ガラス小玉



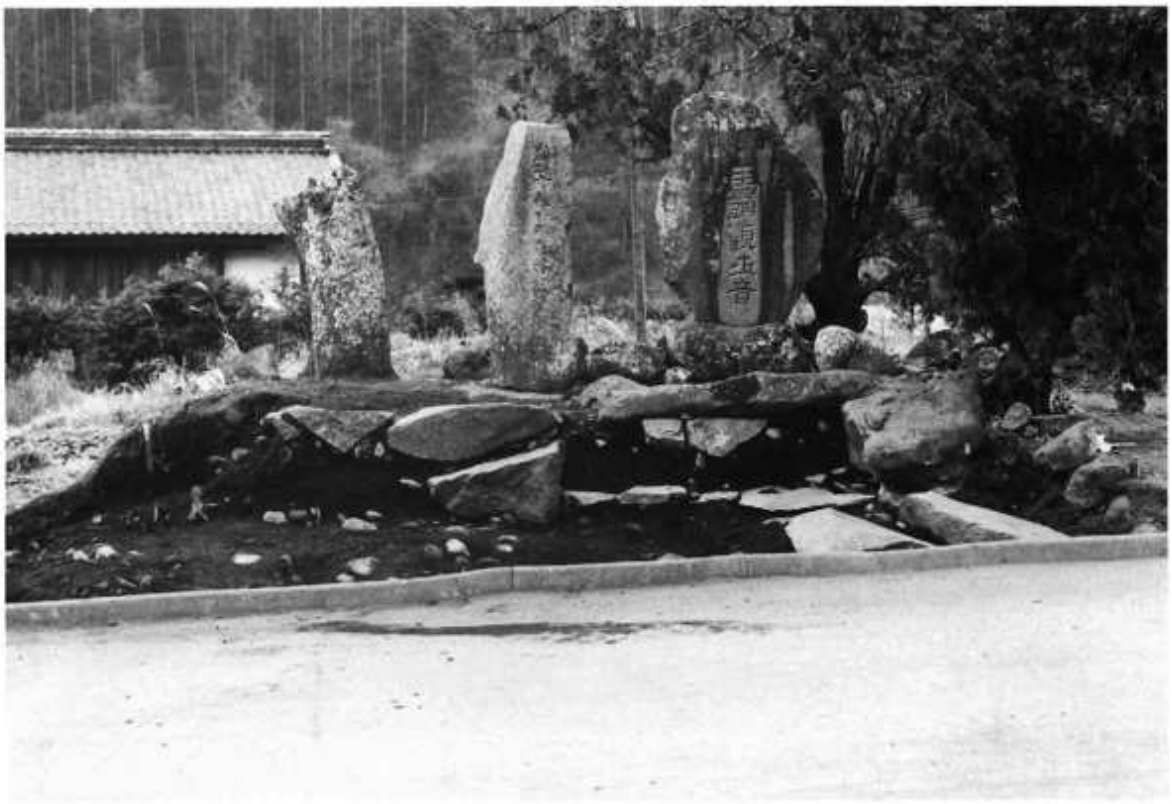
白玉

図版二十六　第四号古墳

第４号古墳全景（西側より）



第４号古墳墳丘全景（南側より）

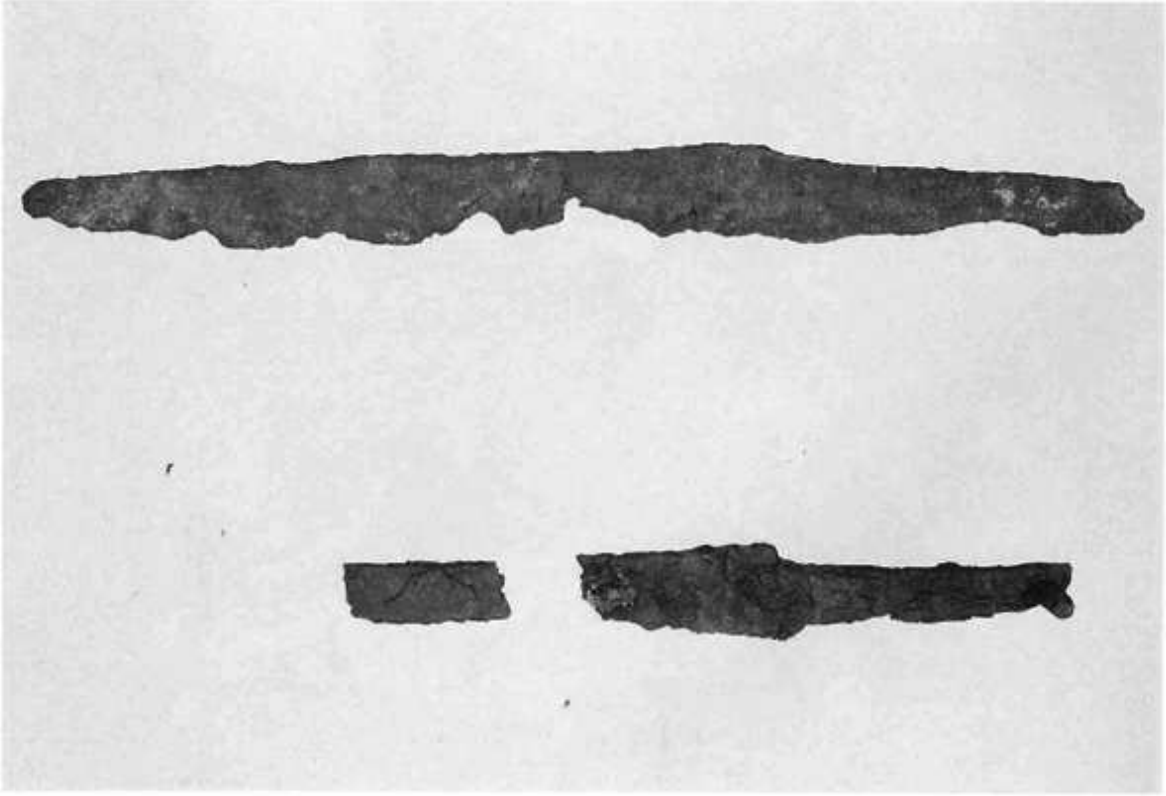


第４号古墳全景（北側より）

石室及び床面の状態

図版二十八　第四号古墳

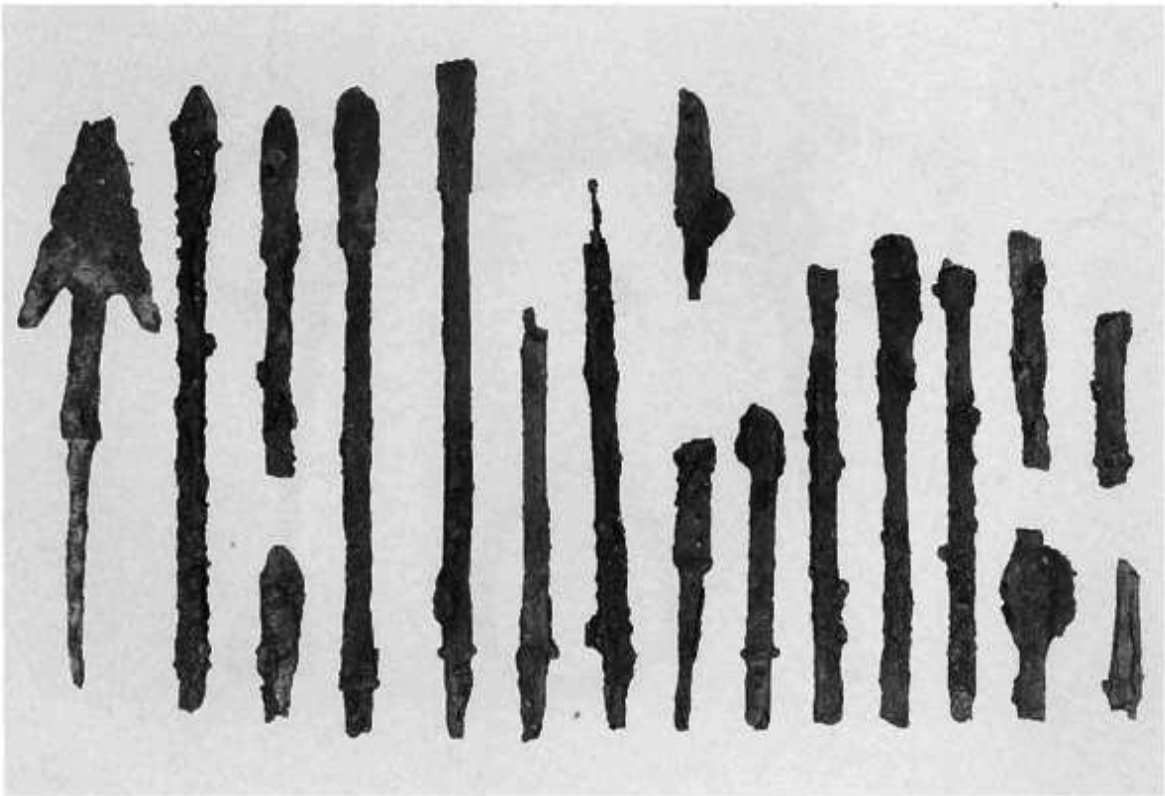
床面の状態



短刀

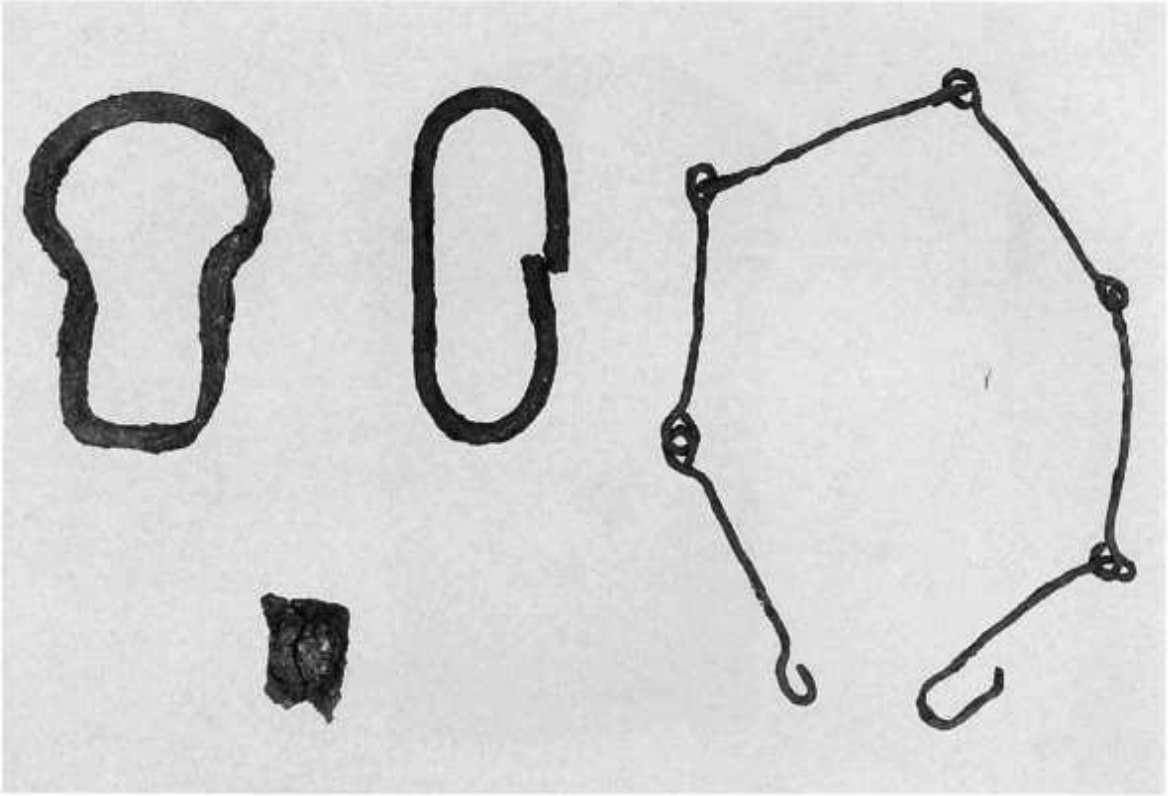
図版二十九　第四号古墳

太刀柄頭

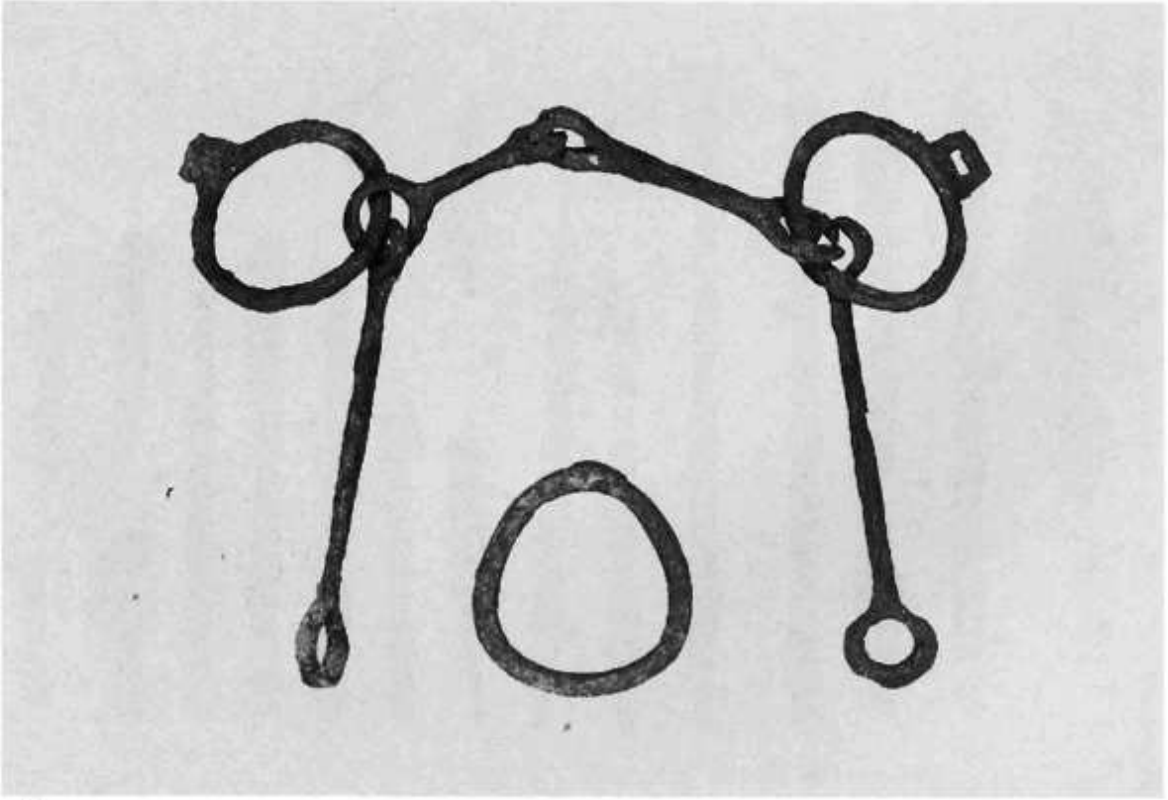


鉄鏃

図版三十　第四号古墳

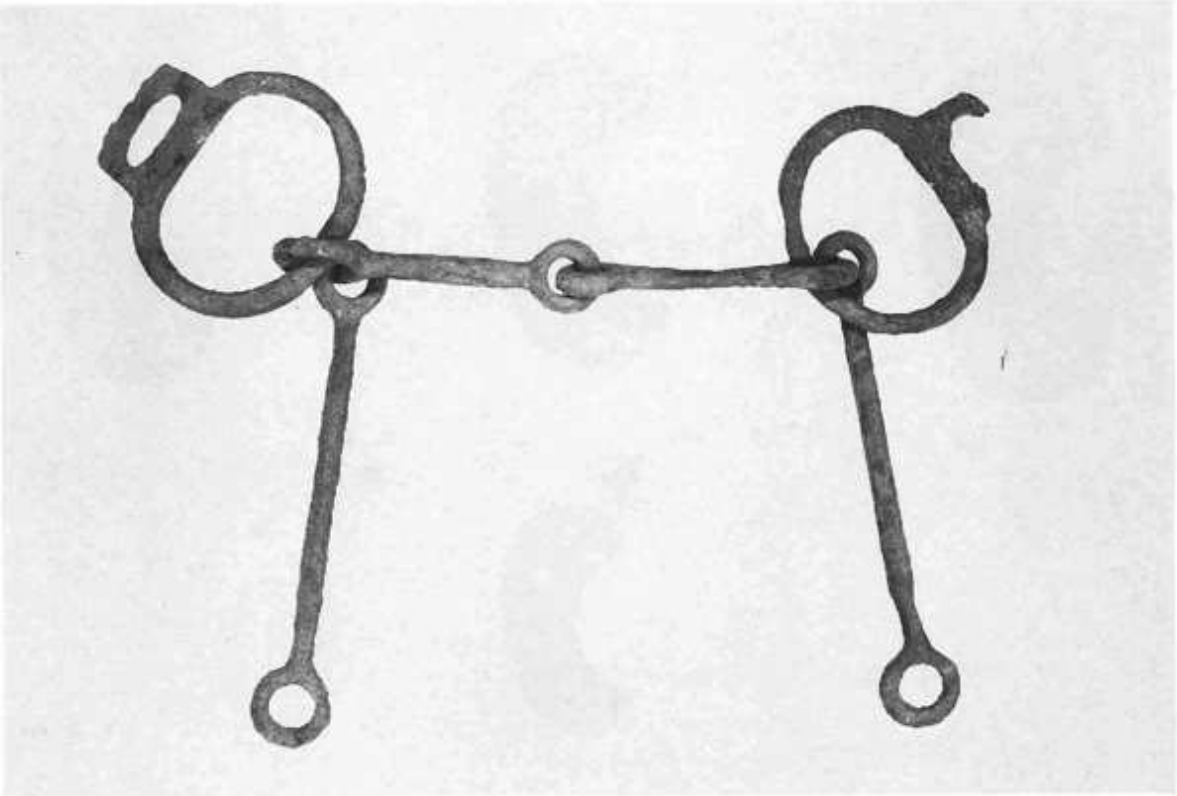


帶金具・鎺等

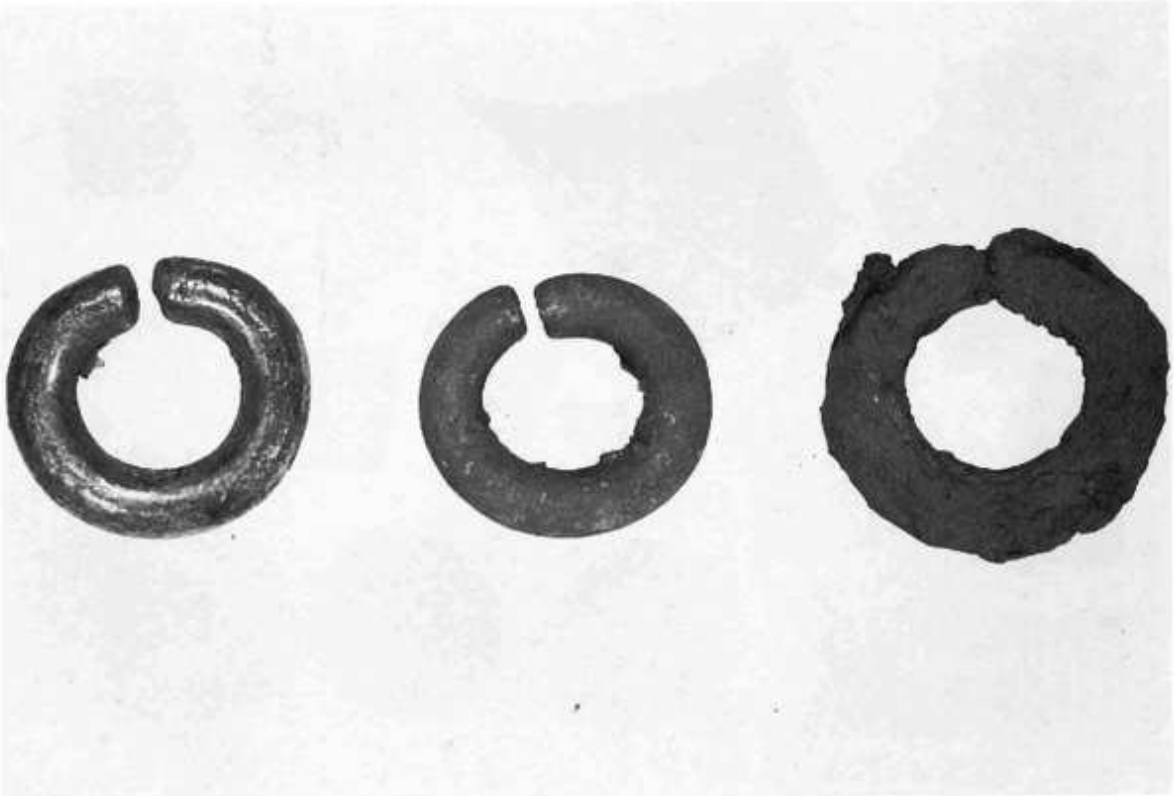


轡

図版三十一　第四号古墳

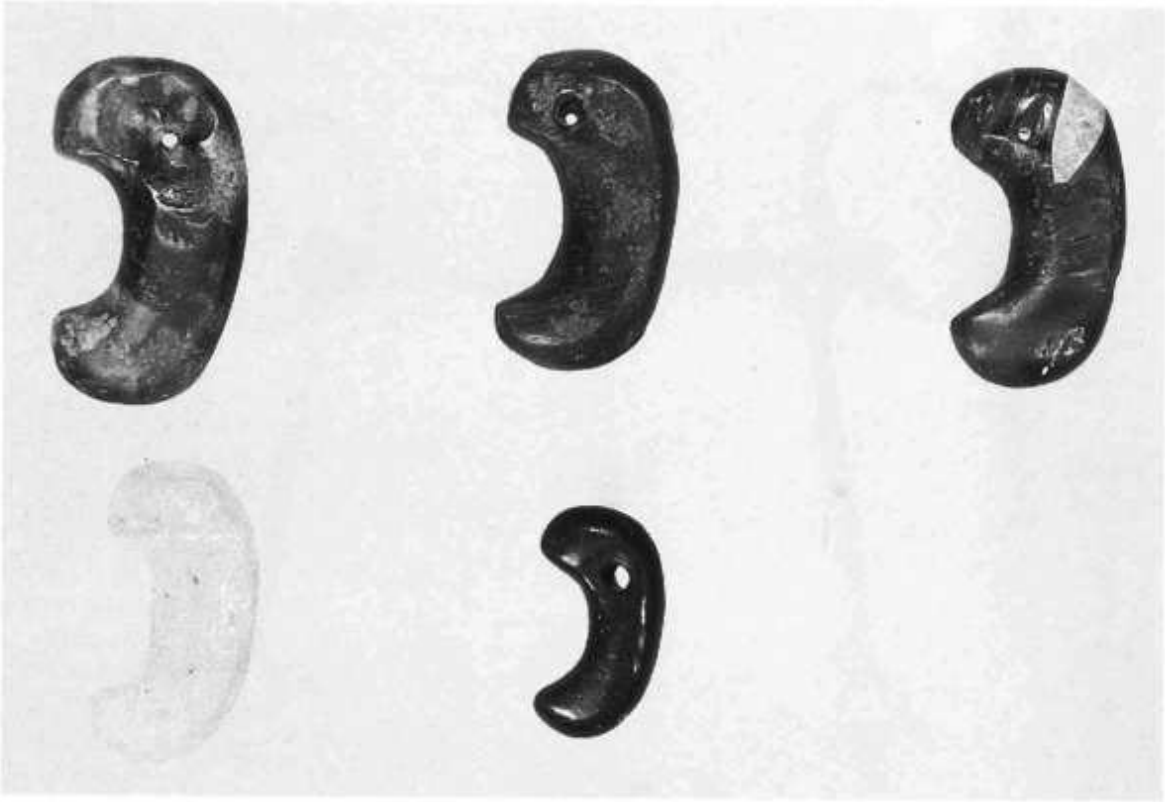


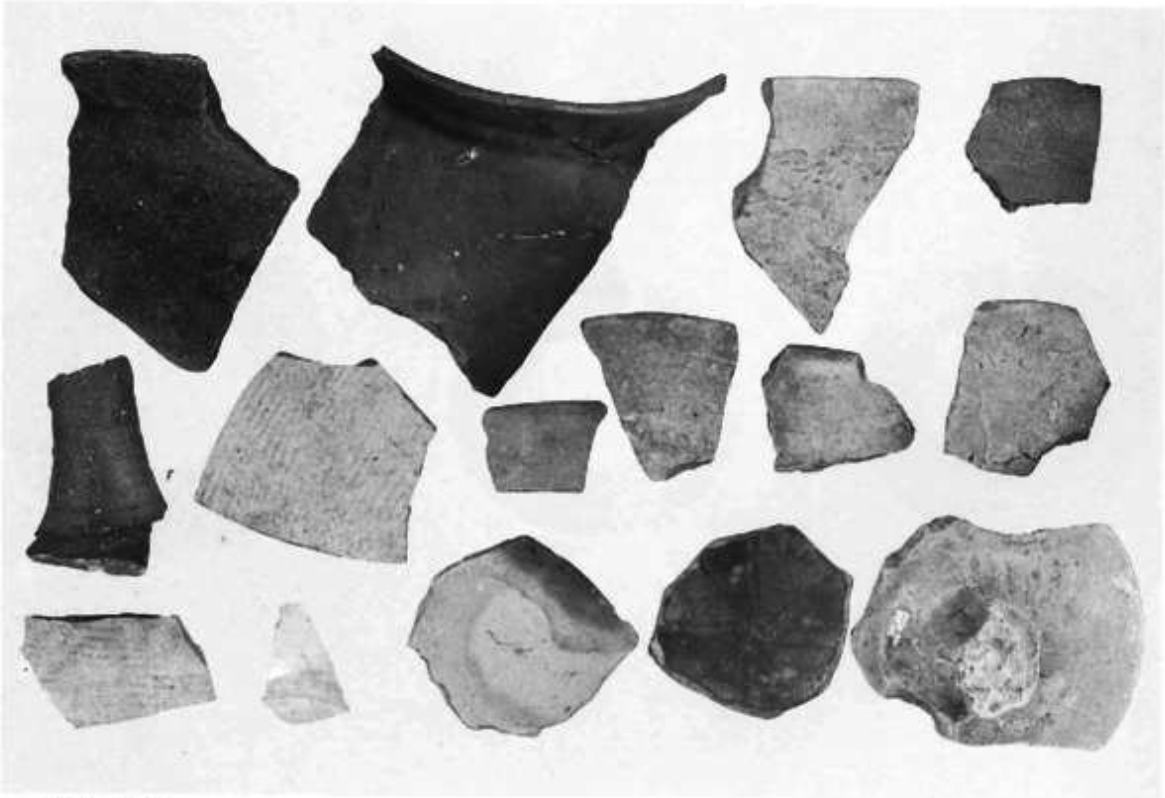
轡



金環

図版三十二　第四号古墳





土師器・須恵器

図版三十三　B遺跡及び経過

B遺跡土壙

神事

小野沢取入役

図版三十四　調査経過

調査風景

調査風景

調査風景

望月町文化財調査報告書　第1集　『下吹上遺跡』（昭和53年度）
第2集　『犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書』（昭和53年度）
第3集　『犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書』（昭和53年度）
第4集　『又久保遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和55年度）
第5集　『望月町遺跡詳細分布調査報告書』（昭和55年度）
第6集　『尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳緊急発掘調査報告書』（昭和55年度）
第7集　『新水A・B遺跡』（昭和55年度）
第8集　『金塚遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和56年度）
第9集　『寛光寺第1号古墳緊急発掘調査報告書』（昭和57年度）
第10集　『春日尾崎遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和57年度）
第11集　『後沖遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和57年度）
第12集　『栃久保A遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和57年度）
第13集　『竹之城原遺跡・浄永坊遺跡・浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和58年度）
第14集　『胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和58年度）
第15集　『望月城跡緊急発掘調査報告書』（昭和59年度）
第16集　『岩清水遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和60年度）
第17集　『平石遺跡緊急発掘調査報告書』（昭和63年度）
第18集　『上吹上遺跡緊急発掘調査報告書』（平成元年度）
第19集　『平石遺跡第2次緊急発掘調査報告書』（平成2年度）
第20集　『山ノ神A遺跡、山ノ神第3・4号古墳緊急発掘調査報告書』（平成2年度）

望月町文化財調査報告書　第20集
山ノ神A遺跡
山ノ神第3号古墳
山ノ神第4号古墳
——緊急発掘調査報告書——

発行日　1991年3月31日
編集者　望月町教育委員会
発行者　望月町
　　望月町教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社